督者(スチヤン)になれるのである。ヤコブはユダヤ人の嫌忌してゐた二三の事を禁ずると云ふ條件を附けた。尤も其は律法ではなく單に忠告にとどまつた。けれども少し不滿足な解決では有つた。ヤコブはパウロと其反對者との仲間を採つて兩者の妥協を試みたのである。パウロの要求を制限したものと見られるが、兎も角是でパウロの反對者も讐敵(かたき)にはならずに濟んだのである。

一一四　重荷を下して

エルサレム・四十歳から五十歳

集會が解散して一同が家に歸つて各自話合つて見ると、さてヤコブの判決は此大問題を充分解決したものでなかつた事が明瞭になつて來た。皆が之に服したと云ふ譯ではなかつた。パリサイ派クリスチヤンは矢張自分達の主張を固持してゐた。パウロ、バルナバ、ペテロは、外國人はユダヤ人の律法を一つでも強いられる筈でないと云ふ意見を變へなかつた。ヤコブは頭髪を斷つた事が無く屠殺した肉も酒も食つた事なく、大低は神殿に住んでゐてユダヤの律法に從順にしてゐた男である。彼は外形の墨守を重んじたが、イエスは全然無視した。その樣な人だからヤコブは割禮のことではパウロに倚り、肉を喰ふな云々の點はクリスチヤン・パリサイ人(びと)に加擔して、ユダヤ人會堂(びとのくわいだう)で律法の讀まれることを讃美したのである。結果は、クリスチヤン・パリサイ人(びと)は依然としてパウロ及外國人クリスチヤ

ンに惡感を持ち、パウロ等の方ではヤコブの與へた條件を無視して省みなかつた。

たゞヤコブの妥協案は、他の使徒達長老連に滿足を與へた、パウロも大切な點で勝つたのであるから、自分の宣教に妨げの無い事ではあり、其儘に放任した。後日念の爲にと云ふので、ヤコブや長老達は手紙を書いた、が其を七百哩の道を來たパウロには渡さないで、エルサレムの好クリスチヤン、ユダとシラスを使者としてパウロに伴うてアンテオケまで行かせ手紙の內容を向ふのクリスチヤンに說明させる事にした。パウロとバルナバに其事を託さなかつたのは奈可(ぞうい)云ふ理由(わけ)であつたか不明である。

此手紙は今殘つてゐるものゝ中で最古いクリスチヤン回狀である。回章は後に澤山行はれたが就中大切なのはパウロの回章であつた。此手紙は先づ使徒及長老達からアンテオケ、スリヤ、キリキヤの外國人クリスチヤンへの挨拶を以て初り、而して曰ふ、——

「我等のうちの或る人々は、われらが命じも爲ないのに、言を以て汝等を煩はし、汝等の心を亂したと聞いたから、我等一致して人を選び、我等の主イエス・キリストの名の爲に生命を惜まなかつた者である、我等の愛するバルナバ、パウロと共に汝等に遣すことを可決した。其決議によつてユダとシラスとを遣はす、彼等も口づから此等のことを述べる筈であるが、聖靈と我等とは、左の肝要なるもの の他に何をも汝等に負はせぬが可いと思ふ。卽ち偶像に獻げた物と血と絞殺した物と淫行とを避くべ

きことである。汝等これを愼めば善い。なんぢら健かなれ』

バウロはエルサレムで此手紙を見たであらうか、其にしては外國人は割禮不要だと云ふことが明言して無く、其爲に敵は自由に其點も論ずることが出來るし、おまけに理由の分らないユダヤの規則に從ふ要求が加つてゐる。エルサレムでは金の神殿、敎法師の學校、無數の會堂、高等法院、祭禮、犧牲などで固められてゐるから、基督敎の爲には息をつく隙間も無い位で、其はバウロも知つてゐる。多くの人は基督敎は古いユダヤ敎の一派で、少しモーセの律法に加へた、國敎の一宗派だ位に思つてゐた。然しバウロにとつては、古い習慣などとは緣も由緒もない新宗敎であつた。

バウロは前にエルサレムで說敎した事が有るが、此度は試みなかつた。暗黑に漂ふ市と國は光明を待望んでゐた。活ける神に就て聞いたことの無い人々は死んだ偶像の前に脆いてゐた。獸慾を追うてゐる許多の人々はイエスの高潔な生涯に從つて努力すべく準備が出來てゐた。傳道の門戶は今や廣く開かれてゐる。バウロはエルサレムを去るに如かずである。規則に括られた此都の空氣に呼吸がつまりさうであつた。

バウロは、使徒の中の最良の友老ペテロに別れを告げて、都の狹い門を出た。伴する者はバルナバも一度旅の友たるマルコ、それからユダとシラス、またアンテオケから此問題解決の爲にバウロと共に來た人々であつた。此人達は、驚畏の眼を擧げてイエスの生殘つた兄弟や主と共に歩みまた語つた

人々や、主が苦き十字架に釘けられて斃るゝを見また甦れる救主を見たクリスチャン邊を仰ぎ見た。金の神殿の壯大なる外庭に立つて、祭司の吹き立てる喇叭の音を聞いた。薔薇園の切石の墓に詣でては涙に兩頰を濕した。今見た事を皆友に語るべく、自分等の市をさして歸るのであつた。

まだ冬であつた。樹々には葉無く、流は急に、北方の峯は白布を纏うてゐた。來た道を歸りながら道途クリスチャン達に、成功を報告して皆を喜ばせた。六週間してアンテオケに歸つたと云ふ報告が傳はると基督者達は報告を聞くべく馳せ集つた。かの手紙が、敎壇でユダとシラスによつて讀上げられた。會衆はバウロとバルナバが正しかつた。先に煩を起したユダヤ人等は使徒達の代言者では無かつたのだと云ふ事を聞いて大いに喜んで、憘し泣に泣いた。アンテオケの敎會員は皆なイエスを信ずる信仰によつて救はれた眞實のクリスチャンである。彼等は二人の使者が愈信仰に固く立つことをすゝめて決議の意味を確言したのを熱心に聽いた。斯くてアンテオケの敎會に起つた騷は沈靜した。が其は、ほんの一時で、クリスチャン・バリサイ人は再たやつて來て、ユダヤ人と外國人との間に敵意を挿挾まんとするのである。

ユダとシラスはシリヤやキリキヤの町々に往つたか記して無い。手紙を讀んだ上は都に歸るつもりであつたらしい。別れの會合を聞いて、アンテオケの信徒達は二人の平安を祝した。其時ユダは直ぐエルサレムに歸つたが、シラスは留る事にした。彼はこゝの人が好きになつたし、また此手紙をエル

サレムから來た間違つたクリスチヤン達の爲に煩はされた他の教會にも往つて讀む用向も有つたからである。パウロとバルナバも市に留つて多くの人々に傳道した。アンテオケは今や最有力な富祐な基督教の中心地となつたのである。

一一五　激論

アンテオケ・四十歳から五十歳

アンテオケの冬は、雪と霙、日光と雨の裡に、木枯風樹技を折り、雨水山道を洗ひつゝ徐に過ぎていつた。連る丘陵、市の下の森に春が來た。セルーシャの港では船頭達は曳綱を調べ、日當りよき日には黄や茶の帆を高く干し、船を繕ひペンキを塗つて港内に浮べた。地中海諸島の夏期の通商漸く開かれんとするのである。

やがて廣い河の岸は、樫、桂、杜松の青葉、風にそよぎ、野菊は枝に綠のリボンをつける。日光の射す地には野花咲き、どこの谷間も窪地も欵冬やオランダゲンゲの黄金色・クロバーの香、紺の斑點ある雁來紅、安石榴や夾竹桃の紅蓮の塔で一杯である。鶴は大空をかすめて長い列をなして歸つて來る、商人や飼羊者は驢馬の行列、羊の群を率ゐて街道を往來する。旅行の期節が來たのである。

パウロはエルサレムから歸つてから數ヶ月、アンテオケの教會員を訓育奬勵したので、胸の中には

傳道旅行の欲望が燃え立つてゐた。アンテオケには今や澤山の教法師も傳道者も出來た、パウロが居なくともよい。パウロは遂に親友バルナバと、一緒に旅行に出掛ける相談を持掛けた。「いざ我ら曩に主の御言を傳へた凡ての町にまた往つて兄弟達を訪ひ、その安否を尋ねようではないか。」パウロの心算は彼が過去十五年間シリヤ、キリキヤ、クブロ及ガラテヤの地に傳道した凡の町を訪ねやうとするのであつたが、バルナバも是に賛成した。處でバルナバは自分の姪マルコを同伴し度いと思つたがパウロは左樣考へなかつた。前の旅行の時大切な場合に臨んで、マルコはペルガからパウロ等を棄てゝエルサレムに歸つて了つたのである。パウロは此マルコを伴ふことを好まなかつた。むしろシラスの方がヤコブの手紙を讀む使命もあり、結構用が出來ると思つた。然しバルナバはどこまでもマルコを主張する。パウロも敗けない。バルナバはマルコと一緒でなければ行かぬと云ふ、パウロは一緒なら往かぬと云ふ、遂に親友の間に激論が起つて結極此度は一緒には往かないことになつた。

善い人々でも喧嘩する時には正義を失する事が在る。パウロが旅行を言出したのだが、バルナバはパウロには勝手にさせて自分はマルコを伴ひセルーシャ港に下つた。其處で便船を見附けて己の故郷クブロ島に渡り、先年パウロと一緒に歩いた順序に從つて町村を訪問した。彼がかく急に旅立つた時アンテオケ教會が何か助を與へなかつたか不明である。

パウロは自分の爲には多くの事を爲てくれた親友がこのやうにして去つて行くのを見るのは遺憾で

あつた。けれども彼は意志の強い人である、一度斯うと思ひ定めた事は無二の親友でも動かすことが出來なかつた。パウロはエルサレムで自分を快く受納れて呉れ、タルソまでも探しに來てくれたバルナバ、病の時には側に居、つい先程も自分の爲に敵と闘ふべくエルサレムに往つてくれたバルナバと離別れた。彼等が再會の機を得たと云ふことは記錄にない。バルナバはクプロに往つた限り、アンテオケに歸つて來たと云ふ記事もない。たゞしマルコは歸つて來た、パウロは後にバルナバとマルコの事を親切な言で書いて居るから、旅行にこそ一緒に行かなかつたが、別に敵意を持つてゐなかつたと見える。

パウロは少し悠くりして往つた。そして一人の伴侶を得た。シラスは彼と同じくローマ市民權を持つてゐて、エルサレムに生れた人ではなかつた。パウロはアンテオケに於ける彼の熱心振を認めて、バルナバの代に伴侶たらん事を求めた。シラスは快諾し、事實良い旅の友であることを證明したのである。信徒達は嚴かな別れの會を催して熱心な言で祈つて二人を神の御手に委ね、神が二人の安全を守り其働を祝福し給はんことを乞うた。パウロは留守中一同が忠實ならむ事をすゝめた。其言は記されてないが、彼の書簡に次の如き言がある。——

「妻たる者よ、主に服ふごとく己の夫に服へ、……夫たる者よ、キリストが教會を愛し、之がために己を捨て給うた如く汝等も妻を受せよ。……夫はその妻を己の體の如く愛さねばならぬ、妻を愛する

は己を愛するのである。『人は父母を離れ、その妻に合ひて二人のもの一體となるべし』……汝等おのゝ己の如く其妻を愛せよ、妻も亦その夫を敬へ。

『子たる者よ、なんぢら主にありて兩親に順へ、これは正しい事である。『なんぢの父母を敬へ、然らばなんぢ幸福を得、また地の上に壽長からん』父たる者よ、汝等の子供を怒らすな、たゞ主の薫陶と訓戒とをもて育てよ。

「僕たる者よ、キリストに從ふごとく畏れおのゝき、眞心をもつて肉につける主人に從へ、人を喜ばせる者の如く、たゞ目の前の事ばかり勤めないで、キリストの僕らしく心から神の御旨を行ひ、人に事ふる如くせず、主に事ふるごとく快く事へよ。そは奴隷でも自主の者でも、各自行ふ善き業により て主より其の報を受くることを汝らは知つてをるからである。主人なる者よ、汝等も僕に對し斯く行ひて威嚇を止めよ、そは彼等と汝等との主は天に在して偏り視給ふことの無いのは汝等の知るところである。」

パウロはタルソに一人居た時アンテオケ市を首府とするシリヤの國ぢう、またタルソを主要市とするキリキヤの國ぢうに福音を傳へて、基督教會を組織した。彼は此度の旅行で、此二國を遍歷し、暗いタウラス山脈を越えて、前の旅行の終點であつたガラテヤのデルベに出やうと云ふ計畫である。かくてガラテヤの町々を次々にバルナバと反對の順に訪ねて行かうと云ふのだから、偶然バルナバに出

會はさないとも限らぬ。

一一六　回章を携へて

アンテオケ・四十歳から五十歳

羊皮紙の聖書卷物、料理道具、食糧袋、水、油、葡萄酒を入れる革袋、更衣のくるんだものなどを驢馬の背に括り付け、其横に天幕用具を縛り、足には強い革鞋を穿ち、外套を肩にかけ、太い杖を手にして、バウロとシラスは北の門から市を旅立つた。途中まで見送りの人も一緒に往つたのである。

同行の少い旅人のするやうに、彼等は夜の明けると共に商人の一隊に加つて出發し、日暑き頃には可成の途を行つてゐたであらう、例の五半圓の橋を渡つてオロンテス河を横り、郊外に進むとアンテオケの草原は、紅の罌粟や紫のアネモネ美しく、更に行くと大きな湖水が在つて、鴨は子を育て、鸛は水際で魚をつゝいてをる。彼等の通つてをるのは、バウロが少年時代に父母に伴はれてエルサレムに詣でた時通つた大道である。行途、毛むぢやらの足をした駱駝の長い列に出會した、其背には梱や袋が過多と積まれてあつた。側についてゐるのは破れ外套に羊皮のジャケツ、太い駱駝の皮紐で括りつけた帽子と云ふ旅裝の恐ろしい顏をした連中である。彼等は幾百哩の旅を續けて、ダマスコから向ふの方までも往くのである。

バウロとシラスはシリヤのクリスチヤン訪問の用が有るので、敷石道を外れては谷間や原場に入込み、そこらの村に住む信徒の團體に、かの手紙を讀みきかせ、次のやうな敎を宣べ、奬勵を與へたであらう、——

「讃むべきかな、我等の主イエス・キリストの父なる神、かれはキリストに由りて靈のもろもろの祝福を以て、天にて我らを祝し、御前にて潔く瑕なからしめる爲に、世の創から我等をキリストの中に選び、御意のまゝにイエス・キリストに由りて愛をもて己が子とする事を定め給うた。……我等はキリストにありて恩惠の富に隨ひ、その血によりて贖罪、すなはち罪の赦を得た。……これ夙くからキリストに希望を置いた我等が、神の榮光の譽となる爲である。汝等もキリストに在りて眞の言すなはち汝らの救の福音をきゝ彼を信じて約束の聖靈で印せられたのである。」

岩の多い難路を行くシリヤの旅は仲々であつた、漸くシリヤとバウロの國キリキヤとの境界をしてゐる山脈の山路にかゝつた。こゝはバウロが前に幾度も通つた處だから、雪の峯、樅の森黑き山嘴の底に通ずる峽谷を上つてシリヤの關門を拔ける樣子は、よく知つてゐた。途中幾度も横道に入つて、小い村の木造塗壁の小舍を訪ねたであらう。この邊では旅人溜に、又は天幕に寢なくても、親切な人々の家に宿る事が出來、藁の床を與へられ、野牛か、驢馬の乳一椀、粗末なパンの一片を貰つて舌鼓を打つたのである。

アマナス山脈の嶺から降道につくと谷は上りの如く荒く深いが、桃金孃や楊梅の林繁く、沼地の平野に出ると此頃ならば黒い野牛や雁が群をなしてをる。道は海の際まで行つた、夕べ碧い入江を隔てゝタルソの後方の白峯を遠望すると、夕陽を負うた峯は紫に紅に染つてゐる。こゝから復た街道を棄てゝ山間避地の小徑をたどつた、パウロはキリキヤの地理にこそ精しかつたのである。行く處では必ずエルサレム教會の回章を讀みきかせ、クリスチヤン達がイエスを信ずる信仰を固守するやう奬勵した。其言は次の如でもあつたらうか、——

「記憶せよ、肉によりては異邦人で、手にて肉に行ひたるかの割禮ありと稱へる者に、無割禮と言はれる彼等は、曩にはキリスト無く、イスラエルの民籍に遠く、約束に屬する諸般の契約に與りなく、世に在つて希望なく、神無き者であつた。かく前に遠かつた彼等も今キリスト・イエスに在りて、キリストの血によりて近づくことを得た。彼はわれらの平和であつて、己が肉により樣々の誡命の規より成る律法を廢して二つのものを一つとなし、怨なる隔の中籬を毀ち給うた。これは二つのものを己に於て一つの新しき人に造りて平和を成さん爲である。」

村から村へ行く道の傍には白い雛菊輝き紫の菫花高く香を放つ。けれども夜は山犬、狼の咆ゆる聲を聞く、月明に流の水を求めて來る獅子に驚いたのであらうか。大小の河を渡らなければならなかつたが、大通りこそ、里道山途には橋もかゝらぬ處が多いので、危險を冒して徒渉ることも有つた。

ビレマス河に來て石橋を渡らうとするとミシス町の犬群が吠えついた。こゝは黄色い犬の襲ふので名高い處である。こゝは大街道に沿うた町なので見知りの人も多くあつた。次の町アダナに來て、石垣の向ふに厚い森を眺めながらサラス河の橋を渡つて樓門を入ると、そこにも迎ふる友があつた。

アンテオケからタルソまでは一週路であるが、パウロは數週間して漸くタルソに入つた。こゝでは勿論、用向が何であらうと宿めてくれる家は必ず有つたのである。父母はもう世を去つてゐたらしいが、親戚の家は有つて、パウロの旅行談を喜んで聞いたであらう、中にはパウロがエルサレム仕込の教法師でありながら、ユダヤ教を棄てた事を遺憾む者もあり、またパウロに味方する者も有つたであらう。

基督者達に逢うてはヤコブの手紙を讀みきかせ、イエスに對する單純な信仰を失はぬやう、偶像教の祭禮やサルダナポリスやセミラミスの神官達の誘惑に敗けないやう激勵した。彼にとつては懐しい會堂にも入つて基督教の傳道を試みたであらう。タルソで何を言つたか記してないけれども、書簡の中にかう言つてをる、——

「キリストは十字架によりて怨を滅し、また之によりて二つのものを一つの體として神と和らがしめ給うた。また、來りて、遠かつてゐた汝等にも平和を宣べ、近きものにも平和を宣べ給うた。それはキリストによりて我等二つのもの一つ御靈にあつて父に近づくことを得たからである。然れば汝等は

もはや旅人また寄寓人ではない。聖徒と同じ國人また彼の家族である。汝等は使徒と預言者との基の上に建てられた者であつて、キリスト・イエス自らその隅の首石である。各の建造物、かれに在りて建て合はされ、彌增に聖なる宮が主のうちに成るのである。汝等もキリストに在りて共に建てられ、御靈によりて神の御住となるのである。」

然しタルソはたゞ途中に立寄つたまでの事である。パウロの次の旅程は山間を過ぎてキリキヤの關門をぬける暗い雲深い恐しい途であつた。

一一七　軍隊の通路

タルソ・四十歳から五十歳

タルソの平原が暑氣で不健康となり、住民は手輕な世帶道具を駱駝や驢馬に括りつけて老若男女混合の隊を組んで丘陵地に避暑する期節も間近になつた。かうなればパウロとシラスは旅の友が有つて好都合である。

愈タルソの友にも別辭を述べて二人は市の門を出て河沿ひの途を往く、これはパウロの少年時代によく父に伴はれた道である。果樹園の幾哩かつゞく、桃色や白の花が地を被ひ、畑には小麥、大麥、胡麻が結實つてゐる。平たい屋根の小屋が點々、葡萄畑の石の番小屋が孤然と立つてゐる。瀧の下に

は木々繁る島、上には青い湖、山の鏡となつてをる。

彼等の馬を進めてをる道路は歷史に有名な路である。是より前幾世紀の間、アレキサンダー大王、アツスリヤ、エジプト、ギリシヤ。ローマなどの軍馬、軍隊が、幾日も幾週も續いて此山の裂目を、ある處は漸く二人がかすれかすれに通れる位の徑を通つて行つたのである。通行の旅人が澤山なので二三哩毎に溜所が拵へてあつたが、ほんの四方壁の屋根の無いものであるから僅に山賊の襲擊を防ぐ位のものであつた。最初の宿は此暗い狹路の下端で、タルソから來た道と旅行期には續々たる隊商を送つて來るアンテオケから眞直ぐにつゞく大道と合する處であつた。

翌日馬に鞭打つて行くと、山は益高く、或は青い松の林を着、或は風に吹かれて黑く、更に登つては煌く雪に蔽はれてゐる。險い川が行途を貫いて、道は一方の斷涯を曲折して、橋を渡り、行詰ると復た他の側に渡らねばならぬ。人も獸も其途を行くより他なかつた、岩の間から仰ぐ天は僅一尺足らずである。一寸でも滑るか轉ばうものなら忽ち驢馬は荷物ごと絕壁から眞倒ま、流に落込む迄に粉微塵である。甚しい處になると荷物を負うた駱駝は、兩方の岩と岩に挾まれて進むことが出來ぬ。而も此岩角を幾千萬の軍隊が通過して、多の國の王候の肩は其黑い岩を磨いて行つたのである。

驢馬を引いて滑りつ攀ぢつ此軍隊に踏碎された黑い道を喘ぎ〳〵上つて行くパウロやシラスの顏まではは日光が達かなかつた。梟、兀鷹、鷲、鳶、烏などは一尺許に狹められた青空を左右に飛び交うて

岩間の塒を求めて行く。少し廣みに出て天空再び開濶の處に出た時の愉快さ。坂の上に來ると驢馬の荷を下し、旅人溜で食物を調へる。高原に出て後を振返ると、下界の景色は怖しい程雄大である。高山大山雲際に聳え、谷間からは雲霞生じ、野鳥其間を潜つて何處とも無く消える。峨々たる嶺を巡つて青白の靄まつはり流れ、遙に遠く圓錐形の雪の峯は青天井を支へるかと見える。彼等の立つ所は餘程の高所である、海岸に沿うた綠野、黃田を見ることを得ぬ、たゞ狹谷と山嶺とのみ。實に此地方に於ける最高の山々を極めつゝあるのであつた。

一一八　小暗き山路

タウラス山・四十歲から五十歲

バウロとシラスが降り坂になつて過ぎて行く途は、長い急なもので其を終へるとアンテオカスの平地に出るのである。此國は山間の小平地で、廣谷と小川から成り、沼は冬は湖となり夏は好牧草地となつた。ローマの一國ガラテヤまで行くには數日を費して此アンテオカス王の國を横切らなければならぬ。バウロはデルベ指して進む途中別に敎は傳へなかつたらしい。

アンテオカスとガラテヤの國境を過ぎて僅數時間、早やデルベの町である。例の低い門を入つて山麓の市街に入る。こゝは一年前、好感を以て待遇された處である。町の基督者達はバウロが反對の道

からバルナバを伴れずに來たのを見て驚き、何處からどうして來たのか、其後どこを旅してゐたのか、種々質問を發したことであらう。

バウロとシラスはアンテオケでクリスチヤン・パリサイ派の人と大議論が有つたことを話し、ヤコブの手紙を讀みきかせた。シラスは囘章を讀む爲にイエスの存命の弟子達から派遣された使として、大人物の待遇を受けたであらう、バウロが割禮無しに外國人を信徒とする權利を獲たことを一同は喜んだ、バウロは其に對して敎會の狀態の良好ならんことを信仰に固くあらんことを勸告した。小さな部屋に群衆して再び此驚畏すべきユダヤ人の說敎を聞く人々の樣子は想像するに難くない。其言は左の如きものであつたらう。

「されば我これを言ひ、主に在りて證明する、なんぢら今から後、異邦人がその心の虛無に任せて歩むやうに歩むな。彼らは念暗くなつて其內なる無知により、心の頑固によりて神の生命に遠ざかり、恥を知らず、放縱に凡の汚穢を行はうとて己を好色に付したのである。然しなんぢらは斯の如くならん爲にキリストを學んだのではない。汝らは彼に聞き彼に在りてイエスにある眞理に遁ひて敎へられたであらう。卽ち汝等誘惑の慾のために亡ぶべき前の動作に屬ける舊き人を脫ぎすて、心の靈を新にし、眞理より出づる義と聖とにて、神に象つて造られた新しき人を著るべきである。」

大に彼等を勵して後、バウロとシラスは友に見送られて一日路をルステラへと向つた。道は丘陵の

麓に沿ひて平坦な綠野を横切る、廣い沼は青霞こむる向ふの山までつゞいてをる。蒸暑い霞の間に出沒する景色は變化に富む、今樅の林を繞い雪を頂いた峯かと思ふと此度は綠の緣を取つた湖が現れ、忽ち森林の陰と變る。ところがよく視ると其はゆらぐ熱に發生した蜃氣樓である。其邊には羊群を率ゐて平野を渡つてゆく野蠻な飼羊者達が居て、黑いフエルト、茶色の毛布、黃色い藁屋根で被はれた奇妙な蜂房小屋に住居つてをる。と云つても夜寢る丈けのもので、大低は戸外に住み、婦人達は戸口で火を焚いて、日光を浴びながら煎餅パンを燒いたり、菜汁を煮たり、羊肉を焙つたりして居る。地べたに食卓が据え付けてあつて、男の大人小人は安座かいて軟いサツブル・スコンを汁や酢い乳に突込み、女共は其終るまで給仕をしてゐる。若しパウロとシラスが、夜までにルステラの旅人溜に到着し得なかつたならば或は斯樣な牧羊村に入つたであらう。さうすれば飼羊者等は喜んで火を貸し、小屋に眠ることを許したであらう。彼等は旅人に宿を貸すのを規則のやうにしてゐたのである。

ルステラに着くと直ぐに信者達を集めて囘章を讀み、教會の信仰狀態を訊ね、デルベと同じく會員を奬勵したであらう。他にも多の人々が偶像を棄てゝ基督者になつた事を聞いて教會は歡喜したであらう。二階に集つて四方の戸を閉し大說教者パウロの次の如き言を靜聽したであらう、——

「虛僞をすてゝ各自その隣に實をかたれ、我らは互に肢である。汝ら怒つても罪を犯すな。憤恚を日の入るまで續けるな。惡魔に機會を得さすな。盜する者は今からは盜するな。寧ろ貧しき者に分け與

へ得るために手づから働いて善き業をなせ。惡き言を一切なんぢの口から出すな。たゞ時に隨つて人の德を建つべき善き言を出して聽く者に益を得させよ。神の聖靈を憂へさせるな。汝らは贖罪の日のために聖靈で印せられた。凡ての苦、憤恚、怒、喧噪、誹謗、および凡ての惡意を棄てよ、互に仁慈と憐憫とあれキリストに在りて神が汝らを赦し給うた如く、汝等も互に赦せ。」

パウロは特に青年テモテに遇うて喜んだ。離別以來彼が善い働をして讃められてゐた事を聞いて、大いに氣に入り是非一緒に來るやうにとすゝめた。テモテは年は若かつたが其意に從うた。果してパウロに大なる助手となり、パウロはテモテを我子と呼んだのである。

一一九　青年テモテ

ルステラ・四十歳から五十歳

パウロが父死して母の一人子であるテモテを旅の友として連去らうと云ふ程熱愛したには特別好い所が青年テモテに在つたに相違ない。彼はギリシャ人であつた父に似て細長と背高く上品で、色薄い髮茶色の眸、母に似て桃色の頰を持つてゐたであらう。その熱心で謙遜で賢明いのを見てパウロは彼を愛した。彼は家無く妻なく子を持たぬ茶色の外套と杖一本を携へた此旅のユダヤ人にとつて眞に子の如くなつた。若しパウロが高き生活に向つての止まざる努力と熱誠とを以て彼を感化したとすれば

テモテは之に對して既に中年を過ぎた未婚の男子としてやゝもすれば他の惡を責むるに急にして嚴格が過ぎて無慈悲に陷らんとするパウロの決心を動かし判斷を軟ぐることによつて報恩をなした。

此小亞細亞の若者は、パウロの側を離れず手紙書をしたり長旅に伴をしたりして成長した。そして遂には母の家を棄てるべく強いてすゝめた此心火と燃ゆる人の爲に大なる助手となつた。後年、年老いたる教師パウロは彼に親切な賢い手紙を書送つたが其を見ても如何に最初から此青年を愛してゐたかゞ解る。其書簡に彼はテモテを自分の實子と呼び、ヴィナスがクプロの綠い波から上つたとか、ジュピターがエペソの金の雲から落ちて來たとか云ふやうな偶像に關する馬鹿な物語に耳を籍さないやう警告し、常に愛を湛へ、純潔な心を持ち、良き本心を保つやうすゝめ、彼が他人の爲に信仰、愛、良き純潔な生涯の模範となるのに年齡不足では無いと勵した。其書簡からパウロとテモテの間の談話が奈何なものであつたか、略想像することが出來る。

テモテは僕としてゞなく助手としてパウロの到る處に伴つたので、敎に就て話したければ話すことも出來たのである。パウロは矢張新しい町に行くと先づ會堂を訪ねて說敎するのが習慣であつた。然し割禮の無い者はユダヤ人の中に入ることを敢てしなかつた。爲れば生命にもかゝはる事が出來したのである。是は恰も今日のクリスチャンがマホメット敎の會堂に入らないやうなものである。會堂のユダヤ人等はそんな人とは食事を共にしなかつた。其がユダヤ人だと猶更惡かつたのである。處でテ

モテはクリスチャンとなつてから暫く經つたが、割禮はクリスチャンに用は無い。けれどもユダヤ人の間に出入するには大なる便利が有る。そこで出發前テモテが自由にユダヤ人の間に入れるやう割禮を受けて置いた方がよからうと云ふことになつて、パウロ自ら之を施した。

ルステラの敎會員等はパウロがテモテを選んだことを大いに喜び、アンテオケの人達と同じやうに、特別な集會を催して、嚴にテモテを傳道者として認定した。彼の母は、テモテが白い衣を著、興奮して頰を赧めて、長老達の前に立ち、其問に答へて、信仰を告白し、傳道者たらん志望を述べるのを聞いてゐた。長老達は次々に手を彼の頭に按いて彼を祝福した、最後にパウロは日に燒けた顏に眼を輝かして、彼の爲に祈り、その薄茶色の頭髮を押へて彼を祝福した。其奬勵の言は次の如き書簡の言によつて想像出來る、——

「信仰によつて我が眞實の子であるテモテよ、昔話と窮りない系圖とに心を寄せるな。そのやうな事は信仰に基ける神の經論の助とならず反つて議論を生ずるのである。命令の目的は、淸き心と善き良心と僞りなき信仰とから出る愛に置け。或人々は迷ひ出た。彼等は律法の敎師たらんとして反つて其言ふ所確證する所を自ら悟らない。我等は、律法は道理に循うて之を用ひれば善いものであることを知つてをる。律法を用ふる者は、律法は正しき人を阻む爲では無く、不法のもの、服從せぬもの、敬虔ならぬ者、人を殺す者、不孝者等の爲、そのほか健全なる敎に逆ふ凡の事のために設けられた事を

知らなければならぬ。」

「わが子テモテよ、汝を指したる凡の預言に循うて我この命令を汝に委ねる。汝がその預言により信仰と善き良心とを保ちて、善き戰鬪を戰はん爲である。或人はよき良心を棄てゝ信仰の破船をした。……汝もし、此等のことを兄弟に教へれば、信仰と汝の從ひたる善き教との言にて養はるゝ所の、キリスト・イエスの良き役者となるであらう。されど妄なる談と老いたる女の昔話とを捨てよ、また自ら敬虔を修行せよ。體の修行も聊かは益があるが、敬虔は今の生命と後の生命との約束を保ちて凡ての事に益が有る。これ信ずべく、正しく受くべき言である。我等は之がために勞し、かつ苦心する。それは我等凡ての人、殊に信ずる者の救主なる活ける神に望を置くからである。

「汝これらの事を命じ且教へよ。なんぢ年若きをもて人に輕んぜられるな。反つて言にも、行狀にも、愛にも、信仰にも、潔にも、信者の模範となれ。……讀むこと勸むること教ふることに心を用ひよ。長老達の按手を受け、預言によりて賜りたる賜物を等閑にするな。なんぢ心を傾けて此等のことを專ら務めよ。汝の進歩の明かならん爲である。己と己の教とを愼みて此等のことに怠るな。かくして己と聽く者とを救へ。」

「神の人よ、金を愛する事を避けて、義と敬虔と信仰と愛と忍耐と柔和とを追求め、信仰の善き戰鬪をたゝかへ、永遠の生命をとらへよ。汝はこれが爲に召を蒙つたのである。……われ凡ての物を生かし給ふ神のまへ、及びポンテオ・ピラトに向ひて善き言明をなし給うたキリスト・イエスの前で汝に命ずる、汝われらの主イエス・キリストの現れたまふ時まで汚點なく、責むべき所なく、誡命を守れ。時いたらば幸福なる唯一の君主、もろもろの王の王、もろもろの主の主、これを顯し給ふであらう。主は唯ひとり不死を保ち近づきがたき光に住み、人の未だ見ず、また見ること能はぬ者である。願くは尊貴と限りなき權力と彼に在らんことを。

「汝この世の富める者に命ぜよ。高ぶりたる思をもたず、定めなき富を恃まずして、唯われらを樂ませんとて萬の物を豐に賜ふ神に依賴み、善を行ひ、善き業に富み、惜みなく施し、分け與ふることを喜び、斯くて己の爲に善き基を蓄へ、未來の備をなして眞の生命を捉ふることを爲よと。テモテよ、汝委ねられた事を守り、妄なる虛しき物語また僞りて知識と稱ふる反對論を避けよ。或る人々この知識を裝ひて信仰から外れた。願くは御惠、なんぢと偕に在らんことを。」

異樣なクリスチャン會合の席上で、多の者はパウロが、クリスチャンの中の英雄たる此青年の爲に祈り、訓戒を與ふる言を聞いて心燃えたであらう。青年は是より、眼前に主の十字架を仰ぎつゝ、愛する主の爲に海山を越えてパウロに伴はんとするのである。こゝに居た友の中には彼を少年時代から知つて居る者も有つて、尙將來について賞讃と激勵の言を曖別とした時、テモテの心は熱誠に燃え、神を信じて前進せよとのイエスの聖靈の靈感を受けたであらう。而して就中、テモテの面が聖き熱

心に輝くのを見て最誇を感じ、誰よりも深く喜んだ者は、彼を今日迄育てゝ、是から幾年間相別れんとするテモテの母親であつた。

一二〇　サルタン山脈

ルステラ・四十歳から五十歳

ルステラに暫く滞在した後、パウロ等は青年テモテを伴れて二十五哩の道を、羊飼や牛馬商人が澤山の家畜を追うて通る鹽の野を、果樹園と花畑に圍まれた美しいイコニアムへと進んだ。イコニアムでも相變らずクリスチャンを集めてヤコブの手紙を讀み、信仰の奬勵を與へた。集つた人々は次の如き言に耳を澄したであらう、——

「終に言はん、我が兄弟よ、なんぢら主に在りて喜べ。……なんぢら犬に心せよ、惡しき働き人に心せよ、肉の割禮ある者に心せよ。神の御靈によりて禮拜をなし、キリスト・イエスによりて誇り、肉を恃まぬ我等は眞の割禮ある者である。たゞし我は肉にも恃むことを得るのである。もし他の人肉に恃む所ありと思はゞ、我は更に恃む所がある。我は八日目に割禮を受けた者で、イスラエルの血統、ベニヤミンの族、ヘブル人から出たヘブル人である。律法につきてはパリサイ人、熱心につきては教會を迫害した者、律法によれる義に就きては責むべき所の無かつた者である。然し曩に我が益であつた

事はキリストの爲に損と思ふに至つた。然り、我はわが主キリスト・イエスを知ることの優れたる爲に、凡ての物を損だと思ひ、彼のために既に凡ての物を損したが、之を塵芥のごとく思ふ。これキリストを獲、かつ律法による己が義でなく、唯キリストを信ずる信仰による義、即ち信仰に基きて神から賜る義を保ち、キリストに在るを認められん爲である。」

此度は會堂の蜂の巣はつゝかなかつた、で高官連から睨まれもせず、靜な集會を保つた上、町を去つた。道傍の畑には赤い林檎や黑綠の橄欖や紫の葡萄が日に照されて熟し、麥の野は刈株丈け殘つて收穫物は既に藏はれてゐた。

西へ二日路にして、パウロとバルナバが三夏前に初めて通つたローマ街道に來た。更に二日、早やサルタン山腹のピシデヤのアンテオケである。例によつてクリスチャンに回章を讀みきかせ、集會を催して信仰に固く立つて偶像を棄て、周圍に盛な惡德習俗を避けるやう訓戒した。左の如き言が彼の口から屢反復せられたであらう、——

「されば兄弟よ、われらは負債は有るが、肉に負ふ者ではないから肉に從ひて活くべきでない。汝等もし肉に從ひて活きれば、死ぬる。もし靈によりて體の行爲を殺さば、活きる。すべて神の御靈に導かれる者は、これ神の子である、汝らは再び懼を懷くために僕たる靈を受けたのではない。子とせられた者の靈を受けたのである。故に神を「父」と呼ぶのである。御靈みづから我らの靈と共に我らが

神の子たることを證明する。もし子であれば世嗣であらう。神の嗣子であつてキリストと共に世嗣である。これはキリストと共に榮光を受ける爲に、その苦難をも共に受くるからである。

「われ思ふに、今の時の苦難は、われらの上に顯れんとする榮光にくらぶるに足らない。それ造られた者は切に慕ひて神の子たちの現れることを待つ。……御靈の初の實をもつ我らも自ら心のうちに嘆きて子とせられんこと、卽ちおのが體の贖はれることを待つのである。我らは望によつて救はれた。眼に見ゆる望は望ではない。人はその見るところを爭で望まう。我等もし見ぬところを望む以上、忍耐を以て待たなければならぬ。斯の如く御靈も我らの弱きを助けたまふ。我らは如何に祈るべきかを知らないが、御靈みづから言ひ難き歎をもつて執成し給ふ、……神を愛する者、すなはち御旨により て召された者の爲には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知つてをる。」

次に何處に行くか、海岸線に沿うた美しくはあるが不健康なパムピリヤの地に下つて川口のペルガから岬の上のアタリヤそれからクブロに渡つたものか。時は既に盛夏でたる、數ヶ月も山地を旅して來た彼等には平地の暑熱が堪えられないであらう。下りて行くのが自然ではあつたが、パウロは計畫を變更して、北の方、涼しい高原地に向ふことにしたのである。

彼等はこゝまでにタルソの彼方の地中海岸から登り上つて四百哩を踏破し、小亞細亞の最高山脈の麓に來た。こゝからは山間の高原で、黑海まで比較的平坦な上の扁平い丘と淺い谷の地であつた。

ピシデヤのアンテオケ及其近在に住む信徒達には是から初めてアジヤの國に入るつもりである事を告げて別れた。アジヤは英國位の大さのローマ領國である。サルタン山脈の麓を傳ふ道を暫く往くと間も無くガラテヤの國を出てアジヤに入つた。そこで傳道するつもりであつた。

此國には商用の爲に道路四通し町村も多く有つた。けれどもパウロは夢であつたか幻覺であつたか餘り遠く入込まない先に、神から此地に傳道することを禁じられたと感じた。そして其を二人の伴侶に話した。パウロの如く神に近くあつて祈り且つ瞑想する者は他人に說明することの出來ない靈感を受けるものである。他にも澤山例がある。パウロが何故に此アジヤの高原地に敎を宣べることをしなかつたか他に理由が記してない。而も彼は海の方に引返しては來なかつた。依然前へと進んだが、其は思はく長い旅になつた。

一二一　アジヤを横に

ピシデヤのアンテオケ・四十歲から五十歲

行途は裸の丘陵地で、谷は燧石質の岩で、其が桃色、純白、青みがゝつた黃、灰色、薄綠の色彩燦として日光に輝き、木は少なかつた。彼等は中央亞細亞の一角なる高原を橫切つてローマ領ビテニヤの國に出やうとするのであつた。ビテニヤは百五十哩の彼方に在り、黑海岸に向つて傾斜せる森林多

き國である。安全の爲に他の團體と一緒になつて暑い秋の日の下に歩み、日盛には休息し夜は村の旅人溜か、星を頂いて寢ても大丈夫と見れば自分達の天幕を擴げて休んだ。沿道には村も石垣を圍らした町も多かつた。然しこゝも獅子、豹豺狼の多い地であるから道連れが充分あつて大聲を擧げたり音を立てたりして猛獸を逐拂ふことが出來ないと危險であつた。

約一週間、暑い石の道を、或は木は無く黑い岩ばかりの低い丘を囘り、或は谿流の干いた床を渉り、僅に岩間のところどころ補布を當てたやうにかたまつた枯草ある他は不毛の谷を喘ぎ上つて、漸く、高原の端に出た。そこには大谿谷が地の裂目となつて、其底には河川が黑海まで奔流してゆく、黑海は山に遮られてまだ見えない。手を翳して眺めると、森に被はれた大小の谷は紅、赤、茶、小豆、金の秋の葉に飾られ、遠くには青い山々が列んでゐる、其向ふが大凡デンマーク位の、豐饒なローマ領ビテニヤの國である。然るに彼等は其山を越えなかつた、再び夢か幻覺か、パウロは神がパウロのビテニヤに入るのを好み給はぬと感じたのである。

卽ち彼はまた計畫を變更して路を西に取り、マルモラ海及ダーダネルスの境に接するムシヤ地方に向つた。まだアジヤである、パウロは宣敎もならず、每日々々、徐ろに高原地を下へ、リンダカス河が、葉廣のボタンの木、落葉松、黃色い樫、針金の如な樅、常盤の月桂樹の林を縫うて流れる、豐な谷に沿うて馬を驅つた。幾つかの湖、低い屋根の山家を過ぎた。山の人々は大きな欖欖の畑を持つて

ゐて、黑い實を枝から搖り落してゐた。黑い葡萄は紫や金色の葉の間に房の如く垂つてゐた。

三人は此高原の凉風に浴し、森の谷を下り、日中の蔭宿に、パンとミルクを食べながら、默つてゐた筈は無い。テモテはパウロから澤山學ばねばならぬ事が有つた。パウロも敎へ度い。どんな話を仕合つたか。再びパウロがテモテに送つた書簡を見る、——

「後の日には或人々、惑す靈と惡鬼の敎とに心を寄せて信仰から離れるであらう。これ虛僞をいふ者の僞善に由つてゞある。彼らは良心を燒金で烙かれ、婚姻するを禁じ、食を斷つことを命ずる。然し食は神の造り給うた物であつて、信じ、かつ眞理を知る者の感謝して受くべきものである。神の造り給うた物はみな善い。感謝して受ける時は棄つべき物は無い。」

「汝かれらに……言爭する事なきやう神の前にて嚴かに命ぜよ、言爭は益無く聞く者を滅亡に至らせる。なんぢ眞理の言を正しく敎へ、恥づる處なき勞働人となつて神の前に鍊達せる者となるやう勵め、また妄りなる虛しき物語を避けよ。斯る者はますゝ不敬虔に進み、その言は脫疽の如く腐れひろがるであらう。其樣な人も有つた。彼らは眞理から外れ、復活ははや過ぎたと云つて或る人々の信仰を覆した。

「然し神の据ゑ給うた堅は立てゐる。之に印がある。記して曰ふ『主おのれの者を知り給ふ』また『凡て主の名を稱ふる者は不義を離るべし』と。大なる家の中には金銀の器あるのみならず、木また

土の器もある。貴きに用ふるものが有り、また賤しきに用ふるものが有る、人もし賤しきものを離れて自己を潔くしたならば貴きに用ひられる器となり、淨められて主の用に適ひ、凡ての善き業に備へられるであらう。

「汝わかき時の慾を避け、主を清き心で呼び求むる者と共に義と信仰と愛と平和とを追求めよ。愚なる無學の議論を棄てよ。これから分爭の起るを知る。主の僕は爭ふてはならぬ。凡ての人に優しく能く教へよ。忍ぶことをなし、逆ふ者をば柔和を以て戒めよ、神あるひは彼等に悔改むる心を賜うて眞理を悟らせ給ふであらう。彼ら一度は惡魔に囚はれても、醒めてそのわなをのがれ神の御意を行ふに至るであらう。」

「汝は學びて確信したる所に常に居れ。誰から之を學んだかを覺え、また幼き時から聖なる書を識つた汝である。この書はキリスト・イエスを信ずる信仰によりて救に至らしめる智惠を汝に與へ得るのである。聖書はみな神の感動によるものであつて教誨と譴責と矯正と義を薫陶するとに益がある。神の人が全くなつて諸般の善き業に備へを全うする爲である。」

「われ神の前、また生ける者と死にたる者とを審かんとし給ふキリスト・イエスの前で、その顯現と御國とを思うて、嚴かに汝に命ずる。なんぢ御言を宣傳へよ、機を得るも機を得ざるも常に勵め、寛容と教誨とを盡して責め、戒め、勸めよ。人々が健全なる教に堪へず、耳痒くて私慾のまにまに己が爲

に教師を增加へ、耳を眞理から背けて昔話に移るときが來るであらう。然し汝は何事にも愼み苦難を忍び、傳道者の業をなし、汝の職を全うせよ。さらば主は汝の靈と偕に在すであらう。」

この樣な會話に、テモテは父の教を聞くものゝ如く熱心にパウロの言に耳を傾けながら、旅程を進めた。夜の宿を求めることは有つても、どの村にも滯在はせず、說教もしなかつた。パウロは其が御意であると信じた。果して彼等は他の地に於て良き働を爲るのである。

一三三　トロイの白い平野

アジヤ・五十歲から六十歲

三人の旅行者は未だ足を留る町までは餘程往かなければならなかつた。まだ小亞細亞の山地を出ないのである。此地方は今日でも餘り人の訪はない所である。北の空遙に霞む邊に、日光にかゞやく眞珠色の雲を帶にしてオリムパス山が聳えてゐる。此地方の住民は、一年に一度收穫の終に此山に登つて踊つたり飲んだり、黑い岩の間で樂み躁ぐのである。何の爲なのか彼等は知らなかつたが、幾百年來の習俗である。而して幾久しく子孫に之を傳へんとするのである。

ピシデヤのアンテオケから二百哩で、犁と鍬持つ百姓の丹精して開かれた美しい田野の國に出る。旅人達はムシヤの境に來たのである、西北に方つて時々今コンスタンチノートブルの在るマルモラの海

が碧く見える。渡らなければならぬ迂餘曲折した河川が多かつたが、此地は人口稠密で通商も盛であつたから道路は良く河の深い處は強い橋が架つてゐた。途を往きながら、或は薪の火にあたりながら星の下でパウロは若い友に話すのであつた、——

「老人を譴責するな、反つて之を父のごとく勸め、若き人を兄弟の如くに、老いたる女を母の如くに勸め、若き女を姉妹の如くに全き貞潔を以て勸めよ。寡婦のうちの眞の寡婦を敬へ。寡婦に子または孫があらば彼等先づ己の家に孝を行ひ親に恩を報ゆることを學ばねばならぬ、これ神の御意にかなふ事である。……人もし其の親族殊に己が家族を顧みなければ、信仰を棄てた者であつて不信者よりも更に惡いのである。」

「善く治むる長老、殊に言と敎とを以て勞する長老を一層尊ぶべき者とせよ。聖書に『穀物を碾す牛に口籠を懸くべからず』また『勞働人のその價を得るは相應しきなり』と云つてある。長老に對する訴訟は二三人の證人がなければ受けてはならぬ。罪を犯した者をば衆の前で責めよ。他の人をも懼れさせる爲である。何事をも偏り行はず、偏頗なく此等のことを守れ。輕々しく人を傳道者にするな、人の罪に干與するな、自ら守りて潔くせよ。或人の罪は明で先だちて審判かれ、或人の罪は後になつて分る。斯のごとく善き業も明かであるが惡い者も遂には隱れることが出來ない。

「おほよそ軛の下にあつて奴隷である者は己の主人を全く尊ぶべき者とするやう敎へよ。これ神の名

と敎へとの譏られない爲である。信者たる主人を有てる者は、その兄弟であるに因つて之を輕んぜず反つて彌增々これに事へよ、その益を受ける主人は信者であつて愛せらるゝ者である。」

ムシヤでもまだ福音に就て口を開かず、更にアエギアン海の一角に在る大都トロイに向つて西へ進んだ。間も無く來たのはホーマーの詩で名高い戰爭の有つたトロイの平野である。かの詩は五百年も昔に書かれてゐたのだからパウロも知つてゐた筈である。一方には黑い花崗岩の山が段々上りに上りつめてアイダ山となる、嶺は頂飾の如く輝き、山腹は紅黃の樹葉と川流に彩られてゐる。他方は二十哩の平野、牧草の岡と淺い谷より成り遂にダーダネルスの美しき岸に到つて盡きる。三人の踏み行く地は、ホーマーの詩に錄された古戰場で、往古、美女ヘレンの故にギリシヤ人に十年の間占領されたと云ふイリアムの市の在つた所である。彼詩人の云ふには天からも人が降りて來て戰鬪に加はり少しも傷かなかつたと。ホーマーは歷史として其詩を殘すつもりでは無かつたであらう。何が有つたにせよ、もうパウロやシラスが平野を過ぎた時より一千年も昔のことである、ホーマーの書いた市は影も殘らず、碧いヘレスポントから程遠からぬスカマンドル河の側に廢墟の塊となつて小高くなつた丘ばかり寂しい。

足下の土は石の間、肥えたる土壤一面に滿てる貝殼で白い。美しい谷を見渡すと、遠くに海の一端らしい所にトロイの石垣が見える。アイダ山から切出した花崗岩造の宏壯な建物は日に照されて、白

い塔や眞鍮の尖塔を煌めかし、更に其向ふには碧いアエギャン海と紫の島々が浮出てをる。

三百哩以上も驢馬旅行を續け、中央アジヤの最高い最危險な部分を過ぎて來たが、パウロは其間どこにも留らずまた說敎を試みず、何か大なる用の爲に神の御手に導かれて進むのであると信じてゐた。其態度でムシヤを過ぎてトロイに來た、これから先は馬では行けない。こゝで彼は彼の爲にも世の爲にも良い働をする人に出會つた。其は愛された醫者ルカで、彼は後に使徒行傳を書いた中にパウロの生涯を詳說したのである。

パウロは久々で大きな開港場に來た、街には諸國の人々や軍人が一杯であつた。トロイはローマの一殖民地で、港は內外の二重港となり、花崗岩壁が兩者を區切り、僅に船舶出入の切戸が拵へてあり埠頭には同じく花崗岩の杭が船を繫ぐ爲に立てられてあつた。其石の杭は今も殘つたのが有るが、港口は砂で埋まつて了つて今日では船が入れられない。パウロが訪ねた頃のトロイは一哩に擴がり、石垣の所々には方塔を建てゝ防禦に備へ、軍車競走場、公衆演藝場、彫刻美しい神社、石造の水道を通じてアイダ山の名高い泉流から水を引いた溫浴場などが有つた。

市の後方に在る演藝場の座席から眺める景色は絕佳であつた、靑い海面には紫の諸島點々として浮び遠く山々が霞に消えゆく。太陽がアイダ山に登つて來るとテネドス島が小さな島々を從へて薔薇色に現れる、曙光一段と擴がるにつれて、イムブロス島見え、更に遠くサモスレース島の山嶺が視界に入

る。夕べになつて海が紅に染まる頃、パウロの眼にはテネドス島の彼方深紅色のレムノス島、遠景に八十哩の海を隔てたマケドニヤ海岸にそゝり立つアトス山が夕陽に照つて金の圓錐と映る。紅の島々が向ふの金色の山に亘る飛石のやうに列ぶ景色に惹かれたパウロの心情は、既に彼方に飛んでゐた。あの靑い對岸から、常勝の軍隊は船首に鷲の飾をつけてやつて來た、そうしてアジヤやパウロの生地に法律と鋪石道を敷いたのである。パウロは向ふの人々に平和の福音を傳ふべく渡つては不可であらうか。太陽脚につゞく浮雲の如き島々を眺めて、パウロは幻影を見た、夢を見た、更に其向ふには世界の首都ローマが橫つてをるのである。

パウロが愛する醫者ルカにどうして出會つたのか不明である。病氣でも診察て貰つたのが原か、それともルカは既にクリスチヤンであつたから此市のクリスチヤン仲間に居たのか。ともかくパウロは彼に會ふや忽ち親友となつた。ルカはパウロが每日憧憬の眼を放つてゐたマケドニヤのピリピから來た人であると云ふ。彼等は港頭に立つて海を眺め、蛋白石の諸島の彼方に橫はる國の話をしたであらう。其時ルカはパウロに種々な事を敎へたであらう。

此時パウロはトロイで傳道しなかつたらしい。そして神の導を待つて居るうち、ある夜一人のマケドニヤ人が彼の枕元に立つて手を伸べ、海を渡つてマケドニヤの人々を助けて吳れと乞ふ夢を見た。朝彼は其をシラス、テモテ、ルカ三人に話すと皆、マケドニヤに渡つて宣敎せよとの神の御旨を示し

たものだと解した。ルカは道案内をしやうと云ふので一同は、マケドニヤ國の一郡の首都であつて海岸に近いピリピに行く事に決定た。

一二三　薄紅の葉、金色の山

トロイ・五十歳から六十歳

トロイの兩の港にはいつでも近海航路用の船舶が群つてゐたので、パウロと三人の伴侶は南の順風さへあれば百哩の海を渡つてピリピに往くことが出來た。橈を漬けて靜に港を出で陸地を全く離れると滿帆に風を孕ませ、船は前方に傾いて矢の如く飛ぶ。旅行者達の話によると、アエギアン海の水は世界中最美しい濃碧色を呈し、日出、日沒には、島々の色彩が、因い土と石と云ふよりも寶玉の五彩のやうに見えると云ふ。

早朝出發して、先づテネドスと陸地との間を脫けると、やがて亞細亞と歐羅巴とを分つ海峽、ダーダネルスの狹隘な水路を馳しる惡戲な潮流と鬪ふのである。パウロ等の眼前に浮ぶはイムブロスの小島である。其先にサモスレース島のサヲス山が高く見える。此山は遠望が効くので水夫達の爲には燈臺の用をしてゐた。イムブロスを過ぎるとサモスレースが間近に紫の山となつて現れる、そして船は其に向つて直線に進められる。終日海は渦卷き閃いた。夕になつて太陽がアトス山の肩に低く西の方に

金の柱を立てる時、周圍の水は落散つた薔薇の花片のやうに踊る。次で白い月が海上に銀波を散らす頃サモスレース島の港に錨を下して、夜を越ゆるのであつた。

紫リボンを飾つた宗徒が神秘の祭を行ふカビリの偶像で知られた、雪に被はれた島の陰に朝まで旅の外套にくるまつてねた、夜明の青白い光が海面に現れるころ錨は拔かれ帆は揚げられて、船首は、諸國人の欲しがつてゐる金鑛で出來たタソス島に向けられる。然しまだ其島とマケドニヤの海岸とにはさまれた狹い水門までは四十哩の船路を行かなければならぬ。遂に廣い灣に來て、其一端からパウロ等の小船は兩側に石の波止場ある突出た岬に進む。こゝはピリピの港ネヤポリスである。ネヤポリスには高所にダイアナの宮が有り、ローマ街道はこゝから山地の方へ續くのであつた。パウロ等は船を棄てゝ新しい國土を踏んだ。すぐそこで驢馬の便を得たので、乘つたり步行いたりして其儘直ぐ、十二哩離れたピリピに向つた。

バンゼアン諸山が廣い灣の上に聳えてゐたので道は初め急な狹谷を上つて行く。道の一角に立つて後を眺めると陽に照る海上には暑さの霧につゝまれた諸島、トロイの後のアイダ山などが見える。降り坂にかゝると、左方に遠くまでピリピの黃色い平野が擴がり、美しい山陵、沼澤が之を周らす、沼には蘆、藤水面を埋め、平野は幾多の輝く流に刻目つけられてゐる。此時より古に溯ること九十年の秋、草の中に銀のリボンの如く流るゝ河岸で、かのオクタビアスとアントニイはブルタスとカシアス

を敗り、彼等の手からローマ帝國を扭ぢ取り、彼等を其死場まで追詰めたのである。ローマの運命を定むべく彼等四天王が此遠方まで來てローマ兵は互に短刀を揮つて同胞を打切つたと云ふのも不思議なことである。

右方の平野、山腹に白い市街がある、其名はアレキサンダー大王の父マケドニヤのピリピの名を貰つたのである。戰爭後オクタビアスはピリピ市をローマの一殖民地として、安寧保護の爲にアントニイの軍隊を駐在させた。まるで兵隊市であつた、そしてローマ人がマケドニヤを征略した時之を幾つかの小國に分割した其中でも主なるものであつた。街衢と建物が平野から山の頂點近くまで梯比してゐて、山頂には巨大な暗い城が建つてゐた。市は極めて厚い石垣で敵の抗擊を防ぐやうになつてゐた。當時の富貴な人々は石垣を周らした市でなければ枕を高くして寢られなかつたものである。此市から南へ擴つてゐる平野は世界でも最美しいもの〻中で、山に圍まれてゐて而も無數の沼澤河川が樹々の緣を濃かならしめてゐた。その深い谷々は薔薇の美しいので知られてゐたが、他に今一つ有名なものが有つた。薔薇は如何に美しく馨しくあつても其爲に戰爭までする者は無いであらうが、征服者達の覘つたのはこゝに名高い金抗であつた。

バウロと三人の者は鋪石道をジガクテス河岸に降り、沼の椽を通つて進んだ、黑い水牛は長い藤の間に吼え、白い鴨の群は清い水溜から飛出すのであつた。山麓を行く道はやがて石垣の低い門に入る

門の上には四角な塔が立つてゐた。彼等の入つたのは東門である、其處で嚴重な檢査を受けて初めて入都を許されるのである。

二二四　紫布の商人ルデヤ

ピリピ・五十歳から六十歳

彼等が驢馬に跨つて這入つたピリピは最重要な市だつた。ローマ帝國大道の一つエグナシアン街道は此市を通過してゐて、軍隊はびつしり鋪石された途に、軍車の響勇ましく、マケドニヤを馳驅して亞細亞に渡る要路に當つてゐた。仰げば古い市は坂上りに頂上の薄暗い城塞に達し、此處彼處の黑い岩はギリシヤの偶像の形に刻まれてあつた。また或坂の處は戸外劇場の座席になつてをり、シルバナスの宮の圓柱も立つてゐた。

尙石垣の岩丈な腕は新市街をも包み、平野の方まで伸びてゐて、其中には廣い市場、商店、それからやがてバウロが公衆の前に立たんとする公衆演壇も有つた。廣い軍隊用のローマ街道に立つと凡て此等の光景を一眸の中に納めることが出來た、此街道で上市と下市とを區切つてゐたが、そこから横の街に曲つて下りるとバウロ等の滯在しやうと云ふ下市に入るのである。

ピリピは商業市でなく軍隊市であつたのでユダヤ人は餘り居なかつた。市の政治は奉行と稱ばれた

二人の高官によつて行はれた。二人の奉行は戸外の小高い大理石の腰掛に座つて、公平なと言つても必ず正しいとは限らなかつたが、ローマ法に依つて事件を裁斷した。其後には棒杖の瘤につけた斧を持つた兵士が立つてゐて、奉行の判決に隨つて罪人の背を切つたり、首を落したりしたのである。

彼獨特の強い意志によつてパウロはアジヤで宣教することを爲ず、町村を無言で通つて來たが、こゝではもう口を聞くも自由である、會堂に行つて話し度いものだと考へた。處がユダヤ人が會堂は無いと云ふ。そこで市の西門から少し行つた、綠いドラマ谷のガンガス河岸の靜な所で祈禱會をすることになつた。安息日が來たのでパウロにシラス、テモテ、ルカの四人は其所を求めて往つて見ると頭を垂れたユダヤ人の群は見えないで婦人ばかりが集つてゐた。彼等は丘陵の間の凹地、柳と薔薇籔に圍まれた靜寂な所で、不思儀な集會をした。パウロは若くして十字架に釘けられたナザレの預言者のこと、彼が己の十字架を負はされて狹い街を喘ぎ行くのを見て婦人達が涙にくれたこと、彼こそ救主、活ける神の子であつたこと、彼の死んだのは萬人を彼の下に惹かん爲であること、ペリアの女達の抱いてゐた子供等を彼自ら腕に取つて、子供は神の國の子等であると云つて祝福したこと、夫等に妻を奴隷の如く扱うてはならぬと教へたことなどを話した。ピリピの婦人共は、是迄したことも無い位熱心にパウロの話に耳を傾けた。パウロは、活ける神に對する純なる禮拜、イエスに在る高き生涯の如何なるものであるかを說いた。

パウロは、克くも長旅をして、赤や青の刺繍した着物を纏うた婦人達の小集會を催すべくこゝまで來たものである。ルステラで群衆の心を奪ひ天降つたマーキユリーかと思はせた程のパウロは、イエスを見たシラス、青年テモテを側にして靜に教を說いたのである。聽衆は僅少だつた、其中パウロの榮ある教を信じた者は只一人であつた。其は紫衣を着たルデヤであつた。ルデヤはトロイ市の向ふ八十哩、アジヤのテヤテラ町の人で、町特產の染物をピリピの人に賣るを稼業としてゐた婦人である。彼女はユダヤ人では無かつたけれども神を拜してゐて、パウロの言はその溫な心に入り、感應を得たのである。

集會は開散して何の徵も見えず婦人達は家に歸つた。然し數日經つて、ルデヤは子供達も一緒にクリスチヤンの記であるバプテスマの式を受け度いと申出た。そして生計に豐な處からパウロと三人の友に、市に滯在中は自分の家に宿つて呉れるやうに賴んだ。かくパウロが歐羅巴で初めて得たクリスチヤンは婦人であつた。婦人の手が先づイエスの光榮ある福音を受け、イエスの福音は婦人を奴隷より自由に導き、その子等を神の國の美と聖とで包むに至つたのである。

安息日毎にパウロ等は此河岸のユダヤ人の祈場に來て、集つた人達に說教をした。幾週間も經たないうちに奇態な新宗教の教師等が來て、河の邊の木の下で說教して居ると云ふことが市の人々に知れた。

一二五　葉蔭の谷間

ピリピ・五十歳から六十歳

バウロは雨が毎日々々降り續いて、銀河溢れ、大平野は滿々たる湖水と化する頃までピリピに滯在した。一夜のうちに山々は雪で眞白になることも有る、で人々は石垣の中に籠つて、旅に出なくなるのである。まだバウロ等は安息日毎に市外のユダヤ人祈場に行つた。信者になつた者は僅で、婦人が二人ユーオデアとシントケ、彼等は後に此市で大いに助けとなつた、それからクレメント、エバフラス、シジガス、其他二三位のものであつた。バウロは此外國市に會堂も造れぬほど僅に居るユダヤ人や、イエスに心を移した婦人達を相手に、朝早くそよぐ樹枝の下、閃く河の側で、何を語つたであらうか。次に錄するは彼が後に此人々に贈つた手紙の一節である、――

「汝等はキリストのために、嘗に彼を信ずる事ばかりでなく、また彼の爲に苦しむ事をも賜つたのである。汝らが遭ふ戰鬪は、曩に我の上に見たところ、今また我につきて聞くところと同樣である。故に若しキリストによる勸、愛による慰安、御靈の交際、また憐憫と慈悲とあるならば、汝等念を同うし、愛を同うし、心を合せ、思ふところを一つにして、我を充分喜ばせよ。

「何事でも、徒黨また虛榮のために爲るな、各自謙遜を以て互に人を己に勝つてをるとせよ。おの〳〵

自分の事ばかり顧みず、人の事も顧みよ。汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。卽ち彼は神の貌で在し給うたが、神と等しくある事を敢て固持せず、反つて己を空うし僕の貌をとつて人の如くなり給うた、既に人の狀にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順ひ給うた。故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名にまさる名を賜うた。これ天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、悉くイエスの名によりて膝を屈め、且つもろ〳〵の舌が『イエス・キリストは主なり』と言ひあらはして、榮光を父なる神に歸せん爲である。」

「我れキリストを獲、かつ律法による己の義でなく、唯キリストを信ずる信仰による義、すなはち信仰に基きて神から賜る義を保ち、キリストに在るを認められ、キリストと其復活の力とを知り、又その死に倣うて彼の苦難にあづかり、如何にもして死人の中から甦りたいと思ふ。われは既に取つた、既に全うせられたとは言はない。唯これを捉へんと追求むるのである。キリストは之を得させやうとて我を捉へ給うた。兄弟よ、われは既に捉へたとは思はぬ、唯この一事を務める、卽ち後のものを忘れ、前のものに向ひて勵み、標準を指して進み、神がキリスト・イエスに由りて上に召したまふ召にかゝはる褒美を得んと之を追求めるのである。されば我等のうち成人したる者は、みな斯のごとき思を懷かねばならぬ。汝等もし何事でも異る思を懷いて居るならば、神これを示し給ふであらう。たゞ我等はその至れる所に隨うて歩まう。」

「汝ら常に主にありて喜べ、我また言ふ、なんぢら喜べ。凡の人に汝らの寛容を知らせよ。主は近い。何事をも思ひ煩ふな。ただ事ごとに祈をし、願をし、感謝して汝の求を神に告げよ。さらば凡て人の思にすぐる神の平安は汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守るであらう。終に言はん、兄弟よ凡そ眞なること凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと。凡そ潔きこと、凡を愛すべきこと、凡そ令聞あること、如何なる德、いかなる譽でも、汝等これを念へ。なんぢら我に學んだこと、受けたところ、聞いたこと、見た所を皆おこなへ、然ば平和の神、なんぢらと偕に在すであらう。」

此河岸でイエスの信仰に入つた者は些少かつたが、それでもユダヤ人等はエルサレム仕込の教法師と其伴侶シラスの話に耳を傾けた。イエスが救主であると云ふことには頭を振つて同意しなかつたが神に依つて高潔な生涯を送れとの教には充分敬意を拂つた。彼等は眞に如斯立派な說教者に接した事が無かつたのである。

パウロは河岸に限らず、人々の群衆する大市や市場に出掛けて活ける神と其子イエスを信じて木石の偶像を棄てる事を勸めた。多の者を旅のユダヤ人等が、市民の禮拜は樹や石に脆くものだと云ふのを聞いて冷笑し、ユダヤ人だと云ふので嫌な感を持ち、自分達の長い間馴れて來た祖先傳來の風習を止めよと云はれて喜ばなかつた。パウロ等は嫌はれても何でも人々に公然教を說き、河岸の祈場に行つてユダヤ人等を教へることも忘らなかつた。

一二六　樺捧に擲たれて

ピリピ・五十歲から六十歲

此市に一人の奴隷の女が有つて、自分の聲でない聲で話すので不思議がられてゐた。彼女は神秘の徵と言で卜筮が出來ると云はれてゐた。その主人等は彼女を使つて金儲をしてゐたのである。然し彼女の方では主人達を嫌ひ自分の仕事を好まなかつた。却てパウロとシラスの話を聞いて是に心を惹かれ、彼等が西の門から祈場に出て行くのを始終注意をして見てゐた。遂に彼女は腕や足首につけた眞鍮の鈴を鳴しながら二人の後に隨いていつて、幾度も〳〵「この人たちは至高き神の僕で、汝らに救の道を教ふる者だ」と叫んだ。人々は彼女が茶色の外套を着たユダヤ人と其伴侶についてこんな事を云ふのを不思議がつた。主人達は困つたが、女は一向平氣で、每日々々、木枯吹く街を同じことを呼りながら彼等の後に隨いていつた。女は人々が祈場までパウロに從つて其教を聽く事をすゝめるつもりで有つたらうが、パウロは其を好まず、彼女の動作に煩はされた。或日女が同じやうにして後について來た時、パウロは振返つて、恰も女の內に居る某に話しかけるやうに言つた「イエス・キリストの名によりて汝に、この女から出ることを命ずる。」女は驚いて立止つたが其儘居なくなつた。女に變化が起つたのである。もうパウロ等の後について叫びもせず、不思議を行ふことも拒んだ。パウロとシ

ラスは此變化を喜んだが、主人達は喜ばなかつた。

彼等は女が何も爲なくなつて金儲の途が絶ゆるや非常に立腹してパウロを非難し、罰してやると云つて彼等を脅迫した。同志を集めて來てパウロとシラスを包圍し其外套を引掴んで、蹴たり踏んだりしながら街を引摺つて行き、恰も二人の泥棒を捕へたかのやうに大聲を上げながら市場まで連れて來た、黒山の人集になつた。市場の司達は不法な教を述べて騒動を起させる者は奉行の處に連れて行けと言つた。

二人のローマ奉行は常の如く戸外の、黄色い日除をした小高い石の座に掛け、その後には二人の死刑執行人が樺棒と斧を持つて立つてゐた。彼等はそこで訴訟を聞いて判決を下すのであつた。たゞし本人に就て實際の調査をすると云ふことは無かつたのである。市場の人達は外套を引張つてパウロ等を奉行の前に連れて來た、二人の高官は高い處に紫の緣をとつた法服を纏つて莊重に構へ、騒がしく罵り合つてゐる手足の汚れた人民を瞰下してゐた。

「この人々はユダヤ人で、我らの町を非道く騒がし、我等ローマ人たる者の受けてはならぬ、行ふてはならぬ習慣を傳へる者だ」と彼等は訴へた。

皇帝クロデアスはローマ市から凡てのユダヤ人を追放した、其爲にローマ屬の各市では、ユダヤ人は疑はれ憎まれてゐて、「ユダヤ人だ」と云へば危なかつた。パウロとシラスを見れば、その黒い頭髪、

赫い顔色、特徴のある目鼻立ちで、直にユダヤ人である事は判明つた。怒號と脅迫の叫は益群衆を大きくした、何の爲とも理は無く無暗に奉行に迫つてパウロ等を罰することを求める喧囂は烈しくなつた。

奉行達は縞の頭巾と毛布の外套でパウロ等のユダヤ人であることを認め、奮然として立上り手を伸べて我と我が衣を裂いて怒の記を示し、執行人に、パウロとシラスを樺棒で擲つやう聲高に命令した。ローマ市民權を持たぬ者は奴隷でも自由民でも笞刑を受けたものである。彼等はパウロとシラスが市民權を有することを知らなかつたのである。よし二人が其事を言明しても、その聲は群民の罵り呼ぶ騒に葬り去られたであらう。

之は裁判と云ふ程のものでは無く、ほんの群民を喜ばせて暴動を靜める爲の倉卒な命令に過ぎなかつた。二人の奉行は、今日居て明日は居ない旅のユダヤ人を鞭つ位何でもないと考へたのである。パウロとシラスは直に市場の眞中の笞刑場に引立てられて、腰まで裸にされ兩手を柱に括付けられた。ローマ市民だと抗辯しても信じられはしなかつた。執行人達は腕捲をして二人のユダヤ人の裸の背を樺棒で恐ろしく打ち下した。遂には血が流れた。見物人は白い齒を見せて笑つた、遠くでは奉行達が其樣を望見してゐた。

一二七　地震

ピリピ・五十歳から六十歳

ローマの笞刑は無頼漢の所刑ではあつたが隨分酷しいもので、時には傷が骨に達して、哀な罪人は失心して地上に倒れたまゝになつてゐる事が多かつた。

群衆は喜んだ。旅のユダヤ人等は鞭たれたのだ、そして彼等の傷ついて血の滲み出た體は外套を振被されて、牢獄に運ばれた。獄は岩の洞穴か地に掘つた大穴であつた。當時は囚人を獸よりも非道く取扱うたのである。パウロとシラスの牢屋は壁の厚い屋根の低いもので、石の柱に取付けた小さな木の戸を開けて入るのであつた。窓の無いは勿論其中に復た内牢が有つて戸がある、其は實に低い胸の悪い所で人間の入れる處ではない牝豚の住家と云ふところだ、寢床は腐つた藁、吸ふ空氣も臭く、暑さは堪えがたい。其所に人を入れたのは特に逃がさない爲であつた。パウロとシラスも此内牢の黑い穴に投込まれた。そして足は起上つて破れ戸を押開けて逃げない爲に、壁に打込んだ桎に締付けられた。奉行から何とか命令の下るまでは其儘置かれるのである。

この汚い暗闇の中にゐてパウロは始めて、自分が高等法院の一員として、哀れ震えてゐるナザレ宗の男女を笞刑に處し投獄して、イエスの聖い名をさへ呪はせた時の、彼等の恐怖と痛苦とを察するこ

とが出來たであらう。彼は今、彼等の苦き杯を飲みつゝあるのである。

獄守は打倒れてゐる二人を放つて、戸に閂をはめて出て行つた。苦痛と懊惱の夜は息塞く暑さのうちに徐に過ぎた。桎に座り痛に胸を刻まれてパウロもシラスも寢られなかつた。朝までには死ぬるかも知れない、二人は子供の時に習ひ覺えた詩篇を誦して僅に慰を得たのである。詩篇は是よりのち多の囚人の慰となつた。眞暗な中で二人のユダヤ讃歌が聞えて來るのを他の囚人達も、わけは分らないながら聞いた。夜は益更けて行く。山の上には星輝き、彼所此處には窓明がうすい。人は床に入つて月下の街に人影も無く、全市眠におちた。けれども闇に息詰る二人の囚人は眠ることが能きぬ。

沈々たる靜寂は突如として轟々の響に破られた。地は持上り且搖れた。四壁は震え戸は振られて柱をはづれて倒れた。囚人達の桎は壁から離れ、牢獄の土臺さへ動いた。獄守は床の中で驚き覺めた。地震である。囚人を逃しては恐しい罰を受けねばならぬ。家を驅け出して獄に來て見ると外牢の戸は倒れてゐる。失敗つたと叫びさま彼は劍を拔いて自殺しやうとした。牢の奥でパウロは獄守の姿、閃く劍が見え、その叫を聞くことを得た。

「自害するな、我ら皆こゝに居る」とパウロは呼止めた。獄守は二度驚いて暗い穴を覗ひ、明を呼んだ。燈火が來ると彼は提灯を手にして、慄きながら中に入つて彼等を探した。彼は狂ふ計り喜んで、パウロとシラスに出て來てくれるやう賴んだ程である。俄の驚愕と、大なる安心とは、獄守を大に動

かした、パウロは教を說いた。獄守が「君等よ、われ救はれる爲に何をしたらよいか」と尋ねた程であるから、パウロは自分達のローマ人であること、活ける神の使であることなどを話したであらう。彼は既にパウロ等の教は聞いたことが有つたのである。「イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救はれる」とは嚴な答であつた。而してパウロは獄守に此等の大切な語の意味を說明した。獄守は牢獄から妻子の居る自分の家に二人を招待して、その傷ける背の血を洗つて油を塗つた。パウロは家の人々にイエスの光榮ある福音を說き聞かせた。そして彼の嚴な問に應へて家の者達は一樣にクリスチヤンとなり度い希望を述べ、夜の明けないうちに一人々々、ナザレ宗徒の習俗に從つてバプテスマを受けた。彼等は惱まされた二人に飲食を與へ、柔い床を供して、心から歡待した。

一二八　謙遜な釋明

ピリピ・五十歳から六十歳

傷の痛でパウロ等は獄守の家でも充分眠れなかつた。冬の朝の冷い光が、山上の城を越えて、ほのかに挿して來た時、奉行からの使者は獄守の家の戸を打いてゐた。それは案外にもパウロ等を釋放せよとの命令を齎して來た。奉行等は倉卒に答を加へた二人の囚人は、たゞの人間ではない、エルサレムから來た教育もあり地位も有る人々で而もローマ名のついた人達であると聞いたからであらう。ル

カとテモテは二人が牢に投ぜられたのを見て靜つとしてゐた筈は無い。奉行達は朝早くパウロ等が市から、その敵から逃がしてやれば、後の面倒が省けると思つたのである。

獄守は悅んだ、そして急いで命令を傳へた、「上役が人を遣して貴下等を釋せと云ひます。どうか今出て安かに旅に立つて下さい」然しパウロは彼等の非行を陰すことを許さなかつた。泥棒の如く答刑を加へた事を憤つてゐた。奉行達はローマ法の適用を誤つたものである、其非を告白しなければならぬ。今はパウロが裁判官で彼等が罪人である。使者達は呼入れられて、彼等の上役達は、先づ正當の裁判をしないでローマ人を鞭つことに於てローマの最高法の一を破つた者であると言渡された。

「上役達に言へ」パウロは言つた、「我々はローマ人である。然るに奉行達は、何等我々を訊問せずして公然市場で答刑を加へ、裁判を經ず我々に何の罪過も見出さないまゝ投獄したのだ。そうして今ひそかに我らを出して彼等の過を隱さうとしてをる。さうは出來ぬ。我々はそんな事では出て行かない」人々の驚いたにはパウロは斯う結んだ、「彼等自ら來て我等を連れ出せと言へ。」パウロはタルソに住んでゐた間ローマの自由市民たる權利を知悉してゐた。ローマ帝國中何處と雖も、彼はローマ法官の自由公明なる審理を受けずして罰せられる筈では無かつた。彼が不服ならばローマの法庭まで上告する權利さへ有つてゐたのである。彼はローマ人であらうが外人であらうが法官が其法律を破つた時、如何なる訴を起してよいかも知つてゐたのである。

使者共は急ぎ歸つて上役達に其旨を告げた。奉行達は、ユダヤ人が一度決意した結果については知つてゐたので、大いに怖氣づいた。もう昨日から二人の旅人は自由なローマ市民であつて、彼等を笞打つたのは大な罪を犯したのであること、パウロやシラスの訴によつては重い處刑に遭ふことなどを知つてゐたので、彼等は時を移さず街を驅けて獄守の家に往きパウロ等に會うた。此度は、彼等が昨日その背に傷を負はせた二人のローマ人の前に立つて慄える番であつた。黒い眼にじつとパウロは彼等の謙遜な釋明を聞いた。昨日はあんなに驕然と椅子により、法服を纏うて構えてゐた奉行達は、今や哀訴歎願して、自由に市を出で行かんことを、そして自分達の過については何も言はないでくれるやう乞うた。パウロ等こそ怒つて衣を裂くべき充分の理由を持つてゐたのである。

上役達は自らパウロ等の手を執つて街を導き、好意を以て此上滯在することなく直に市を旅立つてくれるやう賴んだ。然しパウロは約束を與へなかつた、そしてシラスを側に連れて、四肢は强張り、茶の外套は破られてボロ〳〵になつてはゐたが、然し今は自由なローマ人として、悠々街をぬけてルデヤの家に着いて、友人達に迎へられた。皆はパウロ等の慘酷な取扱を受けた哀な姿を見て泣いた。

彼等が旅の出來るまでには幾日、否幾週日もかゝつたであらう。其間多の人が會ひに來た、ルデヤの家はクリスチャンの集會所となつてゐたのである。パウロは其時如何なる說教を試みたか。ルカは其を錄してゐない。彼はもう五十歲である、その黒い頭にも霜が降つて來た。聽衆中の誰よりも年老

つてをることを感じたであらう。美しい敷物の上に端坐してパウロの顏を凝視てゐる人々を見ると自分の子供のやうな氣がした。彼は後に此教會の人々に書贈つて云ふ、——

「我が愛する者よ、畏れ戰きて己が救を全うせよ。神は御意を成さんために汝等の衷にはたらき、汝等をして志望をたて、業を行はしめ給ふのである。なんぢら呟かず、疑はずして凡の事をおこなへ。是は汝等責むべき所なく素直にして此の曲れる邪惡なる時代に在りて神の瑕なき子とならん爲である。汝等は生命の言を保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く。斯くて我が走りしところ、勞せしところ、空しからず。」

「兄弟よ、なんぢら諸共に我に效ふものとなれ、且なんぢらの模範となる我等に循ひて歩むものを視よ。それは我しば〳〵汝等に告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者が多いからである。彼等の終は滅亡である。己が腹を神とし己が恥を光榮とし、ただ地の事をばかり思ふ。然し我等の國籍は天に在る、我らは主イエス・キリストが救主として其處から來り給ふを待つのである。彼は萬物を己に服はせ得る能力によりて、我等の卑しき狀の體を化へて己が榮光の體に象らせ給ふであらう。この故に我が愛するところ慕ふところの兄弟、われの喜悅、われの冠冕たる愛する者よ、斯のごとく主にありて堅く立て。」

冬の薄暗い日に、頭巾を被た婦人、外套にくるまつた男の人達は、紫布賣の家に小集會を催して、

此大教師の言に耳を傾けた。その言は彼等の心に種子を播いた、やがて彼等の生涯に花咲き實るのである。

遂にパウロとシラスは旅行に耐え得る體になつた、そこで二人は鋪石道をテサロニケの市に行くことになつたが、テサロニケにはユダヤ人も多く會堂も有つたのである。然しルカとテモテは暫く後に殘ることになつた。惜しき袂を別つて、二人は靜に西門からローマ街道にかゝつた。目的の市に往くまでには、幾多の町村を過ぎなければならぬ。彼等はルカ及テモテと相擁して告別した。青年テモテは僅數日で一緒になつたが、ルカとは數年の別となつた、再會の時はルカも彼等と同じ旅行く宣教者であつたのである。

一二九　羅馬街道・大理石門

ピリピ・五十歳から六十歳

海岸の冬はアジヤの高地の冬と又變つてゐた。彼處では山は目映い氷の峯、道路は雪に埋れてゐた然るにピリピの邊の冬は、雨と雹、寒風、洪水、暴風雨、その時は電光暗き空中に閃めき、雷鳴山間に轉々する、偶には日光雲を破つて現れ、晴天續くと云ふことも有つた。

テサロニケまでは百哩ある、が道はマケドニヤ一の善い道で、ローマ人と云ふ驚くべき道路造者が

大理石を敷き詰めたもので、此大エグナシアン街道は修理が常も行屆き、世界の中心からの距離を示す里程標が立てられてあつた。パウロは里程標を見る毎にローマ市のことを想うた、いつかは萬道出會ふ大都の中心に立つて見渡いと思つた。彼等は海に近い谷間を行き、それから內地へ向つて、やがて島嶼の間に輝く碧水も見えなくなつた。初日には一二の湖を過ぎた、それからストリモン河が流れてをるのである。山間の開けた處に來ると其處に「九道」のアムピポリスが在る。「九道」とは多の道がこゝに會ふからである。此市はピリピよりは大きかつた。

パウロとシラスは旅人溜を求めて一夜の宿を得たであらう。自炊して、厚い外套にくるまつて地べたに横り焚火の方に足を向けて夜を過すのである。旅人達は早起をして朝食を採る、皮袋から水牛乳を注ぎ、小鞄から粗いスコンを取出し食べる位のものである。それから驢馬に鞍置いて、再び之に乘つて行く。パウロは寒い風を喰ふと例の茶色の外套で體を包むのであつた。鋪石道は、また海の方に轉じた、青い波は風の前に鬼ごつごをしてゐる、遙の彼方にはトロイの石垣から金と輝いて遠望されたアトス山が見える。其日の夕方にはゆらぐ波も紫の島々も見えなくなつて山間を進み、アポロニヤ町に着いて、また一夜を不愉快な旅人溜に過すのであつた。

翌日はアキシアスの平野とテサロニケ灣が見えた。此名はアレキサンダー大王の妹の名をとつたもので、聖書の中にパウロの書簡は二つまで此名を持つわけである。テサロニケ市は今も繁華で、港は

其近傍では英國船の多く淀泊する處である。

山の凹地を傳うて行くパウロ等は、碧い灣からギリシャの岸、山の中の山オリンパスの雪を頂いた峯まで望むことが出來た。ギリシャの詩人達は好んで此山の純白な雪、眞珠色の雲の中にヨブを王に戴く想像の人物の群が住んでゐることを唱うた。それについての美しい物語、詩句、子供らしい昔話が書かれた。書いた人達はさうでも無かつたらうが、後人は之を讀んで信じた。多の偶像の名は此等物語中の名を取つたものである。

東側から市に近づいて見ると、テサロニケもアンテオケやピリピの如に、街が段々上りになつて小丘上の城に到つて盡き、五哩の白い石垣、白壁の方塔に圍まれて立派だつた。大エグナシアン街道は東の低い門から入つて本街衢を西門に拔けてゐた。此街道の上、市の中央に白大理石材で建てた宏壯な凱旋門が有つた。此門は現存してゐて、五頭の頸飾をかけた牡牛と、石馬、長い外套を着た石のローマ人などが彫刻してある。是はオクタビアスとアントニイがピリピで戰勝した記念塔で、パウロは其下を通つた時、大理石に深く刻まれたラテン語の宣言を讀んだであらう。

然しピリピ戰爭は、街を狹くする大理石門以外に今一つテサロニケに利益を與へた。テサロニケは勝利軍に味方したので、兩將軍は此市をローマ領の一自由市として、マケドニヤ國駐在のローマ總督の干渉なく市自ら己を治めることを許可したのである。それでこゝには城は有つてもローマの軍人は

居ない、鷲の旗標も見當らない、市民は己の奉行達を公選し、奉行達は其意に隨つて人を罰し、死刑にさへ所することを得た。

此大理石門には、ローマの衣裝をつけた人物の傍に、今でも七人の高官の名が刻まれてある。パウロやシラスも其處を通る毎に讀んだであらうが、其中のソパテル、ガイアス、セカンダスの三人はパウロの友となつたと思はれてゐる。

一三〇　小暗き會堂

テサロニケ・五十歳から六十歳

テサロニケは、ピリピのやうに古いローマの兵隊町ではなく、商人船員勞働者の商業市であつた。故に數百のユダヤ人は一角にユダヤ町を作つて住んでゐて、大きな會堂が有つた。パウロはヤソンと云ふ人を訪ねて其人の歡待を受けたのを見ると紹介狀でも持つて來たらしい。

此市は織物の盛な處であつたのでパウロも暫く滯在するつもりではあるし、例の通り他人の厄介になり度くないので、機織と天幕製造を始めた。彼等の用ひた貨幣は一方に男の人の頭、裏面に翼のついた女の像を彫つたものであつたが、不景氣だつたと見えて、パウロはシラスと晝夜兼行で働かねば生計を支へることが出來なかつた。彼等が、寒い冬の夜、氣飢ゆる幾時間か、燻ぶる油燈の下に、或

は市場で、或は港の船の間で、厚い毛布を賣つた有樣は想像に餘る。

來る安息日も來る安息日も彼は會堂に往つて同胞に、イエスの救主であると云ふ悅の音信を宣傳へた。初めは默つて聞いてゐたユダヤ人等も漸次質問を發するやうになつた。教法師達は、救主と云ふものは、エルサレムに在つて永遠に王たるべきものだと云ふ。ナザレの大工で、十字架で殺された者が救主なものか。そこでパウロは聖書に精通せる智識を以て彼等に答へた。「キリストは必ず苦難をうけ、死人の中から甦るべき者である。わが汝等に傳ふる此のイエスはキリストである。」安息日毎に彼は起上つて同じ悅の音信を宣傳した。ユダヤ人等は群り集つて、大きな、ほの暗い燈明に照された會堂は熱心な人達の黑い顏、輝く眼で一杯であつた。彼等はこの不可思議な同國人の驚くべき雄辯と榮ある敎とに傾聽したのである。パウロの其時の言を知る由もないが、彼は後に記して言ふ。——

「我はキリストに在りて眞をいひ虛僞を言はない。我に大なる憂ある事と心に絕えざる痛ある事とを我が良心も聖靈によりて證言してをる。もし我が兄弟、わが骨肉の爲になるならば、我は自ら詛はれてキリストに棄てられるも亦ねがふ所である。彼等はイスラエル人であつて、彼らには神の子とせられたことゝ、榮光と、もろ〳〵の約束がある。先祖たちも彼等のものである。肉によればキリストも彼等から出で給うた、キリストは萬物の上にあり永遠に讃むべき神である。神の言は廢つたのでは無い。たゞしイスラエルから出る者みなイスラエルであるに限らず、アブラハムの裔だからと言つて皆

その子ではないのである。……神に不義あるか、決して然うでない。モーセに言ひ給ふ『われ憐まんとする者をあはれまん』凡てはたゞ憐み給ふ神に由るのである。神はその憐まんと欲する者を憐み、その頑固にせんと欲する者を頑固にし給ふのである。」

然し會堂の指導者等はパウロの言ふ處を論難して。パウロは誤れる教議を敎へて古い信仰から人を惑はす者であると稱へた爲に、ユダヤ人で信じた者は多くなかつた。他の場所であつたやうに、こゝでも遂にパウロとシラスが交互立つて會堂の興奮した群衆に向つて、此善き音信は先づユダヤ人の爲なのであるが信ぜざる上は、むしろ市中の外國人に敎を宣ぶるに如かずと叫ぶ日が來た。此宣言は非道く主だつたユダヤ人等を怒らせた。憎らしい言だと思はせた。パウロ等は狹い會堂を出て街上の、外の世界に向つて敎を宣べることになつた。

パウロは大膽に、屢反對を受け妨害に遭ふのを物ともせず、テサロニケの市民に、ギリシヤの偶像禮拜を止め、宮に往つて宴樂に耽り罪惡に陷ることを避け、祭壇に酒、果實、動物などを獻げないやうに熱心に說いた。彼は彼等に、活ける神と人の爲に死んだ其子イエスを信じて、現在の生活と變つて、善良、自制の高生涯に入らんことを勸めた。其時の彼の言は不明であるが、後に此敎會に書いた書簡に次の如くある。——

「兄弟よ、我らが汝等に到りしことの空しくなかつたのは、汝等自ら知つてをる。前に我らは汝等の

知る通りピリピで苦難と侮辱とを受けたが、我らの神に頼りて、大なる紛爭のうちに、憚らず神の福音を汝らに語つたのである。我らの勸は、迷より出でず、汚穢より出でず、詭計を用ひず、神に嘉せられて福音を委ねられた者であるから、人を喜ばせやうとせず、我らの心を見給ふ神を喜ばせ奉らうとして語るのである。我らは汝等の知るごとく何時でも諛諂の言を用ひず、事によせて樫貪をなさず（神これを證し給ふ）、キリストの使徒として重んぜらるべき者であるけれども汝等にも他の者にも人からは譽を求めない。汝らの中にありて優しきこと母が己の子を育て養ふ如くであつた。斯く我らは汝らを戀ひ慕ひ、汝等は我らの愛する者となつたから、啻に神の福音ばかりではない、我が生命をも與へやうと願うたのである。兄弟よ、汝等は我が勞と苦難とを記憶してをるであらう。われらは汝らの中の一人をも累はすまいと思つて、夜晝、工をなし勞しつゝ福音を宣傳へたのである。また信じたる汝等にむかひて、如何に潔く正しく、責むべき所なく行うたかは、汝等も證し給ふ。汝らは知る、我等が、父が其子に對する如に各人に對し、御國と榮光とに招き給ふ神の心に適ひて歩むべきことを勸め、また勵し、また諭したることを」

パウロは柔和で、勇氣に滿ちて、確乎した、謙遜な働をして毎日、イエスに在る高き生涯の何たるかを模範を以て彼等に示した。一般の人々は祭司の手本に習ふものである。パウロは彼等がクリスチヤンとなつて働きの手を休め、徒に說教を爲歩いて、食物や衣服は誰かが與れさうなものだなどと思

ふのを懼れたのである。故に彼は信徒から一文も助けられず、働かぬ者は喰ふべからずと敎へたのである。

一三一　桃色の頭布、刺繡の外套

テサロニケ・五十歳から六十歳

人々はパウロを好いた。彼は勞働者で、自ら糊口して敎を宣べた。市の人は染物屋、陶器師、鞍造、石屋、大工、船大工、商人、水夫などで、自由民もあり、多の奴隷も有つた。パウロは短刀直入に、日々の生活は奈何あらねばならぬかを敎へ、彼等の眼を活ける神に向けさせることを努めた。然し何時亂暴な反對に會はないとも限らなかつた。此市には敎育のある人々も有つた、ローマ雄辯家の最大なる者シセロは、ローマを退去せねばならなかつた時に、此市を隱退の場所として選んだ、それはパウロの時から二百年許前であつたが尙ほ彼のことは市民の記憶に新であつた。敎育ある人々は偶像禮拜を信じてはゐなかつたが、たゞ時の流行に伴うた丈けで、一般の人が信じてをるオリムパス山上の神々の話も、冷笑的に聞いてゐた、彼等も此旅のユダヤ人を好いた、その上品な身振、輝く眼、殊に洗練された文章が、如何にも學者らしかつたからである。彼等は、パウロの畫くイエスに現れた節制聖純なる高生涯及び活ける神に對する信仰に比較ぶべきものを未だ曾て聞いたことが無かつたので

ある。

パウロが市場で冬の日光を浴びながら說敎してをると頭巾を被り、紫、濃碧、或は黑や眞紅の外套を纏うた婦人達が立止つて、エルサレムの女達が泣きシラスが見たと云ふ聖き人の話を拾ひ聞きした。彼女等の着物は絹糸の刺繡を施し、靴は金のレースで飾られてあつた、頭巾を被つた婦人は市の富祐な家の貴婦人令孃達であつたのである。かくして會堂に出入してゐた異邦人が澤山、それから市の貴婦人達の幾名かが公然クリスチャンとなつて集會所に集つてパウロやシラスの敎を聞くことになつた。マケドニヤでは人々は自らギリシャ人であると稱へ、婦人達はアジヤやバレスチナでは有つことの出來ない信敎並に生活の自由を享樂してゐたのである。イエスの存命中婦人達は最忠實な信仰者であつたが、敎の宣べらるゝ處必ず婦人の入信の早きを見るのである。其も不思議では無い、偶像敎の野獸的馬鹿騷に苦められたのは婦人で、イエスが最大なる喜悅と貴き自由との音信を與へたのも婦人の爲であつたのである。而してパウロは此等の薔薇や天空の色に染められた香水匂ふ美裝をした貴婦人達、さては商人、職人、染色工場や鞣皮工場から集る奴隸達に如何なる說敎を試みたであらうか。

小さな戸口、高い窓の大きな部屋に、床の上にギッシリ詰つて、或は壁に倚つて立つたまゝ集つてをる人々の樣子を想像して見る。其は夜である、天井から鎖で垂下された小さい燻ぶる燈火がパウロとその若き友の顏を赤く照らしてをる。婦人達は近く頭巾を後に投げて座つてゐる。男の人達は頭巾

を着てゐるのもあれば着てないのもある。或者は說敎者を悅ばしさうに凝視め、或者は涙を陰して自分の握締めた手を熟視つてゐる。パウロは神の言を話しつゝあると信じてをる滿堂の聽衆は息を凝す、

「我ら、主イエスによりて汝らに求め、かつ勸めるなんぢら如何に步みて神を悅ばすべきかを我等から學んだ如く、また步みをる如くに增々進まんことを。我らが主イエスに賴りて如何なる命令を與へたかは、汝らの知る通りである。神の御旨は、汝等の潔からんことであつて、卽ち淫行をつゝしみ潔く、かつ貴くし、神を知らぬ異邦人のごとく情慾を放縱にすまじきを知り、斯る事によりて兄弟を欺きまた掠めないことである。凡て此等のことを行ふ者に主の報し給ふことはわが既に汝等に告げかつ證した通りである。神が我等を招き給うたのは汚穢を行はせる爲ではない。潔からしめる爲であるであるから之を拒む者は人を拒むのではない、汝らに聖靈を與へたまふ神を拒むのである。

「兄弟の愛については言ふ必要も無い。汝らは互に相愛することを親しく神に敎へられ、また既にマケドニヤ全國に在るすべての兄弟を愛するからである。されど兄弟よ、汝等に勸むます〳〵之を行ひ、我らが前に命ぜし如く、力めて安靜にし、己の業をなし、手づから働け、他の人に對して正しく行ひまた自ら乏しきことの無い爲である。既に眠れる者のことに就いては、汝らよく知つておいて貰ひたい。希望無き他の人のごとく歎かない爲である。我等の信ずる通り、イエスが若し死にて甦へり給う

たならば、神はイエスによりて眠に就いた者を、イエスと共に連れ來り給ふ筈である。」

このやうな言を聞いた彼等が、パウロの云ふのは神の御旨であると考へたに不思議は無い。パウロはまた、彼等が生れるとから育て上げられた習慣に從はないで偶像とその宮から離れたと云ふことを聞いて、同じ市民達が迫害を加へるに相違ないと警告を與へた。男子達は底力のある聲を揃へて、笞刑も投獄も恐れはしないことを言明し、婦人達は、自分等もさうした事に遭ふのかと怖れた。

かくパウロは語り、彼等は聽いた。說教が終ると彼は人々の間に入つて慰安と奬勵の言を與へた。そして思ふに、パウロが初めてイエスの爲に、彼等が偶像に背を、活ける神に顏を向けることを力說した夜の、パウロの音調と言とは、男も女も遂に忘れることが出來なかつであらう。

一三二　戸を閉ぢて

テサロニケ・五十歳から六十歳

山間には吹雪、河川には洪水、島々には暴風雨の冬數ヶ月、パウロとシラスは、靑い灣頭の開港に過した。パウロは此市の人達から助を受けるのを斷つたが、然しある日彼はピリピからの贈物を悅んで受けた。使者はエパフロデトであつた。彼はピリピの信者達からの贈物を携へて來た。贈つた人のうちにはルデヤも入つてゐて、パウロが勞役をしてゐるのに同情したであらう。パウロが非常に喜ん

で其贈物を受けたので、ピリピの人達は再た贈物をした。大して高價なものでは無く、干した果物、いつた穀物、油、葡萄酒、衣類、多少の金錢位のものであつたらうが、其親切はパウロの心を打つた後に書いた彼の手紙に非常に溫に感謝してをる。

春は聞近であつた。雪は山から消え、野花は谷を侵し初め、黑い枝は日をうけて綠の枝條、葉扇と化りつゝあつた。船舶は水に下されて夏の航海に備へられつゝあつた。大船は遠くの港から來て、暴風雨は既に去り、出帆の安全なことを報ずるのであつた。旅の傳道者等は、此市で福音を普及するに最成功した。然し成功は危險を伴うた。會堂のユダヤ人等はパウロ等か會堂を見棄てゝ以來罵詈嘲笑を加へてゐたが、市民に向つて成功したのが癪に障つた。信者が漸次殖えて、活ける神と救主イエスを信ずるを見て胸を痛め、パウロとシラスは市から追出すべきものだと言つて罵つた、そして遂に一の計畫を立てた。

彼等は金さへやればどんな惡い事でもする市の無賴漢共の處に行つて、あの二人の說教者のことで騷いで彼等が罰せられるやうにして吳れと賴んだ。彼等はまた市場の人達に、パウロのことはよく解つてをる、パウロとシラスは詐僞者で惡計をたくらんでをる者で、こゝに來る前もピリピで鞭打れた揚句牢に打込まれた者であると廣告した。人々は珍しがつて聞き、下等な人間共は大騷をして人集が大きくなつた時、二人のユダヤ人を奉行の處に引立てやうと言ひ出した。

毒々しい威嚇文句を竝べながら、彼等は野次馬共を率ゐて、叫びつ呼はりつ日の照る町を、ヤソンの家さして驅け出した。然しヤソンは其事を聞いて、戸を閉してあつた。人々は戸を棒で打つて二人のユダヤ人を出せと叫ぶ、けれどヤソンや友人達は默つて內から戸を堅く押してゐて開けない、外の喧嚣は益大きくなつた。遂に戸が破られて暴漢達が押入り家ぢうを探した時にはパウロ等はもう居なかつた。しかし首謀者等は其儘では承知しなかつた。忽ちヤソンと家の內にゐたクリスチャン達をや叫ぶ群民の中を引摺つて市場に往き、そこに裁判の座に座つてをる奉行達に向つて、此人達は罪人を隱蔽つた者だと言つて訴へた。惡漢共は彼等に金を與へたユダヤ人等に敎へられて、パウロとシラスはローマ皇帝に對して叛謀を企てゝゐたのだと叫んだ。

ローマの法律に隨へば、謀叛は死刑であつた、多の事件が僅此一語で葬られた。ローマ帝國では謀叛人だと云はれるほど危險なことは無かつたのである。奉行の職務は第一に訟訴と其答辯を書取り審判の日を定めることであつた。高められた敷石の前に立ち、腕まくりした腕をヤソン及クリスチャン等の方に伸べて、首謀者は、騷いで居る人達にも聞えるやう大聲で叫んだ、——

「他の處で天下を顚覆した彼のユダヤ人等が此市に來たのをヤソンは家に迎へ入れたのだ。あの者どももヤソン等も、ローマの法律に反いたことをしてゐる。カイザルのほかにイエスと云ふ王が有ると云つてをるが、確に謀叛だ。」

群衆は此言を聞いて益興奮した、怒號が四方から起つた。奉行達は訟訴が重大なので心を痛めた。そこで訟訴の言を記し原告被告の姓名を記入して、今日の裁判と同樣の手順を取つた、我々のやつてをる事は多くパウロ時代のローマの法律を學んだのが基礎となつてをるのである。彼等はヤソンと其友人等から保證の金又は物品を取つて、審判の日まで保釋を與へた。ヤソンは祐な人であつたから皆の保證を拂うて靜に家に歸ることが出來た。

會堂のユダヤ人等は半分計企に成功したが、パウロとシラスとを捕へることが出來なかつたので氣が氣でなかつた。ヤソン等を奉行の手に渡した上は、二人をもやがて捕へ得ると思つた。然しヤソンは飽迄パウロ等を渡さない決心であつた。裁判には自分等丈けでかゝつて、パウロとシラスは白洲に立たせないつもりであつた。で其夜、信徒達は見破られないやう變相させてパウロ等を市外に連出し途中まで見送つて置いて、罰を受けるべく自分等丈け市に歸つて來た。裁判の日が來た時彼等は、パウロ等は居なくなつても、罪を免れず、重い罰金刑に會つた。彼等はそれでも心を變へず、新宗敎を公然信じてゐた。そして立派な模範を示したので、テサロニケのクリスチャンはパウロの組織した敎會中最强のものゝ一となつた。

一三三　優しき會堂のユダヤ人

ベレヤ・五十歳から六十歳

バウロと友は茶色の外套に身を包んで、テサロニケを後にエグナシアン街道に沿うて道を急いだ。月の光は市の白い石垣を寂しく照してゐた。彼等の通つたのは西のアウグスト門で、今も此門は在る往く先は五十哩彼方のベレアであるが、いつまでも人通の多いローマ街道をたどつたのではない。暫くは白波碎くる海を左に見て進んだが、やがて内地の方へ平野を貫いて行く他の道に入つた。そして弱々しい鼠色の曙の光が海上にゆらぎ、黄赤の帶が市の後の山の上に棚引く頃、二人は密林岸を被ふ大きな河に近づきつゝあつた。此期節、曙いまだ早き時刻には、樹葉、草の葉、花の杯を濕す生々する露、芳香を放つ花片、蕚に溜つた露は、大地を冷し、やがて日光の前に消ゆるのである。すると森は小鳥の歌で響き亘り、それも日中になると靜まつてゆく。

道は數哩の間、處々空地はあるが大低は深い森をぬけて行く、夜になると村に宿を求めて狼や盜人の難を避けた。其道は今日では安全なもので、バウロ等が旅の目的地であるベレヤの町まで、水に流さるゝ小石道を二日もかゝつて攀上つた處を、汽車に乘つて半日足らずで行けるのである。ベレヤは大きくは無かつたが、それでも石垣に圍まれた町で、平野から森林、其間に流るゝ二つの河、遠くに

山々を望むことが出來たが、海丈けは無かつた。狹い街路は綠樹に陰せられ、近くの河から引いた水が其側を流れてゐた。多分紹介狀を持つて來たと見えてバウロ等は直ぐに友人を得、同國人の某々からも歡迎を受けた。

ベレヤには相當ユダヤ人が居り、中には學者も有つて、會堂を持つてゐた。例によつてバウロはシラスと共に最初の安息日に會堂を訪ねて、同胞に向つて、イエスの話をし、聖書を引用して彼が眞に預言者の記した通りの救主である事を說いた。バウロは、此時聽衆の態度を非常に快く思つた。青い幔幕と常夜燈明の後に置かれた箱から聖書の茶つぽい卷物を取出して、彼等はバウロの引用する聖句を指し、彼が齎した驚くべき報知について親しくバウロと論じ會うた。バウロはイエスを信ずることゝ新福音とを力說した。後に書かれた彼の文に云ふ、——

「律法の言ふところは律法の下にある者に語るものである。律法の行爲によりては、一人も神の前に義とせられない。律法によつて罪が分るのである。然るに今や律法の外に神の義は顯れた。これは律法と預言者とによりて證せられ、イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に與へたまふ神の義である。之には何等の差別はない。凡ての人が罪を犯したから神の榮光を受くるに足らない。功なくて神の恩惠により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせられるのである。卽ち神は忍耐を以て過來しかたの罪を見遁し給うたが、己の義を顯はさんと、キリストを立て、その血によりて信仰に

よれる宥の供物となし給うた。これ今己の義を顯して、自ら義たらん爲、またイエスを信ずる者を義とし給ふ爲である。然らば誇るところが何處にあるか、既に除かれたのだ。何の律法によるか、行爲の律法か、然うでない、信仰の律法に由るのである。我らは思ふ、人の義とせられるのは、律法の行爲によらず信仰に由る。神はたゞユダヤ人丈けの神であらうか、また異邦人の神ではないか。然り、また異邦人の神である、神は唯一であつて割禮ある者を信仰によりて義とし、割禮なき者をも信仰によりて義とし給ふである。然らば我らは、信仰を以て律法を空しくするか、決して然ではない、反つて律法を堅うするのである。」

辛抱良く聽き、また聖書を調べたのち、可成のユダヤ人がイエスのキリストたるを信じて、クリスチャンに加つた。然し他の人々は敎法師に敎へられた通りの舊宗敎を良しとした。パウロはまた町の人にも傳道した。こゝでもテサロニケと同樣、良家の婦女達が、群衆の外輪に立止つて、外套に美衣をかくし、面を半ば被うて、茶色の外套を着たユダヤ人が、彼等のために苦き十字架上の露と消えたガリラヤ人の話をして偶像と其宮及び凡ての恐るべき惡境遇を脫して自らの家を活ける神に祈り、奉仕へる宮とせよと勸めるのを驚いて聽いた。彼女達は胸嵩まり心淸められ、クリスチャンにならうとの決心を懷いて去つた。綠の木陰に、息を凝し四邊の人を制止して漸くパウロの話を聞取り得た彼女等は、果して何を耳に入れたであらうか。

「汝ら愛せらるゝ子供のごとく、神に効ふ者となれ。又キリストが汝らを愛し、我らの爲に己を罄しき香の飮物にし犧牲として神に獻げ給うた如く愛の中を歩め。聖徒たるに適ふごとく、淫行、もろもろの汚穢、また慳貪を汝等の間にて稱ふる事さへするな。また恥づべき言、愚なる話、戯言を言ふな。それは宜しからぬことだ。寧ろ感謝せよ。凡て淫行のもの、汚れたるもの、貪るもの、卽ち偶像を拜む者等は、キリストと神との世嗣たることは出來ぬのである。汝等人の虛しき言に欺かれるな。神の怒は、これらの事によりて、不從順の子等に及ぶのである。」

ベレヤの貴婦人達が、四辻や市場に立つて、偶像禮拜の墮落した行爲から轉じて、節制、自制の生涯に入るべく人々を勸めてをる二人の外國人に傾聽したのも無理は無い。彼女等の多くは、自分の息子や兄弟や良人達が偶像の宮の祭の爲に、自分達の手から奪はれて破滅に導かれたのを幾度か目擊したのであつた。

町の男の人も信徒の中に加つたが、パウロの成功は、會堂のユダヤ人の嫉妬や憎惡を受けなかつた彼等はテサロニケのユダヤ人よりは立派な人々であつたのである。町の人が偶像を棄てゝ、會堂の流儀に從つて神を拜せなくとも、パウロとシラスが、イエスをキリストと信じさせる事によつて彼等を神に導けば其でも結構である、と思うて、ユダヤ人等はパウロと友情を保つた。

一三四　雲にかくるゝオリムパス

デアム・五十歳から六十歳

もう夏になつて狹い町内の暑さは酷しく、商人達は四方に出掛けて物資を集散すると共に、到る處に四方山の噂を傳へた。信者の數が日々加つて行くのでパウロは町に留つてゐた。ユダヤ人等は何處でも自分の住んでゐる處で行商をやつた。戸毎に、村から村、町から町へと、或は手に提げたバスケットに、或は驢馬の馱籠に商品をつめて歩き廻つた。そんな譯で、テサロニケのユダヤ人等に、ベレアのユダヤ人とパウロが親密で、パウロは大いに成功してゐると云ふことが聞えたのは不思議ではなかつた。自分の市で無頼漢共に金を與へて暴動を起させた程の彼等のことだから、こゝまでもパウロを追うて來たのは致方もない。

二年前のイコニアムのユダヤ人のやうに、テサロニケのユダヤ人等はベレアまで乘込んで來て、パウロの傳道を許したと云つてこゝのユダヤ人を罵り、テサロニケでパウロを追出した樣子を話し、市場まで行つて、大聲にパウロを罵詈して人々を騷がせた。パウロとシラスは、ローマ皇帝を差置いてイエスを王とし、世界を顚覆させやうと企てゝ居る者だと言つた。他の市町で追はれた者だから此町に來て惡い敎を宣べてゐるのだとも言つた。町の人達は顏なじみの隣の市のユダヤ人等が非道くかの

二人の靜な傳道者を非難するのを聞いて心を亂された。

追々危險が身邊に迫つて來るのでパウロの友人達は暴動の突發しないうちに逃した方がよいと思つた。パウロも、テサロニケでヤソンや信者等が自分の爲に重い刑に會うたので、ベレアでは一人も其樣な目に會はせ度くなかつた。パウロの仕事はもう出來てゐた。クリスチャンの敎會は組織されて一人立が出來るし、シラスと、それから今再た一緒になつてゐるテモテとは後に殘つてもよい。

ベレアの信徒達は、何方にでも舟の得られる港まで安全にパウロを伴出すことにしたので、パウロは愈町に別を告げた。またも彼は、外國人でも神を拜することができる、イエスを信じて救はれると說く爲に、自分の同國人から憎惡を受けて遁走するのであつた。二十年前自分が迫害を加へたのが今己の頭上に訪うて來て、到る處、主なる敵は同國人、昔の友であるのである。

彼等の目指すデアムはテサロニケの對岸に在つて、二日にして行かれるのである。處々に樹を載せ綠の松の帶を回らし、陽に輝く岩を鎧うたオリムパス山は、つい背後に聳えてゐた。その廣い平板な頂上には、ホーマーの所謂ギリシャの神々の星に輝く廣間の床が有つて、眩き雪の敷物、耀ふ雲の窓掛に飾られてゐた。けれども、いかに神主達が云はうと、詩人が唱ふと、火と燃ゆる雲は天使の翼にあふられた事も無く、雪はその薔薇色の足の跡をつけられた事も無かつたであらう。

丘地を下りて海岸に出ると久々で波の音がする、船を待つまに鼻を打つ藻の香も懷しい。マケドニ

ヤを横切つて來たパウロは、さて何處に向ふか。パウロは小い河口に集つた船を選んだ。テサロニケに歸り度くも有つたが、今は敢て冒險すべき時期でない。アテネに行く船が有つたのでパウロはアテネ行を決心した。友人達の中にも一緒に往つて見やうと云ふ人が出來た。蓋し暫くで歸つて來るものと思つたからである。アテネは二百五十哩向ふで、一週間の航海を要する。然しマケドニヤを離れてアケイヤの國に入ることになり安全では有つた。パウロはこゝまで見送つて來てくれた人々に奬勵の言を殘したであらう、——

「末の世に苦しき時が來るであらう。人々は、己を愛する者、金を愛する者、誇るもの、高ぶる者、罵しるもの、父母に逆ふもの、恩を忘れるもの、潔からぬ者、無情なる者、怨を解かぬ者、譏る者、節制なき者、殘酷なる者、善を好まぬ者、友を賣る者、放縱なる者、傲慢なる者、神よりも快樂を愛する者、敬虔の貌をとりてその德を捨つる者となるであらう。斯る類の者を避けよ、彼らの中には人の家に潛り入りて愚なる女を虜にする者がある。彼等は學んでも眞理を知る知識に至ることを得ない彼等は眞理に逆ふもの、心の腐れたもの、また信仰につきて棄てられた者である。此の上進むことは出來ぬ、彼らの愚は凡ての人に知れて來る。汝は我が教誨、品行、志望、信仰、寬容、愛、忍耐、迫害及び苦難を知り、またアンテオケ、イコニアム、ルステラで起つたこと、わが如何なる迫害を忍んだかを知つてをる、主は凡てこれらの中から我を救ひ出し給うた。凡そキリスト・イエスに在りて敬虔

を以て一生を過さんと欲する者は迫害を受けるであらう。惡人と欺く者とは、ます〳〵惡に進み人を惑しまた人に惑されるであらう。然し汝は學びて確信した所に常に居れ」

パウロは艤て船中の人となつたが、伴ふ者はシラスとテモテでは無くてベレアの信徒二三であつた。暫く使された地マケドニヤを去つてアテネに隱れ、再た歸つて來るつもりであつた。青い灣を乘出すと、オリムパス山は一層高く仰がれたが、茶の外套に縞の頭巾を被て、黃色の廣い帆かけから靜に打見やるユダヤ人の眼には、何の神秘力も、詩的感興も移らなかつた。かの白雲の裡なるギリシャ諸神のホーマー物語は、パウロにとつては老婆の作話以上であつた。僞の、偶像的の、惡い物語で、無稽を被ふに小說的な、愛くるしい、耀ふ衣を以てし、人々を惑はすものに過ぎない。タルソの大學に學び學者達に接したパウロはホーマーやギリシャの物語はよく知つて居たであらう。其上銅像一つ立てゝも神を汚すのだと思はれたエルサレムで磨き上げられた彼のことであるから、偶像を嫌惡し、之を拜し崇むる者を抗擊した。で船頭がラブやネプテユーンの神が航海を守つてくれる話をしても、パウロは何等畏敬の念を起さず、たゞかの山上の羊毛の如き雲から舷に踊る青い波へと眼をうつすのであつた。

一三五　女神の冠

デアム・五十歳から六十歳

パウロは海港育ちだから船には馴れてゐて、吼ゆる風、荒るゝ波にも驚かず却て海になれた者の壯快さを覺えた。北から吹く順風を受けて大きな帆が檣に軋り張詰めて、波が船の後を追驅けて來る時は、アテネまでの航路も、さう長くはかゝらなかつた。夏は青天から恐しい太陽が甲板に照付けると陰のない船の上は堪らないほど暑かつた。テサロニケ灣を南下するパウロ等は西海岸に沿うて船を走らせた。岸に近く、ギリシャの詩に名高いオリムバス、オツサ、ペリオン其他の山々が峯を列べてゐた。灣を出切ると東の空遙かに、うねる波の上、紫のアトスの峯が、隱れることの出來ないかの如く、見えてをる。

船首に白い眼玉を畫いた此邊の舟の船頭は、迷信家で夜は舟をやらなかつた。夕になると港を求めて錨を下し、甲板に蓆を敷いて、外套にくるまつて寢るのである。風は回りにうなり、波は舟を搖がせて人々を眠に誘ふのであつた。

第二日には、既にテサリ諸島の中に入込んで、長いネグロポント島とテサリの岸の間を通過してゐた。水は靜に、四方の景色得も言はれず、何處を出口とも見分けが付かなかつた。前の山々の間を通

つてをるのはテルモピラエの道で、「暑い門」と呼ばれ、山と澤との間を行き、ギリシャで最名高い古戰場であつた。そこで五百年前、僅三百のギリシャ兵は、ペルシャの大軍を喰止めたのである。若し船頭がギリシャ人であつたならば、パウロは必ず其話を聞かされたに相違ない。ギリシャ人は此大戰爭の話をするに倦むことを知らない、その歷史家ヘロドタスは是を書物に書いて今日迄殘つてをる。この狹い海峽の端に出ると、小さな開口が有つて、アテネ市のあるアチカ國の景色に富む岸に沿うて五十哩の間に横はる美しい內海が展開する。綠の森を帶にした山々は兩側に立ち、町村の白い石垣は住む人多きことを語つてゐた。パウロ等は、世界の最開化した國ギリシャの中心に船を進めつゝあつたのである。

微笑むが如き海が終ると、次の水路に入る。兩側は高原地である。それを拔けると再た內海に入る島々が點々浮んでゐる。直ぐに大陸の山間に高きマラトンの野を過ぎる。そこは幾百年か前、アテネの人々が來て、ペルシャの侵略軍と戰ふた處で、其戰は今日迄ギリシャ人の談草となつてゐる。こゝまで來ると海は黃金色の南に開ける。果物澤山のサイクレードの島々は、近いものゝ焦茶色から、遠いものの、青空に形置く雲の如く紫や光る眞珠の色に見えるまで、雜多の色と形を現して海面を飾つてをる。パウロは變化の多い景色を每日默つて見てゐたのでは無からう。機に向つてゐても舟に乘つてゐてもパウロは常に宣敎を怠らなかつた。彼は友人達に次のやうな話をしたであらう。——

「我等はこの寶を土の器に有つてをる、これは優れて大なる能力が、我等から出ずして神から出るこの顯れん爲である。われらは四方から患難を受けるけれども窮せず、爲ん方つきるけれども希望を失はず、責められるけれども棄てられず、倒されるが亡びない、常にイエスの死を我らの身に負ふてをる。これはイエスの生命が我らの身に顯れん爲である。我ら生ける者が常にイエスのために死に付されるのは、イエスの生命が我らの死ぬべき肉體に顯れん爲である。されば死は我等のうちに働き、生命は汝等のうちに働くのである。錄して『われ信ずるによりて語れり』とある通り、我等にも同じ信仰の靈があり、信ずるに因りて語るのである。これ主イエスを甦らせ給うた者が、我等をもイエスと共に甦へらせ、汝等と共に立たしめ給ふことを知つてをるからである。凡ての事は汝等の益である。これは多くの人々によりて御惠の增加はり、感謝いや增りて神の榮光の顯れん爲である。

「故に我等は落膽しない。我らの外なる人は壞れても、內なる人は日々に新である。我らの受ける暫くの輕き患難は、極めて大なる永遠の重き光榮を得させるのである。我らの顧る所は見ゆる者でなくて見えぬ者である。見ゆる者は暫時であつて、見えぬ者は永遠に至るのである。」

船頭は、丘の上に高くミネルバの神宮を望んで、スニアム岬と知り、舵を轉じて高い岬を廻るのである。船は既にアチカ國の南端に達し、船首の像はアテネの美しい灣に向つてゐた。近くには音に名高いアギナ島の山が見え、其後には岩ばかりの禿山サラミス、更に遠くモレアン山脈が連つてゐた。

然し都市のなかの眞珠であるアテネはまだ右手の紫の山陰にかくれてゐた。閃く水中に陽を浴びた絕壁を露出して立つアギナの上には、三十哩足らず向ふの大都コリントを回らす青い山々を望むことが出來た。

船の小高い處に立つて、パウロと伴の人々はギリシャの首都を初めて見やうと眼を瞳つた。やがて舵手がアクロポリスの頂にあるミネルバの金冠が光つたと云ふ。向ふに裸になつて見える白い絕壁は世に聞えたペンテリカスの大理石場で、背景に紫のチテリアン山脈を負うてゐる。そこの深い谷には特殊の縞のついた蜂や青い蝶が、ハイメタス花の蜜を吸つてゐるのである。平野から急勾配に丘地を五哩登つた高見に周圍に街衢を控へてアテネの衛城が白く輝いてをる、岸に向つて船を入れるパウロ等の眼にも、その天理石の四角な建物は、判然と映つた。

波靜に船は滑るが如く灣に入つた。濱風涼しき岸には金持連の庭園、別莊が列んでゐた。然しまだ都は船をずつと廻して、防波堤の塔と塔との間に重い鎖を繫いだら閉塞が出來る位狹い港口に進まねば見えぬのであつた。其入口を入るとアテネの港ピレアスに着き、航海の終も近いのである。

一三六　銅像と白い宮

ピレアス・五十歳から六十歳

白いピレアスの町は、神殿、劇場、商店、倉庫などを港の水に寫してゐた。町は岩の岬の上に建つてゐて、船着場は兩側にあり、それにケヒサスとイリサスの二川が流込んでゐた。此兩つの川はアテネから海までの地方を濕してゐた。穀物倉は港の主要な建築であつた、そこには都の爲に、船から下された小麥、大麥、穀粉、食油、乾物、葡萄酒、漿果、干果物、其他の食品が詰込まれてあつた。

黄色い帆は卷上げられて、皐頭に沿うて徐に橈を漕ぎ、石の柱に船を繋いだ。そこには樣々の衣裝を着て麥藁やフェルトの帽子を被つた幾百の人々が船の入るのを眺めて談笑してゐた。町の石垣は港の突端まで突出てゐたので、鎖で海を塞げば、海陸共に防備は堅固であつた。美しいアテネはずつと丘の上の方に在つたが、海まで街道を通ずることを欲した市民は、ピレアスまで連絡道路を造つて、兩側に高さ二十ヤードの巨きな石垣を築き之を「長壁」と呼んだ。厚さは、上を軍車が馳けられる位で所々に塔が有つた。アテネから海まで其道路に沿うて長い村のやうに家が續いてゐた。たゞし住民は大石垣で外野は見られなかつたのである。

尤もパウロ等が其路を踏んだ時は、既に石垣は壞れてゐた。征服軍が二百年も前に、此石垣を打毀つた。そして殘の石で村人達が家を建てゝゐたので、殘るものは土臺石丈けであつた。アテネの人達が市を永遠に殘し度いと思つたのも無理はない、パウロの時も、否今日と雖も人間の造つた最美しい家と銅像の建つ世界一の雅しい都である。パウロの生れる前五百年のアテネは偉大だつた、が後ロー

マ軍に奪略せられて、パウロの來た頃はローマ領であつた。

パウロとベレアの信徒達が市に近付いて眞先に目に付いたのはアクロポリスの丘であつた。市の中央に城の如く突立つた丘の腹は、黄、紅、黑の大理石の絶壁をなし、更に白い石垣を以て固められ、頂上は一杯に神殿の諸建築物が建つてゐた。最大なるはパルテノンで、最美しく、朝陽に向つて門を作り、其側に高く、最偉大なる彫刻家ピデアス作のミネルバの銅像が立つてゐた。其頭に戴く金冠の輝は三十哩の沖にある船頭の目標となつた、そこにアテネの圓柱宮も有つたが、安置せられたのはピデアス作の白像ではなく、僞澤山の橄欖材に彫つた小さな醜い像であつた。此小さな黑い人形は天降つた者だと云ふのが千年來の言傳であつたので、其前には芳香の油に火を點けた常夜燈があつた。パウロは此等の白い神殿と、輝く鎧をつけ槍を揭げたミネルバ女神像を見て、偶像教が雲の如く此都を覆ふを見た。

市は丘と谷の上に建つてゐて、美しい建築物は丘の上に在つた。不規則な街が谷を縫うて西側には公共の建物だの個人の住宅などが建ち、綠のシカモアー樹や絲杉の並木が有つた。辻や園には、祭壇や宮、男女の像が立つてゐた。實際生きた人間の像もあり、呼吸をしたこともない者の像もあつた。雪白、淡紅、金線入りの眞紅などの大理石に彫つたもの、瑪瑙、ボルピリー、青銅、眞鍮のもの、金渡金のものなど樣々であつた。其が餘り澤山なので、アテネでは人を見出すよりも立像を見付ける方

が容易いと戯談した程であつた。

バウロは是迄兵隊の市、商業の市、學問の府、銅像の都に居たことは有るがアテネのやうな處は初てゞあつた。アテネは、美術、文學、立像、建築、繪畫、書物、自由思想、自由討論、また殆んど自由信教の都であつて、光明の市であつたが最高の市ではなかつた。バウロはピレアス門を抜けて最長い街路に入つた。其は家の滿ちた谷間を貫いてゐた。圓柱並立つ柱廊が歩道に蔭してゐた。沿道は商店軒を列べてゐた。貴顯紳士は馬に跨つて黑人の奴隷を從へて往き、驢馬や騾馬は重荷を運び、人夫達は荷物を下げたり、手車を押したりして往く。寶石を飾つた貴婦人達は、高籠に乘つて華美に着飾つた奴隷に舁がせて通る。犬の群は食を獵つて走り、雀の群を驚かす、鳩群は空中に舞ひ、暑い宮の屋根の上に降りて來る。

ギリシヤの女達は、白や紫、赤バラ色か薄青の吹流しの衣の頸と緣とに濃色の刺繍を施して、絹の帶を締め、赤いスリッパーを穿いて歩道の木蔭を歩く、薄色の頭髪はちゞらせ束ねて金のピンで止めてゐた。男達は短く頭を刈込み、上衣に濃青色の外套を羽織つて、女と連立つて歩き、奴隷を後に隨へてゐた。中以下の人達は白い衣、美しい色物を持つてゐず、大低青や茶の粗末な短上衣を着てゐて腕も足も裸だつたが、然し微笑々々と幸福な顏をしてゐた。多の者は、少し行つた處の、諸街の出會ふ市場を指してゆくのであつた。そこにはマーキュリーの銅像が立つてゐた。バウロは人聲喧しく、

敷石の上に鳴る足音高き市場に立つて、市の人々が木造の假小屋や黃色い天幕の中に出入して買物を求めてをるのを見た。その中には花賣娘達の聲も交つてゐた、白や黃色の百合花、赤い薔薇、香しい葉花、常春藤の小枝などの束を持つて人々に勸めてゐた。ユダヤ人等は美しきギリシヤ人の中では直ぐ、その黑い髪と眼、それから赧い頰で見分けが付いた。商取引の有る處ならば何處でもユダヤ人が居たのである。バウロは其誰かに自ら紹介して、伴はれてユダヤ町に入り、會堂に近く宿を得た。

バウロをアテネまで見送つたベレアの信徒達は、彼を一人置いて歸つて行くことになつた。其時バウロはシラスとテモテに速にアテネに來てバウロと落合ふやうに固い傳言をした。バウロがテサロニケとビリピに歸ることを熱望してをりながら此命令を發した意味は不明である。或は此大都を見て、二人の助を借りて、ギリシヤの母であるアテネの中心に基督教會を建てることが出來ると云ふ考が彼の心に起つたのかも知れない。

一三七　獨りアテネに

アテネ・五十歳から六十歳

黃金期たる秋の三週間、バウロは美しいアテネに一人居たが幸福では無かつた。宮、祭壇、立像が如何に美しく有つても、バウロの心を亂さずに置かうか。バウロは人を欲したのである、石ではなか

つた。此等の宮は皆偶像の宮である、よろしく土埃の中に打碎くべきである。道傍に供物をしてある祭壇を倒して了ふべきである。此等諸の像は神の榮を傷くる銅像である、よろしくす斷し、粉末にひき、火に燒くべきである。

最初の安息日に彼は例の如く同國人と共に、薄暗い會堂に入つて、先づユダヤ人等に新福音を宣傳へた。其言は次の文で想像が出來やう、——

「ある人は『神、なんぞなほ人を咎め給ふか、誰かその御定に悖る者あらん』と言ふかも知れぬ、あゝ人よ、なんぢは誰なれば神に言ひ逆ふか、造られし者が、造つた者に對うて『なんぢ何ぞ我を斯く造つたか』と言へやうか。陶工は同じ土塊をもつて、貴きに用ふる器も造り、賤きに用ふる器も造るの權が有るではないか。もし神が、怒をあらはし權力を示さうと思し召しても、なほ大なる寛容を以て、滅亡に備はれる怒の器を忍び、また光榮のために預め備へ給うた憐憫の器に對うて、その榮光の富を示さうと爲給ふたら奈何か。この憐憫の器は我等であつて、ユダヤ人の中から許りではない、異邦人の中からも召し給うたものである。ホゼヤの書に『我わが民たらざる者を我が民と呼び、愛せられざる者を愛せらるゝ者と呼ばん。「なんぢら我が民にあらず」と言ひし其處にて、彼らは活ける神の子と呼ばるべし』と宣給うた通りである。義を追求めなかつた異邦人は義を得た、即ち信仰による義である。イスラエルは義の律法を追求めたけれど其律法に到らなかつた。何故か、かれらは信仰によら

ず、行爲によりて追求めたからである。彼らは躓く石に躓いた。錄して『視よわれ躓く石、礙ぐる岩をシオンに置く、之に依賴む者は辱しめられじ』とある通りだ。」

アテネのユダヤ人等はパウロと議論したか、不待遇であつたか、少しでも信徒が出來たのか、何も書いてない。パウロは失望した事であらうが、何も爲ないでゐる男ではないから、會堂で話すことを止めると今度は市民に向つて教を說いた。教育のある人々は何派かの哲學を學んでゐて、哲學の教師は神官よりは勢力が有つた。その教ゆるところは、三つの善事、即ち考へよ、談れよ、論ぜよであつて、高尙な生活に進むべきことをも教へた。で新しい宗教や哲學は好んで聞いて、家でも店でも、街上、市場、集會所ところ嫌はず評判した。

パウロがアテネに來るずつと前に、ソクラテスはいつもアクロポリスの岩山の麓にある市場に來て、會話しながら人々を教へたのである。プラトーも凡て來る者には無料で教へた。デモスセネスはニツクス丘上の集會所に來て、戸外演說を爲つた。エスキラスはダイヲニシアスの劇場で、黃色い日除をした大理石の坐席に滿つる數千の市民の前で、自作の劇を演ぜしめた。故にアテネの人々はパウロが行つた何處の人よりも都びて、悧巧で教育せられてゐたのである。

肩から例の茶の外套を羽織つて、下の鼠色の着物をチラ〳〵見せながら、革鞋を穿ち、樫棒を手について、黑い髮を眉深に被つた縞の頭巾に隱しつゝ、眼を光らして町や市場を歩いてゐるパウロは、

誰の目にもユダヤ人としか見えなかつた。美しいリボンを飾つた緣廣の帽子をきた花賣娘等は、薔薇の花籠の花をすゝめて微笑んだ。逞しい眞黑な奴隷達は、香水の薫高く寶玉に身を飾つた主人達の先拂をして歩く時、パウロを路傍に突退けて、蹙め面をした。子守達は彼の眼光に怖氣づいて、美しい頭髪の子供等を抱いて逃げた。

然し何事も孤獨の彼には無關係であつた。更に氣にも止めなかつた。たゞ周圍を見て彼の眼は燃えた。人に對してゞは無い、彼は人を愛する、到處に在る偶像に對して憤つたのである。市場と云ふ市場、歩道の端、樹蔭涼しき奥まつた辻公園、花に輝く園、どこでも祭壇と神社が有る。公共の建物の上、家の壁、パウロの眼の向く處には必ず人間の獨像又は群像、石に彫つた獸などが飾つてある。全都は偶像で滿員である。

パウロの心は、婦人達が、街上の偶像に向つて赤兒を捧げたり、路傍の祭壇に供物するのを見て憐憫の情に堪えなかつた。パウロは少年時代に彫像を憎むやう教へられたが、其後の教養によつて、活ける神を忘れて、彫像の前に脆く人々を憐む心になつた。腕の力さへ續いたなら岩から海へ、あらゆる偶像を打き落して、アテネを潔め、エルサレムの如く、男のも女のも、立像の影の無い處に爲たいとパウロは思つた。然し彼はまた多年の修養によつて、偶像は外人の槌を以て打倒すべきものではない、之を建てた國人自らが、活ける神の光彼等の心に注ぎ込まるゝ事によつて、塵に歸せしむべきも

のである事を知つたのである。

彼が市場に集る人々に向つて如何なる說敎を試みたか、次に引くは彼がコリントの敎會に書送つたものゝ一節である、——

「たとひ我れ諸國人の言および御使の言を語るとも愛なくば鳴る鐘や響く鐃鈸の如きものである。たとひ我れ預言する力あり又すべての奥義と凡ての知識とに達し、また山を移すほどの大なる信仰が有つても愛無くば數ふるに足らぬ。たとひ我れ全財產を施し、又わが體を燒かれる爲に付しても愛なくば我に益はない。愛は寬容で慈悲あり、愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、非禮を行はず、己の利を求めず、憤らず、人の惡を念はず、不義を喜ばないで、眞理を喜び、凡ての事を忍び、凡ての事を信じ、凡ての事を望み、凡ての事に耐ふるのである。預言は廢れ、異言は止み、知識もまた廢つても愛は永久に絕ゆることが無い。われ童子の時は語ることも童子のごとく、思ふことも童子の如く、論ずる事も童子の如くであつたが、人と成りては童のことを棄てた。今われらは鏡を以て見るやうに見るところ朧である。然し、かの時には顏を對せて相見るであらう。今わが知る處全くない、けれどもかの時には我が知られてをる如く、我も全く知るであらう。實に信仰と希望と愛と此の三者は限りなく存るであらう。而して其うち最大なるは愛である。」

パウロも有名な大學市に生れたことを誇とする學者であり學徒であつた。ギリシヤの哲學者でスト

イック派の創設者ゼノはタルソに住んだ。故にパウロは異邦の學問を嘲りながらも、ギリシヤ人お自慢の哲學が幾世紀の間敎へられた場所を、學者的興味を以て見たに相違ない。

市の石垣から少し出て、堤にボタン樹繁るイリサス河、ヒメタス山麓から流れ來る處に、リシアムの小林が有つた、これアリストートル及その弟子達が、學生を敎へた舊蹟である。其と反對の側で、銀鼠の橄欖樹や綠深き月桂樹の森を通してケビサス河流れ、夜が紫の幕を山々の上にかくる頃夜鶯の音美しき邊に、プラトーの敎へた學校が有つた。その向ふにはエピキユリアンの人達が毎日集會して、人生の幸福を談り合うた立派な園が有つた。彼等は說敎をしなかつた。凡て會話、談話であつた。

パウロは、凡てギリシヤ語、ギリシヤ禮拜、ギリシヤの風習に就て知つてゐる學者ならば知らぬ者もない此等の場所を眺めはしたであらうが、わざ〳〵其所に行つて、人類の興味を其程までに惹いた昔の大儒達の敎に就て訊ねて見るほどの好奇心は無かつた。彼等が神を拜まぬことさへ解つて居ればよいのである。

毎日毎週、町を通つてをるうちには、パウロの眼に、マーキユリー街の、戸毎に入口に建てた四角な大理石の柱が映つたであらう、其柱の頂上には翼の生えた男の子の像が載けられ、柱にはギリシヤ語で「ヒピカス之を獻ず、往け、惡いことを考へな」とか「ヒピカス之を獻ず、決して友を裏切るな」など云ふ格言が刻んであつた。街は端から端まで同樣の角柱が立並んで寄進者によつて思ひ〳〵の文

句が彫付けてあつた。トリポット街には、下板や大杯が列んでゐた。此下板や大杯は、青銅のもあり、色石のもあり、種々な意匠を凝したもので、三又に支へられてあつた。是卽ち青年達が、公開競技で得た褒美であつて此街に獻げられたものである。人々は勝利者の名を讀むべくこゝに群集したのである。

一三八　アンドロニカスの日時計

アテネ・五十歲から六十歲

アクロポリス衛城の北に方る小丘上に、素晴しいテシユースの宮があつて三十本の巨大な圓柱が並んでゐた、今でも其柱は立つてゐるが、もうパウロの見た時の白さ輝さは無くなつて年代がついて黃色くなつてゐる。それから遠からぬ所に、奇妙な時計塔が有る、アテネ市民に時と風向とを知らせる處から「風の宮」と呼ばれてゐた。其頂に靑銅製の小人がぐる〳〵廻つてゐて、柔軟かな棒を手にして風の方向を指示し、大きな日時計が有つて、太陽によつて時を示してゐた。內部には水時計が有つて、晝夜小滴をたらして時を表してゐた。パウロも彼の前にプラトーが見た如く、また今日我々が見得る如く、其日時計を見て時を知つたであらう、パウロが試みに數へて見ると、勝利、ミネルバ、ダイアナ、戰爭などの神々に獻げた神殿、名譽、憐憫、節制、ヴィナス、地神等の小社、祭壇が在つ

た。歩いては其上に人の名や銘文が刻付けられてあるのを讀んだ。或祭壇に書かれてあつた一句が、バウロの胸中深く入つて、彼に希望を與へた事は後に記すであらう。バウロは街や建物に立つてゐる像の數をかぞへて見る氣がしなかつたであらう、其數實に三千を越えたのである。最不思議なのはユダヤの祭司長の正裝をしたユダヤ人ヒルカナスの像の立つてゐることであつた。また其から遠くない所に、ユダヤの王后ベルニスの像が有つた、バウロは或日、この前で自由を叫び求めるのである。

バウロは、今も市場の入口となつてゐる裝飾された大圓門を潜つて、廣場を回つて往くと、圓柱の立つた廊を見たであらう。そこは粉屋、魚屋、裁縫師、菓子屋、食器屋、チース屋、果物屋、婦人服商、本屋などの賣店が列んでゐた。また奴隷を競賣する場所も有つた。こゝにも祭壇や立像が澤山あつた。バウロは法律家ソロン、航海者コノン、雄辯家デモスセネス其他の名を讀んで其大理石や青銅の像が綠樹の間に立つのを見て、中心は十二の偶像への祭壇になつては居たが、それでも大人物の紀念が己を取卷けることを思うたであらう。休日に東に流れて行く人の群について行くと、競走場に入つたであらう。そこには大理石の席に座つて叫んでゐる一萬の人で詰つてゐた。人々の服裝は種々の色のもあつたが最多いのは生地の黃色のまゝのもので、彼等は、三頭立での軍車競爭者に向つてハンケチやリボンを振つてゐた。馬蹄の響は雷の如く、車輪は飛んで砂塵を捲上げてゐた。戸外劇場の大圓を眺めると、青や黃色の衣を着た男女が群つて、紳士は手に金鐶を飾り、貴婦人は髮に眞珠をちりば

めて、涼しい朝早く、立派な若者達がギリシャの詩を誦する美音に耳を澄して、或は歎息し、或は泣き、或は哄笑しつゝあつた。都人の宗教や娯樂は神殿や演技場によく現れてゐた、フユリー女神の洞穴に行つて見ると、彼等の迷信がよく解つた、其はアレオパガスの反對側の岩山の割目に、ブク〳〵小泉の流れる暗い穴が有つて、其中に復讐の三女神フユーリースが住んでゐて、近づく者は殺されると信じられてゐた。然し市を横切つてもつと氣持のよい眞實なものも有つた。オリムピア（角闘士達の闘枝場）とイリサス河との間に低く、透明な水の湧出する井戸が有つた、其はアテネ中の清泉で、カリルホーと云ふ美しい名が付いてゐて、今日も存つてをる。ずつと昔には花嫁が暑い日盛に此泉で沐浴したと云ひ傳へたが本統であつたらう。殊に後年その甘い水が九條の大管によつて市中に引かれた時、多くの家庭を悅ばせた事は確である。向ふのニクス丘上の戸外劇場で、デモスセネス、ペリクルス、ソロン等が、水を打つた如く靜な大聽衆に向つて雄辯を揮うたのである。バウロも亦其處に立つことが有るであらうか。

數週間待つてをるうち、紅顏のテモテとシラスは港に着き、都に入つてバウロに再會した。彼等の齎した報告は悅しいものではなかつた。テモテは、會堂のユダヤ人等が、信仰の故にクリスチャンを迫害しつゝあるテサロニケから來たのである。シラスはベレアから來たが、兩人の言ふ處によると、バウロはまだマケドニヤに歸つてはならないのであつた。ルカはまだピリピに居た。テモテとシラス

は再びテサロニケとビリビに歸つて働き、パウロ丈け一人またアテネに待つてゐなければならない事になつた。彼等は都を後に船を走らせて去り、テサロニケの人々に熱心な教を持歸つたが、パウロは再び居殘つたのである。

一三九　廊上の說教者

アテネ・五十歳から六十歳

パウロは白大理石、青空と相映發するアテネの街を往來するうちに、アゴロポリスの麓の凹地である市場が最人の多く集まる處であることに氣付いて、一度說教して見度いと思つた。市場の四邊には圓柱の廊があつて、クブロの酒エジプトの五穀を商ふ商人連が右往左往してゐた。そこにはまた市の學者達も長く風に靡く衣を着て、議論を戰はし、時には集る人々に向つて話してゐた。其樣はエルサレムの神殿の廊下に講座を置く敎法師達に似てゐたが、話してをる事は全然異つてゐた。パウロは立聽をして、機會があればロを挿んだ。アテネの哲學者等は、公衆の前で、靜に順序立つて議論することを好んだものである。中には眞面目に眞理の探究を欲する者もあり、また智惠に任せて反對者を愚弄し、聽衆を笑はせて得意がるのもあつた。

パウロが仲間入をした時には、此男を閉ロますには譯は無いと思つて、彼等はむしろ是を歡迎した

であらう。處が此茶色外套に破れ鞋の不思議なユダヤ人は、思慮深い鍛錬された辯論家であつて、容易に閉ロまなかつた。彼は毎日抗論の席に出ては前代未聞の說を高唱した。パウロの出會した敵手は主にストイック派とエピキユリアン派の學者達であつた。過去三百五十年の間、ストイック派は市場の色のついた廊に立つて、神の在すこと、神は世界を造り之を守る者であること、人は自己否定の生涯を送り、未來の生命にまで達すべきことを說いて來たのである。エピキユリアン派も大凡同長年間かの河邊の美しい花園で、神が人間を守ると云ふことは無い、快樂は人生唯一の目的である。未來の生命なんて有るものでないと敎へて來たのである。

パウロは彼等程賢明な辯論家に會つた事は未だ無かつたので、彼等の哲學の缺點弱點を指摘する爲には隨分骨が折れたに違ひない。パウロが熱情籠つた言と輝く眼を以て、世に神は唯一柱である、人の行くべき最高の生涯は、二十年前にローマの總督ピラトの爲に十字架にかけられ、後、神と偕に生くべく死人の中から甦つたナザレ人イエスの足跡に隨ふものでなければならぬと說いた時、彼等は頭を振つて冷笑した。

パウロはアテネの識者達を說いて、ナザレのイエスに示された生涯、並に彼の敎は、エピキユラス、ゼノ、アリストートル、プラトーなどに比して、より高尙なものであると信じさせることは出來なかつた。然し他に考へることが有つた。彼は陰ある廊下に集ふ哲學者達を見棄てゝ、日當る市場で、パ

スケットや赤い瓶に入つた果物などを賣つてゐる人々の方に向を換へた、そして見えざる活ける神に就て說敎を試み、木石の偶像を棄てゝ神を脆拜し、其子ナザレのイエスに歸依して高き生活に入らんことを勸めた。

毎日敎說した彼の言は記されてないが、次に引くは彼がエペソの敎會員に送つた手紙の一節である、——

「我は天と地とに在る諸族の名の起るところの父に脆づきて願ふ。父その榮光の富にしたがひて、御靈により力をもて汝らの內なる人を强くし、信仰によりてキリストを汝らの心に住はせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、凡ての聖徒と共にキリストの愛の廣さ、長さ、高さ、深さの如何許なるかを悟り、その測り知る可らざる愛を知ることを得しめ、凡て神に滿てる者を汝らに滿しめ給はん事を願くは我らの中に働く能力に隨ひて、我らの凡て求むる所すべて思ふ所よりも甚く勝る事をなし得る者に、榮光世々限りなく敎會によりて又キリスト・イエスによりて在らんことを。」

人々は茶色外套のユダヤ人が燃ゆる熱辯を振つてをるのを見て立止つて聽いては見たが、扨て信ずる者は無かつた。パウロの話が餘りに懸隔れてゐる上に彼等は今の生活に滿足してゐたのである。

「彼男は何をブク〳〵言つてをるのだ」とストイックの一人が云ふと、

「變つた神々を說いてゐらしい」とエピキユリアンの相手の男が答へると云ふ調子である。

琥珀色の外套を藍色の上衣の上にあほつた彼等はそのまゝ立去つてパウロの熱心な狀を行遭ふ友に傳へるのであつた。彼は新しい敎の師たらんと欲するのであらうか。然らば、アテネには、神殿に反對して公衆に向つて演說することを禁じ、アレオパガスと稱ばれた大市會の許可無くして公に敎師たることを得ざる嚴しい法律が有る。ソクラテス等も其敎について調査の終るまで、市會の禁止命令を喰つたのである。市會は長老達より成り、場所はマー丘と云ふ赤岩山の上に在つて、石の座席が圓形に列んでゐた。

一四〇　マーの赤岩山

アテネ・五十歲から六十歲

罰する爲か、禁止する爲か、それとも單に好奇心から其敎を聞いて見るつもりか、兎に角パウロは一日アレオパガスの集會に呼ばれることになつた。

アレオパガスの集會は朝早かつた。ハイメタス山を越え黃金色の霞を縫うて來る陽光は、パルテノンの白い圓柱を輝かし、ミネルヴァの頂飾を閃かして、凹地の市場に立つてゐるパウロの外套まで射た。パウロは群衆を惹付けたでも無く、騷擾を起したわけでも無かつたが、其言は注目をひいた。紫白靑黃思ひ〳〵の衣を着て悠然と十六の階段を登つて、マー丘の頂に集つた市の長老達も、別にパウ

ロの爲に集つたのではなかつた。たゞ例によつて例の如く集り、見物の人々も際つぶしに近邊の岩に腰打かけて集會の樣子を見るに過ぎなかつた。

バウロが市場で話して居るうちに四邊は騷がしくなつて來た。バウロが再た立つてゐるのを見た哲學者等は長老達もバウロが如何に熱心に說敎してをるか位のことは解つてゐる頃だと思つた。そこでバウロの袖を引いて、彼處まで一寸來るやうにと云つて巖の上に靑空を背景として集つてゐる人々の方を指した。バウロは直ぐに振返つて、彼等に隨つたが、その眼は地上に落ちてゐた。彼はこれまで屢、即座の話を試みたが、今のやうな聽衆を相手にしたことは無かつた。生命に危險もなく投獄せられる憂もなかつたが、たゞ大なる門戸が突如として開かれたのである。彼は考へないわけに行かなかつた。どうして耳を傾けさせやうか、彼等の磨上げられた頭で、眞理を輕々しく見過ぐさうとするのを如何にして防ぐか冷い頭の無信仰者達の中に置かれた火の如き唇と心を持つ熱血兒バウロは、角鬪者の群に投ぜられた素手の人であつた。

彼等はユダヤ人の神やキリスト・イエスの事など知りも爲ず知らうともせず、たゞ好奇心から宗敎や人生に關する意見を訊いて討論して見やう位のことで、一言だつて信じやうなんと云ふつもりは更に無かつた。バウロが聖書の句を引かうにも彼等は聖書なんて全く知らないのであつた。名句を引用するならギリシヤかローマの著者のものでなければ役に立たぬ。感情や情操に訴へやうとしても彼等に

はそんなものゝ持合せが無いと公言する位のものである。彼等の欲するのは單だ事實である。バウロは惡く思つても、ギリシヤの神殿、祭壇偶像などに就て兎角喋つてはならぬ。話し振は學者風に、火の如き胸を抑へて、冷靜にやらなければ、彼等は耳を藉さぬのである。

岩の階段を登りつめて、赤岩の上に立つたバウロは、港に群る檣柱は林の如く、諸市の女王は眞に絕景で、谷には人の河流れ、高所には神殿まばゆきを見た。市場の驟ぎ、石や靑銅の盲偶像の間に動く老若男女の人聲も其處まで上つて來た。

これから二三歩で、市會の開かれる八角形の集會所に來る。長老達の中には分別盛の人もあれば白髮の老人も有る、皆、紫、藍、赤などの廣い布で緣を取り、頸に刺繡を施した純白の衣を纏うて短く刈つた頭は無帽であつた。京の閑人等は、やけた後の岩に腰かけたり近くの平な所に立つたりして傍聽してゐた。一方の方形の石は數百年來囚人の席になつてゐて、他方には原告の石が有つた。けれどもバウロは其石には掛けなかつた。彼のは裁判ではなく、訊問に過ぎなかつたからである。

バウロが自分の番の來るのを待ちあぐんでゐると、やがて議長は叮寧な言で、むしろ賴むやうに言つた。

「汝が語るその新しい敎はどんなものか知らせて貰へやうか。どうも異る事が耳に入るので何事なのか知り度いと思ふ」

パウロは會議の中央の開いた所に、つと進み出た。ユダヤ着に革鞋をはいて、紐で縞の頭巾を額の邊に結付けたパウロは、並居る學者達、好奇の眼を送る群の中に、一異彩を放つた。向ふには世界一美しい神樣が輝いてゐる。丘と云ふ丘には皆神殿が有つた。下の町中も偶像が列をなしてゐる。綠の樹々は無數の祭壇に蔭を投げてゐた。地球上これほど祭壇の多い處は無かつた。パウロの黑い眼は、議長の平靜な顏を打眺つた。例の調子で手を擧げて人々を靜め、徐に、冷靜な推搞を經た論陣を張つたのである。其は前例の無い、此場の傾聽を促すに適當なものであつた。

「アテネ人よ、我すべての事に就きて汝らが神々を敬ふ心の篤いのを見る。我は汝らが拜むものを見つゝ道を過ぐるうち、『知らざる神に』と記した一つの祭壇を見出した。故に我は汝等が知らないで拜む者を汝らに示さう」

パウロが町から町と祭壇や偶像に彫付けられたギリシャ文を讀み歩いて、何か自分の拜んでゐるものに近いものを見出さうとしたのは無益でなかつた。パウロは其を見付けて置いたのである。市中に數個所、知らざる見えざる神にと言つて供物もし祈禱も捧げた祭壇が有つたが、其こそ萬に優りて偉大な活ける神の爲であつて　ソクラテス其他のギリシャ哲學者が朧げながら言及したものであつた。此一般の信仰から出發して、パウロは、彼等の一致する他の方面に論を進めた。

一四一　また後程

アテネ・五十歳から六十歳

旭光の下に、パウロは語をつゞけて、白衣の人々、市民の群、世界に向つて敎を傳へた。

「世界とその中のあらゆる物とを造り給うた神は、天地の主に在すが故に、手にて造れる宮には住み給はない。みづから凡ての人に生命と息と萬の物とを與へ給ふほどであるから、物に乏しいかのやうに、人の手にて事ふることを要求し給はぬ。一人よりして諸種の國人を造りいだし、之を地の全面に住ましめ、時期の限と住居の界とを定め給うた。これ人をして神を尋ねしめ、或は探りて見出す事あらしめん爲である。されど神は我等おのおのを離れ給ふこと遠からず、我らは神の中に生き、動きまた在るのである。汝等の詩人の中の或者どもも『我らは又その裔なり』と言つた通りである。」

パウロが斯う言ふと、或人々の頭には、當時流行してゐた「ファエノメナ」と云ふアレタスの詩の一節が浮んだことであらう。

「ヨブより、我等は來ぬ。琴線に觸れて、
天の永遠の王を讃めぬ者やはある。
永遠の王は市場に、人群るゝ道に、

波高き海に、輝く港に歩み給ふ。
危險迫るとき、痛苦近づくとき、
我らは王の子等なれば、その御膝下へぞ
我らは飛び行く。」

或は、ストイック派の指導者の一人で、嘗てアレオパガスの前に立つたことさへあるギリシャの詩人クレアンテスの「ジユピターに捧ぐ」と云ふ詩句を想ひ浮べた者もあつたであらう。

「汝、第一の大原因よ、汝の言は自然法、
畏れかしこみて、汝の玉座の前に我等は脆拜く。
我等は汝の子等なり。我等には、
我等にのみ、天に祈を捧ぐることを許されたり。」

自分達の詩人が三百年の前、記した崇高な詩藻を引用されて、列席の學者等は良い氣持ちになり、一層パウロの言に耳を傾けた。

「かく神の子等であれば、神を金、銀、石など人の工と思考とにて刻める物と等しく思ふべきではない。神はかゝる無知の時代を見過しに爲給うたが、今は何處にても凡ての人に悔改むべきことを告げたまふ。」

と言つてパウロは、神の靈は人の中に在すのであつて、大理石の彫刻や青銅の像の中に入れる事は出來ない事、かゝる偶像を神として奉ることは、暗黑、蒙昧である事を示さうと欲つたのである。こゝまでは彼の論理は正しいと思はれた。然しパウロは更に進んで、彼等の首肯しない信じない點まで言つてのけたのである。

「曩に立て給うた一人によりて義をもて世界を審かんために日をさだめ、彼を死人の中より甦へらせて保證を萬人に與へ給うたのである。」

果然嘲笑の聲が起つてパウロは言を切つた。死んだ者が甦つたと言つたので笑つたのである。パウロは怒りは爲なかつた。是迄幾度も、同じ點に就て笑はれて來たのである。哲學者等が喧しく話し合ふので、パウロは默つてゐた。或者は、馬鹿を言つてをると云ふて嘲り、もう聽かうとは爲なかつた。或者は、パウロは賢明である。彼の言ふ處には深い意味が有るも知れぬと思うた。たゞパウロがギリシャの神殿や偶像を頭ごなしに嘲罵しないで、却て讃めてゐるやうにさへ見えた事は明であつたが、此上話させることは出來なかつた。もう聽かないと言ふ者が有つたので仕方が無かつた。そこで議長は「われら復たこの事を汝に聞くであらう」と言つてパウロの退席を求め、恭しく手を振つて席外に送出した。哄笑に遮られ、嘲笑に口を抑へられ、手を振つて退席させられたパウロは、學者達の前を立去つたのである。此學者達は賢明にして、偉大、且つ優秀な人々であつたが、その一人の名も傳は

る者なく、却てパウロの名のみ大黒柱の如く世界に衝立つてゐるのである。彼等の傾聽を促し得なかつたパウロは頭を低く、十六の階段を、哲學の座から、市場の人込の中へと降りた。議論する價値もないほど馬鹿げた教へだと見られて、退席させられたのである。

一四二　海路

コリント・五十歳から六十歳

アレオパガスの學者達のうちに、たつた一人、其名の傳はつてをる者がある。彼は嘲られたユダヤ人に從うて陽に照された丘の暗から救はれたのである。名はデオヌシオ、議員に爲れる程の地位も學問もあるアレオパガスの一員であつた彼は、パウロの言に感激して更に其教を乞ひ、クリスチャンになつて、パウロのアテネ滯在中良き友であつたのである。またダマリスと云ふ婦人、其他二三の信者が出來たが、皆アテネの人々であつた。

パウロは其から、餘り永くは此市に居なかつた。或はマー丘で嘲笑されたことが市場までも響いて一般市民も彼の言を聞かなくなつたのかも知れない。パウロに對して出て行けがしの態度を執つたかも知れぬ。美しい像の前に跪き、ギリシャ文字で名を彫つた祭壇で香を燃すことが、どうして悪いのか解らず、反對を言ふ者を好まなかつた。美しい者、善い者は勿論のこと、美しくも善くもなくとも

拜まれる價値のある者が有ると云ふのが、彼等の主張であつた。

パウロはテモテとシラスの歸つて來るまで待つて居るつもりであつたが、今はさうも出來なかつた。パウロは手を伸して、世界中最優雅な息子と端麗な娘を持つ、諸の市の女王アテネを得んと試みて、却て拒絶されたのである。怒號と石と悪計ではなく、敬遠、無視を喰つたのである。パウロの炬火に觸れて基督教の火を擴むる者は、哲學者の中に求むべきでは無かつたのである。

若しアレオパガスの議員達が、パウロの教に耳を傾けたならば、彼が、どれほど永くアテネに留つたかは、彼が次の市に一年有半も滯在したことによつて想像し得られるであらう。彼が諸の市の女王に滯在したのは僅に二三週であつたらうが、それでも追出しを喰はなかつたのは珍しかつた。デオヌシオ等に別を告げたパウロは白い神宮の市を後に、長い石垣の間を石の道に沿うてピレアスから海の方へと下つていつた。パウロはテモテとシラスの來るのを待たず急いで旅立つたので、アテネ灣の向ふ四十哩のコリントに來るやうに傳言を殘した。コリントの城は、アテネの石垣から望見することが出來た。兩市の間には通商が絶えなかつたので、渡りの舟は直ぐ求めることを得た。

鳶色の外套に身を包み、旅具と大切な書物とを携へたパウロは追手を恐れることも無かつた。舟は高い帆に風を孕んで港口の黑い石の塔を過ぎた。アテネの丘に輝くミネルバの尖頭は、愈幽に見えるパウロは冷かな磨き上げられた、禮儀正しい哲學者等には、彼等の詩人を引合に出しても成功しなか

つた。イエスの名さへ言はずにしまつた。爾來彼は、教を說くに詩や哲學を棄てゝ、專らイエスを說くことに爲た。

廣帆一ぱいの風に驅られた舟は白浪を蹴立て、サラミス島を横り、黃金色の西へ眞直ぐに、ケンクリア灣の小さな島々とパウロとの間には、碧い水の上に白波のチラつく他は何も無い。五時間で島々の間を通過すると、ケンクリアの町端、綠の園繁き處、ダイアナ、ヴィナフ、アスカラピアスなどの神殿が白く見えて來た。やがて埠頭が近づく、そこには、高く一尾の魚と、一本の鎗とを持つネプチューンの立像が立つてゐた。

ピリピと同樣、コリントは六哩內地に在る。こゝは其港で廣い港內には長い石造の埠頭が橫はり、奴隸の群は、海一面の船上で荷揚したり、積荷したりしてゐた。人夫達は終日、照る日の下に働いて、船から荷物を揚げ、馬、驢馬、駱駝などに背負はして、狹い陸峽を九哩彼岸に運び、レクアム港から新しい船に積んで、遠い國々へ送るのであつた。其處には今運河が有る。けれどもパウロは其時、港の一方に數百の奴隸の手で小船が次々に水から引揚げられ、轉子にかけて「船の道」を一日ころばされ、陸峽を越えて向ふの海に下されるのを見たであらう。モレアの岬を迂回するのは危險で、あの荒海を通るには決死の覺悟が要るとギリシヤ人等は言つてゐた程であるから、こんな方法を考案したものである。

コリントまでの旅は僅六哩だつたが、持物の多いパウロには、かなり骨が折れたことであらう。美しい道だつた。谷の兩側は、ゆるやかに傾斜して、裾は茶と黃、上に登るに隨つて松の林、橄欖、イナゴマメ、エニシダなどが繁つてゐた。日中には、羊飼者等は、その洞穴の口に腰打掛け、羊群は樹蔭に憩ふてゐた。パウロは一人では無かつた。荷物を運ぶ馬族と、馬子達の列は、ひつ切りなしに來往し、牛車は八ヶ間敷軋りつゞけてゐた。大きな市を間にして海から海へ通ずるこの道路は、世界中賑な道であつた。餘りに通行がはげしいので、パウロがこゝを訪ねた後間もなく、ローマ皇帝ネロは、陸峽を橫切る運河開鑿を命じたが、その完成までには永い年月を要したのである。

一四三　海の橋

コリント・五十歲から六十歲

午後の太陽は、コリントの城の建つてゐる、ジブラルタルの岩に似た山から、大きな影を、パウロの行途、平野の彼方まで投げた。山は平地から高く屹立して絕壁を成し、唯一つの途を攀ぢ登るに一時間を要した。頂上は石垣を以て圍み、中に小さな町を包み、ヴィナスの大神殿と四百の兵と五十頭の猛犬を駐むる營所とが在つた。

岩上の此城から四哩の小高い地に大きな市が建てられてゐた。アテネよりは古い市で、美しさは劣

るが更に古い神殿も有つた。ギリシャの眼とさへ呼ばれた市なので諸王英雄は此を奪はんが爲に戰うた。たゞしパウロが平野に横つて白い神殿と眞鍮の尖塔を日光に輝してゐるのを見た市は、其古い市では無かつたのである。最初の市は素晴しいものであつたが、征服者達に幾度となく攻略せられて、遂にパウロの來る二百年前に破壞されて全くの廢址となり、一つの大神殿が、孤然立つて昔の跡を示すのみであつた。

百年の月日は古市コリントの廢址を照したが、英國までも遠征したローマ皇帝ジュリアス・シーザーはパウロの來る前百年の頃、コリント再建を命じたのであつた。そしてローマの軍隊が派遣せられて此處に駐在し、パウロが食物を買ふときに用ひた銅貨の表にはジュリアス・シーザーの肖像を彫り、裏には翼の生えた馬がついてゐたのである。今はパウロの見た大市も跡を止めず、同じ古い神殿の圓柱ばかりが數本立つて、過去を語るに過ぎない。その圓柱を回つて三度コリントの市は、建ちさうにないその陰がパウロの行途に横つたかの岩上の城の高見から、二つの青い灣を眺むることを得た。其間に綠の頸の如く見ゆるのが「海の橋」と呼ばれた地であつた。一方はコリント海で、紫の山脈はだんだん遠く離れて見えた。他方はアテネ海で、乳色のした霧の如き島が點々浮んでゐた。晴天の日はアクロポリスの白い神殿を望見することを得た。前方には豐饒なコリントの平野が起伏して、麥畑は黃に橄欖の園は銀色に、葡萄は黃金色に、レモン、シトロン、綠杉の葉は綠に、遠くにはバルナサス、デ

ルヒ、ヘリコンの諸山が碧空に溶込んでゐた。

市は五哩の石垣に圍まれてゐて、パウロが低いケンクリヤ門を入つて行くと綠杉の森ほの暗く、大理石像や煉瓦墓の列んでゐる墓地が有つた。海から入る道は市の中央の市場に通じてゐて、水夫達がクプロの女神と呼んだ美しいヴィナスの大靑銅像の前で盛な取引が行はれた。東方の諸國から送られた商品は、こゝで西の諸邦からの品と交換された。荷揚する貨物には悉く關稅を取立てたので、コリント市は極めて祐福であつた。此市にはまたネプテユーンの巨像が有つて、それの立つて居る臺の怪魚の口から、淸泉が流れ、人も獸も之を飲んで、其丈けでも他の像よりは人に惠を與へてゐた。

市街にも市場にもギリシャの商人達や、諸國から來た赤帽の水夫達が賑つてゐた。黑や茶色の着物をつけた奴隷達は人夫、人足、御者、その他あらゆる勞役に從事してゐた、自由民は手の勞働を好まなかつたのである。ユダヤ人も幾百となく居住してゐたので、パウロは容易に街上に賣買をしてゐる同胞を見付けることが出來た。

一四四　醉へる水夫、偶像の宮

コリント・五十歲から六十歲

旅のユダヤ人は、外國の市に行けば同胞から親切にされるのが常であつた。それでパウロがユダヤ

人の町に入り込むと、エルサレムの神殿の教法師が來たと云ふので、どの家庭でも彼を歡迎したのである。安息日には、パウロは例の薄暗い會堂に入つて、紫の幕に近い長老達の席についた。感話の時になると、彼は聖書朗讀者の机の處に行つて、房のついたショールをかけ頭を垂れて床に敷かれた薄畳の上に座つて居る人達に教を說いた。彼は偶像のこと、祭壇のこと、或はギリシャの詩人のことは何も話さなかつた。パウロは、其樣な話はかのマーの赤岩山に棄てゝ來たのである。彼はイエスの事を話した。キリストは既に來り、二十年前にエルサレムで十字架にかゝり、そして死人の中から甦つて、神の右に座し給ふと聞いて人々は驚いた。彼等は質問の矢を放つた、パウロは精通してゐる舊約聖書の章句を引いて之に答へた、彼等は更に疑を生じて、自分達で聖書を研究する心を定めた。パウロの說教は記錄されてないが、後に彼がコリントの人々に書き送つた書簡の中に次の如き句がある。

「われ福音を宣傳ふとも誇るべき所はない。己を得ないのである。もし福音を宣傳へなければ我は禍害である。若しわれ心から之をすれば報を得るであらう。よし心ならずとも我はその務を委ねられたのである。然らば我が報は何か、福音を宣傳ふるに、人をして費用なしに福音を得しめ、而も福音によりて我が有てる權を用ひ盡さぬことである。われは凡の人に對して自主の者であるが、更に多の人を得ん爲に、自ら凡の人の奴隸となつた。我れユダヤ人にはユダヤ人の如くなつた、これユダヤ人を

得んが爲である。律法の下に在る者には——律法の下に自分は居ないが——律法の下にある者の如くなつた、これ律法の下に在る者を得んが爲である。律法なき者には——われ神に向ひて律法なきにあらず、反つてキリストの律法の下にあるが——律法なき者の如くなつた、これ律法なき者を得んが爲である。弱き者には弱き者となつた、これ弱い者を得んが爲である。我れすべての人には凡の人の狀に從うた、これ如何にもして幾許の人を救はん爲である。われ福音の爲に凡の事をする。これ我も共に福音に與らん爲である。なんぢら知らぬか、馳場を走る者は皆走るけれども、褒美を得る者のたゞ一人であることを。汝等も得ん爲に斯く走れ。すべて勝を爭ふ者は何事をも節し愼む、彼等は朽つる冠冕を得んが爲であるが、我らは朽ちぬ冠冕を得んが爲に走るのである。斯く我が走るは目標ないやうなものではない。我が拳闘するは空を擊つやうなものではない。わが體を打擲きて之を服從させる。他人に宣傳へて自ら棄てらるゝ事を恐れるからである。」

こゝでパウロはアクラとプリスキラの夫婦に出會した。二人はローマから來たユダヤ人で基督者であることをパウロに告げたので、パウロは大に喜んだ。その商賣が天幕屋で、パウロも同業だから一緒に暮すことになつた。アクラはタルソを去る百哩のポント國の者で、夫婦でローマ市に居たのだが皇帝クロオデオが、ユダヤ人に退去命令を發した爲に、こゝまで逃げて來たのであつた。諸の市の主婦たるローマから來たクリスチャン。パウロは非常な興味を以て夫婦の者からローマ市に在るクリス

チャンの狀況や其新福音に關する智識の程を聞いた。小さな家で、紡錘し、機織り、太い針と絲で、堅い毛織物を裁ち縫ひしながら、物語は盡きなかつた。彼等は懸命に働いても收入は少なく、時には終夜、小さな石油ランプを點けて働きつゞけねばならなかつた。

バウロは毛織物を賣りに市場に行つた。中央にはネプチューンの銅像から噴水が迸つてゐた。各國から來た種々の商人は右往左往して、毛織、色毛織、陶器、バスケット、靴、皮革鞋を商ふ者、青銅器、鐵具、眞鍮製品を賣る鍛冶屋、小さな籠に美しい羽毛の小鳥を入れ、バスケットに貝殼や赤珊瑚を盛つて賣る外國水夫等も居た。此市の眞鍮は世界一の優良品で、かのエルサレムの神殿の立派な門はこゝの眞鍮を用ゐたのである。然し市場は屢港から上つて來て市で遊んで行く水夫達の群で大騒を起すことも有つた。バウロは彼等が泥醉して罵詈り合ふのを見て悲んだことであらう。

コリントも偶像の市で神殿多く、お祭騒で人を集めたものである。其最大なのは女神ヴィナスの宮で一千の奴隷女之に事へ、酒宴淫樂の席に侍したのである。隨てバウロが從來訪ねた諸の市の中で最悪い市であつて、ローマ人はコリント人と言へば悪人の異名にした位であつた。

バウロは平日は此等の商人や遊人の群衆の中に生活し、ユダヤ人の安息日が來ると必ず會堂に行つてイエス・キリストの事を同國人に話した。するとユダヤ人等は例の如く容易に信ぜず鋭い質問の矢を放つて議論を戰はした。後の方にはギリシヤ人も居て、驚きながら其議論を聽いたのである。

ルカはバウロが當時何を話したか記してゐないが、後にバウロがローマのユダヤ人に送つた手紙の中に次の如く言つてゐる。

「我ら信仰によりて義とせられたのであるから、我等の主イエス・キリストに頼り、神に對して平和を得たのである。また彼により信仰によりて今立つところの恩惠に入ることを得、神の榮光を望みて喜ぶのである。そればかりか、患難をも喜ぶ、患難は忍耐を生み、忍耐は練達を生み、練達は希望を生むことを知るからである。希望は恥を來らさない。我らに賜うた聖靈によりて神の愛、われらの心に注ぐからである。我等がまだ弱かつた時、キリストは定りたる日に及びて敬虔ならぬ者のために死に給うた。義人のために死ぬる者は殆どない、仁者のためには死ぬることを厭はぬ者もあらう。然し我等がまだ罪人であつた時、キリストが我等の爲に死に給うた事に由りて、神は我らに對する愛をあらはし給うたのである。かく今其血によりて義とせられたからには況してキリストによりて怒から救はれないことが有らうか。我等がもし敵であつた時、御子の死に頼りて神と和ぐことを得たならば、況して和ぎて後その生命によりて救はれないことがあらうか。我等は今和睦を得させ給へる我らの主イエス・キリストに頼りて神を喜ぶのである。」

一四五　衣を拂ひて

コリント・五十歳から六十歳

かくてパウロが平日は天幕業を營み、安息日、また恐らく木曜日にも、會堂で說敎して居る間に二人の友が一緒になつた。シラスとテモテがテサロニケとピリピから、また贈物を言付かつて、傳言をも齎したのでパウロは大いに感じた。彼等が着いたことはマケドニヤで奮鬪して以來の喜びであつた、殊に會員が漸次增加してパウロとの再會を待望んでをると聞くことは一層の歡びであつた。

パウロはテサロニケのヤソン其他のクリスチヤンが、迫害せられながら、よく忍耐して、マケドニヤやアケイヤのクリスチヤンの話柄になつて居ると聞いた。また一方には善からぬ者も出來て、慾と惡事の虜となり、敎へられた道を守らないことも聞いた。またパウロが死者の甦や、キリストが速に此世に再臨することを說いた事に就て、色々な迷を起し、今生きて居る者丈けがイエスを見ることが出來て、既に死んだ者は駄目なのか知り度い者だと云ふもあれば、イエスが速に來るからと云つて働を止める者も有つた。パウロはそんな誤を正さなければならぬと思つた。

シラスとテモテの助を得て、パウロは新しい元氣を以て會堂のユダヤ人等に敎を說いた。然し彼が强く論ずれば論ずるほど、ユダヤ人等の顏は、新宗敎に對して益同情なくなつて來た。ユダヤ人が受

けなければ、市の外國人が信ずるであらうと言ふに至つて、彼等はパウロを罵り、イエスを嘲つた。遂に或日のこと、蒸暑い暗い會堂の中で、一層熱烈な議論が戰はされ、パウロは怒つて、垂れた外衣の裾を執つて、塵を拂ふやうな風に衣を床の上に坐つてをる人々の面前で拂つて、叫んだ「諸君の血は諸君の首に歸せよ、我は潔よい。今からは市のギリシヤ人に行く。」パウロが衣を拂つた態度は、ピシデアのアンテオケで路の塵を靴から拂ひ落したと同樣、卑んだ記であつて、ユダヤ人等は大いに怒つた。パウロと二人の友は、憤怒恐喝の叫の中を會堂から出た。

然しパウロ等は全然會堂の衆會と關係を絕つたわけではなかつた。其うちクリスチヤンになつた者も有つたし、またユストと云ふ指導者も出來てゐたのである。ユストは會堂の隣の自分の家に三人を招じ入れた、そして此家がクリスチヤンの集會所となつたのである。ユダヤ人でも他國人でも禮拜に加はり度い者は歡迎した。暫くしてをるうちに、多くの人々が來て、クリスチヤンとなつた者も有り、其中には會堂司クリスポと、其家族一同もあつた。但し集會は左程大きくは無く、一室で事足つてゐたのである。パウロは後に彼等に送つた手紙の中に、如何なることを敎へたかを記してゐる。

「諸君は知らぬか、諸君は神の宮であつて、神の御靈諸君の中に住み給ふことを。人もし神の宮を毀たば、神かれを毀ち給ふであらう。神の宮は聖である。人も聖でなければならぬ。

「誰も自ら欺くな。諸君のうち此世で自ら智しと思ふ者は、智くならんために愚な者となれ。此の世

の智恵は神の前に愚なのである。錄して『彼は智者をその惡巧によりて捕へ給ふ』また『主は智者の念の虛しきを知り給ふ』とある通りだ。さらば誰も人を誇とするな。萬の物は諸君の有である。……あるひは現在のもの、或は未來のもの、皆諸君の有である。諸君はキリストの有、キリストは神のものである。我らはキリストの役者また神の奧義を掌る家司のごとき者である。家司に求むべきは忠實なる事である。……我みづから責むべき所あるを覺えぬが、之に由りて義とせられる事はないのである。我を審き給ふ者は主である。されば主の來り給ふまでは、一時に先だちて審判するな。主は暗にある隱れた事を明かにし、心の謀計をあらはし給ふであらう。その時おのおの神から其譽を得るであらう。」

強い意志と興奮の情を持つ者に有り勝の失望はパウロにも來た。此大都市の罪惡と偶像禮拜とを思ひ、同胞ユダヤ人の敵意を思へば、心沈まざるを得なかつた。新福音に地を走る燎原の火の如き勢は無かつた。信徒皆集めても僅に一室で足りてゐる。然し力は忽ち平常の如く彼の心に湧き上つた。彼より以來多くの善人の心に新しい元氣を與へた力が來た。夜まほろしの中にイエスは「おそれるな、語れ、默するな、我は汝と偕にある。誰も汝を攻めて害ふ者はない。此の市には多くの我が民がある」とパウロに告げた。

パウロは此夢は神からであると信じた。シラスとテモテに話して共に喜んだ。そして彼は新しい元

氣を以て傳道して市に留つた。然し會堂の直ぐ隣に基督教徒の集會所のあることはユダヤ人には困つたことで、パウロは故意にユダヤ教徒を基督教に誘ひ去らんとするのであると思ひ、パウロに途上で逢ふことでもあると、傳道を止めるか此市を去るかしなければ何を爲るか見て居れなどと脅かすのであつた。でもパウロは、かの幻覺を見て以來恐れず、自分の道を進んで、コリントに於ける成功を期した。

勿論ユダヤ人等はコリントのローマ總督に陳情したであらうが、彼は敢て干渉せず、むしろクリスチャンに好意を持つてゐたらしく、新總督が代つて來る迄は、パウロが大道や市場で公開說教を試みても、ユダヤ人の陳情は聽かれなかつた。

一四六　夕餉を共に

コリント・五十歳から六十歳

クリスポが信徒になつた時、パウロはクリスチャンの式に隨つて水でバプテスマを施し以て入會の嚴な記とした。彼はガイアスにもバプテスマを施したが、其後神とイエスに對する信仰を告白して入會する者は凡てパウロの弟子達の手でバプテスマを施したのであつた。彼等は主に市の最下級民で、商人、奴隸、其以下の者さへあつた。パウロは偶像を棄てゝ活ける神に事へ新しい生涯に變つた丈け

の行のある人ならば誰でも歡迎したのである。

教會は皆一家族であると云ふ考を實際に行はうと試み、時に食事を共にし、相互に勵して偶像教の祭と宮から遠ざかり大酒を禁じ、古い友達等の間には夢想だもしなかつた種々のよい事を一緒に行うた。殊にイエスの爲し給うた如くパンを裂いて夕食を共にすることは最嚴な式であつた。イエスはその弟子と共に毎日かく食事を共にしたのであつた。此晩餐に於て信徒達は同じ簡單な食物と混合葡萄酒及水を攝り、互に頒ち合ひ、愛し助け合ふ有樣は如何にも飾氣の無い子供々々したものであつた。然し其は長く滿足には行かなかつた。やがて面倒なことが起きて來た。パウロ、シラス、テモテ等も彼等と食事を共にし、パウロは主の聖餐式は如何に守るべきか口でも、後の手紙でも反復して教へたのである。そのうちに彼はカペナウムの會堂で人々に話されたイエスの言を說明し、信徒はイエスの血を飲み肉を喰はなければならぬ、とりも直さずイエスの言卽ち信徒にとつては肉の如く飲物の如き働をなす言を信じなければならぬと教へた。彼記して言ふ、

「さらば我が愛する者よ、偶像を拜することを避けよ。われ慧き者に言ふごとく言はう。我が言ふところを判斷せよ。我らが祝ふところの祝の酒杯は、これキリストの血に與るのではないか。我らが裂くパンは、これキリストの體に與るのではないか。パンは一つであるから、多くの我等も一體であるは皆ともに一つのパンに與るに因るのである。肉によるイスラエルを視よ、供物を食ふ者は祭壇に與る

ではないか。然らば我が言ふところは何か、偶像の供物はあるものと言ふか。また偶像はあるものと言ふか。否われは言ふ、異邦人の供ふる物は神に供ふるのではない。惡鬼に供ふるのであると。我は諸君が惡鬼と交るを欲しない。諸君は主の酒杯と惡鬼の酒杯とを兼飲むこと能きない。主の食卓と惡鬼の食卓とに兼與ることは出來ぬ。われらは主の妬を惹起さんとするか、我らは主よりも强き者であらうか。」

秋は過ぎたが、まだパウロも二人の伴侶もコリントに滯在してゐた。紫の葡萄は蔓から摘まれ、暗綠色の橄欖果、赤い林檎、黃金色の棗は果樹園から採取れた。眞紅や小豆色の森の木の葉は、木枯に驟雨の如く落下して落葉の山を築くのであつた。たゞしコリントの冬は嚴寒ではなかつた。電雷に雹を伴ふ俄雨、水があふれて旅も出來なくなる程の洪水雨のつゞく日、柔かな雪が鼠色の空から舞ひ下るかと思ふと白い雲に變つて、やがて處々靑空が現れ、日光さへ照ると云ふ幾週間、それが此邊の冬であつた。暗い夜の間は石床の上に火を焚いて、蓆や臥榻をその側に近よせて寢るのであつた。

織職アクラの處に寄寓したパウロは自分の商賣にも勵んだ。そして冬の夜長に、シラスやテモテの旅行談をきゝ、パウロがアテネに居た間に、テサロニケで何事が起つてゐたか話された時、パウロはまたいつ訪ねることが出來るか分らぬので、テサロニケの信徒達に手紙を書かうと決心した。ユダヤの教法師から遠い會堂に宛てた手紙を書くと云ふことは珍しいことではなかつたが、今日迄傳つてゐ

るバウロの書簡の中では最初のものであつた。此は新約聖書中、使徒行傳よりもまだ前に書かれた最古い書である。バウロが此手紙を認めた頃は、四福音書はまだ、イエスの言を記憶したい人々の間に手記又は備忘錄として散在してゐたに過ぎず、最初のイエス傳が出たのは、其から少くとも十年の後であつた。イエスの言の手記されたものは到る處のクリスチャンによつて寫され、エルサレムに在る使徒達は手書を書いた。其内殘つてをるものも有る。こんな有樣でバウロの手紙を書いたことは世間に珍しい事ではなかつたが、たゞ其内容は新奇なものであつた。時には長い議論となり奇妙な例證を引いてをる。敎法師の筆法で行く爲に異邦人が讀んで解るかしらと思はれる點もあるが、然しいつでも光る言が中に入つてゐた。正直な漁夫ペテロは、バウロの書簡を左の如く評してをる。

「これは我らの愛する兄弟バウロも、その與へられたる智慧にしたがひ曾て汝等に書き贈つた通りである。彼はその凡ての書にも此等のことにつきて語つてをるその中には悟りがたい所がある、無學のもの、心の定まらぬ者は、他の聖書の加く之をも强ひ釋きて自ら滅亡を招くのである。」

最初短い手紙に始つたバウロのクリスチャン會衆に送る回章は其後隨分長いものになつた。ある手紙は、ある人々の悲道い罪を矯正する爲に明白に指定したものもあり、また一般的の性質を持つ手紙も有る。今日バウロの書簡の殘つてをるのが十二、彼が書いたと云つてゐて失はれたと思はれるのが三つある。

テサロニケ前書のある部分は既に本書中引用した處もある。猶讀者が聖書を執つて同書を一讀されん事を希望する。次章に其梗概丈けを記して了解の便に供したい。同書に於て注意すべき一つの點はバウロが、ユダヤのメシヤ觀が成就されて、イエスが地上に速に再び現れる事を期待してをる事である。此希望は年を經ると共に變つて行つたやうである。

一四七　最初の書簡

コリント・五十歳から六十歳

その書かれてをる處を見たならば、バウロの書簡を一層容易すく了解し得くであらうが、仕方が無いから、想像して見る。バウロは老年に近づいてはゐたが、まだ元氣盛で、小さな部屋の低い臥榻に腰を下してをる。その淺黑い容貌と鋭い黑い眼は、テモテの側に立てられた小石油ランプに照されてゐる。青年テモテはバビラス紙の卷いたのを持つて、腰帶に垂した小瓶の煤汁に葦ペンを潰けてはバウロの言ふ通りをギリシヤ文字で、ほつ〳〵と書いて行く。バウロの手紙は演說のやうだ。猛烈な非難の口調が出るかと思へば、愛と友情の溫みが滲んで出る。或は無上の幻覺に入り、或は精神恍惚として、小さな暗い部屋や靜に動くペンやアクラの織械のトタンバタンの音も忘れて無限の境に逍遙する。幾時間も毎夜、シラスは眞面目に座つて、文章の巧みな、聖書、傳說に精通した此敎法師と議論

を試みたり、バウロがマケドニヤを去つた後起つた迫害の話をテモテと話し合つたりした。

テサロニケ前書は、バウロ、シラス、テモテからテサロニケのクリスチヤンに送つたことになつてをる。

バウロは先づ一年前バウロの傳道に際して福音を歡迎し、其後迫害の下にあつて忠信を守り、福音の傳へられた近在地方の模範となつてゐることに就てテサロニケの信徒達を稱讃した。彼等は偶像を棄てゝ活ける神に歸り、イエスが天から來るのを待つてゐた。

彼はピリピで苦難を受けてテサロニケに來たこと紛爭のうちに彼等に教を傳へたこと、彼の說教は人を喜ばせる爲ではなく神を喜ばせる爲であつたこと、また人の稱讃を得んが爲に人々に諂はなかつたこと、旅の使徒として許されることであつても、他人の飯は食はなかつたこと、夜る晝、天幕業を勵んで自活しながら、父の子供を敎ゆるが如くテサロニケの人々を導き神から來れる敎として傾聽されたことなどを回顧した。

テサロニケの信徒達が兄弟等から迫害を受けるのは恰もユダヤに居るユダヤ人等がイエスを殺し、バウロを逐出して、異邦人に敎を宣べてはならぬと言つたやうなものである。バウロはテサロニケの信徒達を見ることは出來ぬが心には覺えてをる、會ひに行き度いが其が出來ぬ。アテネで兄弟達の苦難をきいて、テモテを應援の爲に送り返し自分は一人アテネに留つた。然るにテモテがコリントに來

ての話によると彼等は信仰に固く立つてゐるさうである。夜も晝も祈つてをる、とも書いた。

バウロは更に彼等が節制ある純潔な生涯を送り、偶像の宮に參つて宴樂に耽り情慾に身を任する者に習ふことなきやう力說した。靜に仕事に勵み手づから働き未信徒に對しても正直に、獨立の生活をせよと奬勵した。

テサロニケでバウロは、イエスが何時來るかも知れぬことを敎へた。テモテの話によると其事について爭論が起つてをると云ふ。ある者は世の終が近いと言つて仕事を止めた。ある者は人々に用意をせよと言つて騷がしてゐる。死んだ者はどうなるのだと心配する者、生きてをる者はどうなるかと心を痛める者がある。そして皆イエスは何日の何時に、火の雲に乘り天使を隨へて大空から降つて來るのか知り度いと思つてをる。暗い夜中か眞晝間か、彼等は頻に若いテモテに訊いた。そこでバウロは墓の向ふに永生の望を持たぬ偶像禮拜者のやうに騷ぐなとテモテに書かした。

當時バウロはイエスは地上に自分の死なぬうちに來ると豫期してゐた。そしてテサロニケの信徒達にも、信者未信者の別なくユダヤ人一般に行はれてゐた一種奇態な信仰を持つてゐて、基督が號令と天使の長の聲と神のラッパと共に天から降つて凡て彼を信じた者信ずる者は起ち上つて彼を迎ふるのだと敎へた。然しバウロが敎法師敎育を受けた當時の記憶から、かうした事をクリスチヤンに話して置いた處では、必ず此問題に付て不安が生じた。そして年を經るに隨つてバウロの心からも漸次こん

な考は消え去つたらしい。

正確な時間に就ての質問に對してパウロの答は明確ではなかつた、たゞ其日は夜忍んで來る盜人の如く、不意に來て、俄然イエスの敵を全滅させる、で皆目を覺して氣をつけ眞面目にして醉ふことなく待たなければならぬ、イエスが皆の爲に死んだのであるから既に永眠した者も生きてをる者も、イエスと共に生きるのである。信徒は教會の役員の命を守り共に仲善くして、互を赦して暮さなければならぬと教へてをる。

「誰も人に對し惡をもて惡に報いぬやう愼め、たゞ相互に、また凡ての人に對して常に善を追ひ求めよ。常に喜べ、絕えず祈れ、凡てのこと感謝せよ、これイエス・キリストに由りて神が諸君に求め給ふ所である。御靈を熄すな　預言を蔑するな、凡てのこと試みて善きものを守り、凡て惡の類に遠ざかれ。願くは平和の神、みづから諸君を全く潔くし、諸君の靈と心と體とを全く守りて、我等の主イエス・キリストの來給ふとき責むべき所なからしめ給はんことを。諸君を召し給ふ者は眞實であるから、必ず之を成し給ふであらう。」

書き上げた手紙をテモテが讀む、とパウロは處々修正を加へる、それをまた長い黃色の卷紙に寫すと、パウロは自ら其を讀んで見て、初めて、自署を書く。それから叮寧に確り卷いて封をし、パウロとアクラの製つた防水の毛織に包んでテサロニケに行く人に託したであらう。

一四八　青葉の飾

コリント・五十歳から六十歳

パウロは尙もコリントに留つた。彼がこんなに成功して、これほど長く滯在した市は他に無かつた。最初の手紙をこゝで書き、また二年目に一度ある大イスミヤ競技も見物した。其時市中は數週間興奮と歡樂でひつくり返るのであつた。

この競技はパウロにも面白いものであつた。アテネのオリムピック競技に次ぐ大競技であつた。その擧行されるのは初夏の候、平野は乾き、樹々綠に海靜で、諸國から人の集りよい頃であつた。イスミヤ競技と呼ばれたのは、コリントのイスマスと云つて兩側に海水漣の音を立つる狹い岬で行はれたからである。

市中は、褒美を得やうとギリシヤの各町から集つて來る若者等と其指導者等とで一杯になつた。競技の初る二三週も前から、ケンクリアやレカウムの諸港は、外國人を滿載した船で群がつた。彼等の中には餘興に獅子、虎などをアフリカから伴れて來るもあり、熊、狼、猛犬をアジヤから、立派な競馬をシリヤから引いて來る者もあつた。海からコリントへ上る途は、步行してをる平民達、車馬に乘る紳士連、軍車を驅る士官達、奴隸に舁がせた贅澤な舁床に乘つた貴婦人達が皆市へ〳〵と流れ込み

コリントの市中は毎日幾百名づゝか人數が殖えて行くのであつた。

街上は派手な着物をきた嘻々たる若者達で一杯であつた。彼等は放埒な呑んだくれの狂態を曝け出し、笛、手鼓、堅琴などを鳴らし高聲に放歌して憚るところもなかつた。手品師、賣卜者、道化者等は手品魔術を使ひ、寄つて來る人々に下らぬ戯談口をきいてゐた。奴隷の舞子は赤や青の輕羅の衣を風に靡かせつゝ象牙の四竹を鳴らし、鈴を拂つて四辻や市場の暑い敷石の上で、親方の爲に踊つてゐた。ヴィナスの神官は白衣を纏うて銅鑼を打鳴らしながら岩丘の頂の宮の祭に來るやうに人々を誘うて行つた。

イスミヤ競技は、ハードル、ランニング、環投、投鎗、角力、拳闘、歌、暗誦などで、其に野獸闘軍車競走を加へたものであつた。賞品は金や銀のカップとか金錢ではなく、ネプチューン宮の森から金の刀で切つた綠の松葉の冠を頭に飾らせるのであつた。我々から見れば、つまらぬ賞品だと思はれるが、然も其爲に青年達は幾年も訓練されて、一度此綠の花冠を得た青年の爲には、彼の出た市や國が彼の爲に銅像を建て大人物としてこれを讃えたのである。こんなにした秘密は、民の支配者等が、良い軍人を作る爲に肉體の强さ快捷を何よりも大切に思つたことである。

競技はコリント市を去る八哩の、地峽の最狹くなつてゐる大石垣に近い處で行はれた。パウロは拂曉群衆が其方へ流れて行くのを見た。早く白い行列を作つて輝くネプチューンの神殿に供物を捧げ、

その祭に加はる者、木の腰掛の良い場所を選ばうとて先を爭ふ者、赤、青、黃色の粗末な衣をきて荷を負うた驢馬を引いて來て、店を開いて物を賣る商人もあつた。誰も彼も石垣を巡らした神苑の中に立つ白い宮の境内さして集り、綠樹と優勝者の像の列び立つ道は、忽ち市中の如く群集でもみ合ふやうになつた。

競走場は圓周約四分の一哩で、周圍に三萬の觀集を入るゝ座席が段々上りに拵へてあつた。婦人の入場は許されてなかつたが、奴隷女は時に喧囂たる男子の群の前に競走を强ひられたと云ふことである。グラウンドには美い黃砂が散かれてあつた。碧空の下、雜多の色の日除に陰されて、あらゆる色の外衣をつけた數萬の人々は世界一の競技を見物するのであつた。パウロは見に行つたか疑はしい。喇叭の聲を合圖に競走者が出て出發點に立つ、白いナプキンが落ちるとスタートを切つて矢の如く、兩側に叫ぶ人々の間を馳驅する、向ふの端に立つてをる柱を廻つて飛ぶやうに引返し、決勝點の線に觸れる、優勝者は衆人の前で審判官の手から簡單な綠葉の冠を頭にうけ、五日の競技が終つた日に眞鍮のネプチューンの宮で馳走に與るのであつた。其他青年達が立派な巧妙な態度で青銅の尖のついた鎗を投じ、重い眞鍮の圓環を擲げ出す競技も見られた。之に參加する青年は純ギリシャ人で、充分訓練された者でなければ委員の檢査を通過して競技に加はることを許されなかつたのである。

次の日には、演技場に眞鍮の喇叭が鳴り響いて、出演者の姓名と所屬の町名とを呼上げると、一人

々々前に出て、輕い上衣を脱ぎ棄てゝ裸體となる、最客の人々は歡呼して之を迎へ、誰が勝つか賭をする、賭事は此等のゲームに客を引く主な理由となつてゐたのである。演技者等は油を塗つた立派な體で美しい動物の如く巧妙に飛ぶ肉腦高き腕を相交へて牡牛の如く角力ふ、相手に傷を負はすか、時には殺すまでも拳闘をつゞけるのであつた。針をさした革紐を手に卷いて互に裸體を擊ち合ひ血を流すに至つては、慘忍な光景を呈した。

翌日は、輝く日に照されて鎧を衣た闘士達が、短刀を手に、圓い楯を腕にかけて立ち出で、檻から放たれた野獸と闘ふのである。高い石のベンチに安全に腰掛けて見物する人々の爲に、彼等は命を懸けて向ふのである。見物人は、飛び來る虎を恐れて身を交はす者があると「卑怯者！」と罵しる、闘の進行につれて笑ふ、叫ぶ、泣く、呪ふ、賭をすると云ふ有樣であつた。

また次の日が來ると競馬場の座席は忽ち大群衆で滿され、喇叭が鳴ると三頭立での軍車が柵門に馳せて來る、御者達は赤、青、綠とりゞゝの色の裝をして見物人が賭をするに便する。合圖があると柵門が音をたてゝ倒れる、恐しい鞭打ちの音、御者の雄叫びに、駿馬は、赤や青の輕い二輪軍車を引いて前方に驀進する、車上の人は手綱をとり鞭を振る、馬の蹄は砂塵を高くけだてゝ、廣大な圓周を疾駈する。或は垣に衝突して顚倒するもの、車輪がめり込んで動けなくなるもの、棒立ちになつた荒馬と闘ふもの、見物の熱狂の叫の中に褒美を得る者は只一車であつた。

コリントではイスミヤ競技を誇として日用の銅貨にも「イスミヤ」の語を書し、リボンでくゝつた葉の環飾を其周りに彫出してゐた。あるローマの若い皇帝は、自分は褒美を貰うたことは無かつたが彼の名が優勝者として此銅貨に刻まれてゐたのを名譽とした。

バウロの考はしほみゆく青葉の花冠を得んと努力奮闘する青年達から、クリスチヤンの得んとして努力する物に向けられ、彼等偶像禮拜者達が、同じやうな熱心を以てイエスにある最高の生涯の褒美を得ん爲めに奮闘するに至らんことを望んで止まなかつた。

一四九　働かぬ者は食ふな

コリント・五十歳から六十歳

バウロと二人の伴侶から送つた手紙が、テサロニケの指定された人の手に繙かれて、クリスチヤンの會合で讀上げられた時、イエスの日が夜來る盗人の如く來ると聞いて彼等が如何に驚異の眼をみはつたかは想像するに難くない。今のやうに章句には分たれてゐなかつたが、各集會に適當な部分々々が讀まれたことであらう。それに就て話し合ひ、寫を取つて他の所にも送つたであらう。理解し難い處もあつたであらうが。そしてある困難な點は此手紙によつて取除かれても、またイエスが速に現れると云ふ期待が益極點まで人々を興奮させたに相違ない。

數ヶ月の後、パウロはテサロニケからの使者によつて、彼の手紙が如何に讀まれ、如何なる影響を彼地クリスチャンに及ぼしたか知ることを得た。そしてシラス、テモテと相談の結果、も一つ書く必要があると思つた。第二の書簡に於て、澤山第一のものを反覆し、殊に、前の寫しが側に取つてあつたので、前のと同じ言をくり返した處もあつた。前の丶寫をも一度注意して讀んで、其手紙でテサロニケ人の興奮と恐の原となつた節に就て必要な說明を加へ前に充分說いてなかつた點を反覆して、テモテに口授して書かせた。

彼は先づ前の手紙と同樣奬勵の言を以て初め、彼等が迫害の下に忍耐して堅信なることを他の敎會に誇り傳へたことを書した。イエスの來ることに就ては、自分で心を騷がしたり、他人の言に煩はされたり、イエスの來るは直ぐだと云ふやうなことを書いた似せ手紙に迷はされる必要はない、再臨は二年や三年のうちにあるのではない、と書いた。それからパウロの言は意味不明となるが、多分當時幾百の神宮に、拜むやうにと言つて自分の像を安置させた奇怪なローマ皇帝のことを言つたものであらうと云ふ。次に彼は敎法師のときに習つた考に隨つて、キリスト來るときは口から火を吹いて敵を亡すと書いてをる、が之はイエスらしからぬことである。テサロニケに居たときに敎へた通り此事に就ては固く信じ、言ひ、或は手紙で敎へたことを固く守れとも書いた。

無秩序なクリスチャンを遠けねばならぬ。イエスが來るからと言つて働を止めて話してばかり居る

者は、パウロとシラスがテサロニケに居た時に夜晝働いて、遊んで食ふことを爲なかつた例に習はなければならぬ。かつて敎へた通り、かの賢明なるユダヤの諺「人もし働くことを欲せずば、食すべからず」との言を記憶しなければならぬ。お喋者の、おせつかいのクリスチャン等は、靜に己の職業に反つて、自分のパンを儲けねばならぬと敎へた。

「兄弟よ、善を行ひて倦むな、もし此書にいへる我らの言に從はぬ者があるならば、その人を書止めておいて交ることをするな、彼みづから恥ぢん爲である。然し彼を仇の如くせず、兄弟として訓戒せよ。願くは平和の主、みづから何時にても凡ての事に平和を諸君に與へ給はんことを。願くは主諸君凡ての者と偕に在さん事を。」

手紙は前の如く、一度通讀し、訂正し、若者テモテの注意深い手で寫し直されて、パウロがまた其を讀んだであらう。葦のペンをパウロ親らとつて長い卷紙の上に首を伸べて書き加へた。ペンを返した時テモテが讀んで見ると、終の方に筆太にギリシャ文字で

「我パウロ手づから筆を執りて諸君の安否を問ふ。これ我がすべての書の記章である。わが書ける物は斯の如し。願くは我らの主イエス・キリストの恩惠諸君凡ての者と共にあらんことを。」と書いてあつた。

此手紙も封印して叮寧に包み、遠いテサロニケに旅立つクリスチャンに託して、向ふの敎會に送つ

た。信徒達は毎日の仕事に勵まなければならぬ、イエスは二年や三年のうちに再臨するのではない。

是迄記したのはテサロニケの書の叙事的な部分に過ぎない、また他の處で引用することもあるし、讀者は聖書を繙いて全部を讀まるゝもよい。此二つの書は、當時の暗愚、不文な偶像禮拜者等の陷つてゐた罪過を鋭く抗擊してをるが、今日の我々にとつては其價値は自ら違ふ。今日の我々の爲に書かれたやうに感じて讀む人もあらうが、然し昔の事情と人柄とを考へて、單に當時に丈け當つてをるものと、永遠の眞理であるものとを選分けなくてはならぬ。テサロニケ前後書にはエルサレムから來た僞せクリスチャンの事は少しも書いてないが、パウロには知れてなかつたけれども、彼等は各市でパウロを抗擊して歩いてゐた者で、彼の後の書簡には彼等のことに言及してをる、此時はまだ彼等がテサロニケまでは來なかつたのである。

此等の手紙には、イエスに近く親しんで居る心の美しい調子が全體に現れてゐて、いかにも優しい、兄弟らしい愛、殊に平和の情が滿ちてをる。神は平和の神である、イエスは平和の君にしてその弟子に平和を與ふ。信徒はイエスの忍耐を持ち、日々の仕事にいそしむべきである。教理や儀式について無益な水掛論をすることは、眞の教師、眞の信徒の爲すべきことではなかつた。然るに、やがて此等の教會の喇叭が吹き立てられて、世界に轟き亙ることになり、パウロの傳へた基督教の福音が、パウロを惡み、イエスを愛さなかつたパリサイ人の基督教の暗い不快な教理で煩はされることになつたの

である。

一五〇　優しひ總督ガリオ

コリント・五十歳から六十歳

パウロ等はコリントに於ける成功を大いに喜んで、翌年の冬もこゝに過すことになつた。月日はいつしか過ぎて雪は山々を被ひ、風は兩側の海を荒らし、電雷山間に轟き、雨雹は濕れた野を打つ頃となつたと思ふとまた春陽來復して、山の肩に積む雪を溶かし、平野は新綠の衣を着、其上に咲き亂るゝ紅黄紫白は地に敷ける星かとも見えて來た。パウロ等は商人、手品師、香具師、呑んだくれ、舞踊者、賣卜者の賑な市に一年半を過した。パウロは毎日、極めて單純に而も深刻なる經驗からクリスチャンになつた不思議な男女に教を說いた、後に彼が此人々に書いた書簡に云ふ、

「一切のもの我に可くないものはない、然し一切のものが益あるのではない。一切のもの我に可からざるはない然し我は何物にも支配せられない。食物は腹のため腹は食物のためである、けれども神は之をも彼をも亡し給ふであらう。身は淫行をなさん爲ではない、主の爲である、……諸君の身はその內にある神から受けた聖靈の宮であつて諸君は自分の者ではない。諸君は價をもて買はれた者だ、然らばその身をもて神の榮光を顯せ。

「もし或る兄弟に不信者なる妻ありて偕に居ることを可しとしたら之を去るな。また女に不信者なる夫ありて偕に居ることを可しとしたら、夫を去るな。……神が諸君を召し給うたのは平和を得させん爲である。妻よ、汝いかで夫を救ひうるや否を知らう。夫よ、汝いかで妻を救ひ得るや否を知らう。唯おの〳〵主の分ち賜ふところ、神の召し給ふところに循ひて歩め、凡ての教會に我が命ずることは此通りである、割禮ありて召されし者があれば、其人は割禮を廢てゝはならぬ。割禮なしに召された者があれば、其人は割禮を受けてはならぬ、割禮を受くるも受けぬも數ふるに足らず、たゞ貴きは神の語命を守ることである。

「各人その召された時の狀に止まれ。奴隷にて召された者は、之を思ひ煩ふな（もし釋さるゝことを得ばゆるされよ）。召されて主にある奴隷は、主につける自主の人である。斯くのごとく自主にして召された者は、キリストの奴隷である。汝らは價をもて買はれた者である、人の奴隷となるな。兄弟よ、各人召された時の狀に止りて神と偕に居れ。」

此頃、友情のあつたローマ總督が交代して、名高いガリオが新總督になつた。ガリオは、かのローマの大政治家セネカの兄弟であつた、セネカのラテン語の著書は今日も傳はつて居るが、彼の記すところによると、兄弟ガリオはギリシヤで熱病にかゝつて轉地療養の爲ケンクリヤからエジプトに渡航したと云ふ。ガリオは學者で善良な人で、ローマでは彼と交際した詩人や哲學者等から「優しいガリ

オ」と言はれ溫和な性質の人であつた。

クロデオ皇帝が其子ネロの師傅として選んだほどの大學者であつたセネカは此兄弟を非常に愛して彼がコリントの周圍百哩に擴がるアケイヤの總督に任ぜられたとき、戲談半分に「我が君ガリオよ」と手紙に書き、精一ぱいにガリオを愛したと言つても、まだ〳〵足りない位だと言つてほめそやしてゐる。

パウロが餘り大膽に、立てつゞけに市で說教するので會堂のユダヤ人等は中止を命じやうと決心した。パウロは何でも隱し立てはしないから、ピリピやテサロニケで追出されたことは皆知つてゐた。それで新總督が來たのを好機に、コリントでも同じ事をやつて遣らうと考へたのである。

或日、ガリオが、黑と白の煉瓦の敷かれた床の上に、白い象牙の椅子によつて、諸拱門を通して來る涼風に吹かれながら、ローマの裁判を求めて來る者を待つて居ると、街上に騷が聞えて、やがて一團の群衆が高座の周圍に集つた。よく見ると殆んど皆ユダヤ人で、一人のユダヤ人を審判いて貰ふ爲に連れて來たのであつた。パウロが捕へられ、町を引立てられて總督の前に立たされたのである。ガリオは市內の樣子は說明されてゐたし、パウロのやうに說教すれば總督の耳に入らぬ筈はなかつた。前總督もパウロ等のことをガリオに話して置いたかも知れない、ガリオは初からパウロに好意を持つてゐたやうである。

ガリオは黒眼の髭面の長い髪をして編の頭巾を被たユダヤ人等を一瞥して、バウロが、會堂から出て隣に說教所を開き神とイエスに就て敎へてをる爲にユダヤ人を怒らしたのだと言ふことを知つてゐた、彼は先づ型の如く訊問を始めた。被告、原告の姓名をきゝ、訴へをきいた。クリスチャンになつたクリスポの後を承けて會堂の司となつたソステネが、バウロを指示して、一同の代辯をした。

「この人は律法にかなはぬ仕方で、神を拜むことを人に勸める。」

彼は、律法と云ふのはローマ法のことだと思はせやうとしたが、ガリオはちやんと呑込んでゐた。ローマ法によればバウロでも他のユダヤ人でも、市の安寧秩序を亂らざる限りは、各自好む方法によつて禮拜し、宗教上の問題を自由に討論してよいのであつた。

バウロは答辯をしたいと思つて、發言許可の合圖を待つた。然しガリオは手を擧げて彼を制し、ソステネに對つて靜に口を開いた。

「ユダヤ人よ。不正または奸惡の事ならば、我が汝等に聽くは道理だが、もし言、名、あるひは汝等の律法にかゝはる問題ならば、汝等みづから所理せよ。我はかゝる事の審判人となるを好まぬ。」

彼は手を振つて、ユダヤ人等の去つて己を煩はすことなきやう命じた。ところが彼等は容易に去らず、叫び抗論し、主張し、哀訴して止まない、其騷ぎで野次馬が一ぱい群がつて來た。ガリオが重ねて合圖をすると兵士達が矛の柄で押したり、つゝついたりして、押合ひ叫合ひながら塊つてをるユダ

ヤ人を街上へと驅逐した。ローマの衛兵に逐出されたユダヤ人を見た野次馬等、殊に平常からユダヤ人の毛むしやら面を憎んでをる連中は、矢庭に裁判所の口で首領ソステネを捕えて、打擲した。バウロは二冬も街上市場で說教したのである、總督の受けもよいと言ふので市の人は餘計にソステネを打据えたのであらう。

ガリオは大理石の圓柱ごしに其光景を見知らぬでも無かつたが、一切おかまひなく、次の仕事にかゝつた。彼はどうして未見の、タルソのユダヤ人にかくも好意を示したか。或は市中に馬車を驅る途上、バウロの路傍說教を耳にはさんで、彼の敎へる通りにしたらコリント人がどんなに善くなるであらうと感じたかも知れない。ガリオが一度でもバウロと敎に就て問答した事があつたか、八年後バウロがローマの牢屋に在つた時も、ローマの某宮殿に居た彼が友情を示し得たか、知り度かつた。あはれ兩人はネロ帝の怒の下に亡ぼされたのである。

同國人に抗擊されて解つた事は、バウロはコリントに滯在する間はローマの保護の下に居られると言ふことであつた。ガリオの親切は、バウロの心に、ローマに福音を宣べたいとの願を一層刺戟した。そしてローマ法官の公平は信賴するに足ると思はせた。

一五一　白い帆、青い海

コリント・五十歳から六十歳

暴風雨は去つて海路も安全になつたので、白帆、赤帆が兩側の海に點々たる期節になつた。ぢつとしてゐられないパウロの心も動いて來た。市の平民が澤山信者になつた他に、會堂司クリスポ、町の會計役エラスト、ユダヤ人の法律家ゼナス、其他コルト、アケイコ、フオルタナト、クロエと彼女の一家、パウロが二度目にコリントに來た時宿つたガイヨなどが有つた。パウロはケンクリヤにも教會を建てたが其内の一員であつたフイベと云ふは有能な婦人で、後に彼は長い手紙を彼女に託してローマのクリスチヤン達に送つたのである。彼はまたコリント灣に臨んだレキアムの港を訪ねた、此港はアテネと同樣、一哩半の間石垣に守られた大道がコリントまで續いてゐて敵の爲にコリントが兵馬糧食を海から上げるのを妨害せられないやうにしてあつた、大切な港であつた。會堂の直ぐ隣、葡萄の蔓戸口にまつわる家で、信徒達は集會し禮拜した。中にはユダヤ人の習慣にしたがつて、祈のショールに青い總をつけたものもあれば、短く刈込んだ頭に何も被らない者もあつた、一方に男子、一方に婦人と子供が座つてゐた。そこで舊約聖書の所々に耳を傾け、手を擧げて祈禱唱和したのである。安息日の夕には、特別な晩餐を守つてイエスの死と復活とを紀念し、むしろ昔の偶像祭を思はせるやう

な名ではあるが、之を愛祭と呼んだのである。パウロは教會を導いて役員を定めさせ、教師として認められる者も出來た。でも信徒達は相變らずパウロの話が好きで、クリスポの家の一等大きい部屋の床に麥藁の蓙や敷物をしいて坐つたり、外の庭、花園の樹蔭に集つて、喜んでパウロの言に耳を傾けた。パウロは愛祭の大切なことを注意して教へた、後に書き送つた手紙にも

「我はこれらの事を命じて、諸君を譽めない。諸君の集ることが益を受けないで損を招くからである。諸君の教會に集るとき分爭があると聞くが、われは略ぼそれを信ずる。諸君のうちに是とせらるべき者の現はれるためには黨派の生ずるも止を得ない。諸君は一處に集るとき主の晩餐を食することが出來ず、食する時おの〳〵人に先だちて己の晩餐を食するが爲に、饑うる者あり、醉飽ける者があると云ふことだ。諸君には飲食すべき家がないのか、神の教會を輕んじ、また乏しき者を辱しめやうとするか。我は何と言はうか、諸君を譽めることができるか、譽めることは出來ない。

「わが諸君に傳へたのは主から授けられたのである。卽ち主イエスは、付され給ふ夜、パンを取り、祝して之を擘き、そして言ひ給ふ『これは汝等のための我が體なり。我が紀念として之を行へ』夕餐ののち酒杯をも前の如くして言ひたまふ『この酒杯は我が血によれる新しき契約なり。飲むごとに我が紀念として之をおこなへ』諸君はこのパンを食し、この酒杯を飲むごとに、主の死を示して其の來りたまふ時まで及ぶのである。されば宜しきに適はずして主のパンを食し主の酒杯を飲む者は、主の

體と血を犯すのである。人みづから省みて後、そのパンを食し、その酒杯を飲め。御體を辨へずに飲食する者は、その飲食によりて自ら審判を招くからである。この故に諸君のうちに弱きもの、病めるもの多くあり、また眠に就いた者も少なくない。……この故にわが兄弟よ、食せんとて集るときは互に待ち合はせよ。もし飢うる者あらば諸君の集會が審判を招くことの無いやうに、己の家で食せ。その他のことは我れいたらん時これを定めるであらう。」

バウロは十八ヶ月の間、人々と交り家から家に訪ねあらゆる處に立つて傳道したコリントの市を去らんとしてをるのである。茶色の外套を着、編の頭巾をかぶり黒い眼を光らした此ユダヤ人の姿は、此大都市に新しい宗教を齎した人物として、普く知らるゝに至つた。必ずや送別の大集會が開かれて之を最後かとばかり人々は、次の如きバウロの言に耳をたてたことであらう。

「兄弟よ、召を蒙れる諸君を見よ、肉によれる智き者は多くない、能力ある者も多くない、貴き者も多くない。然し神は賢き者を辱かしめやうと世の愚な者を選び、强き者を辱かしめやうと弱き者を選び、有る者を亡さんとて世の卑しきもの、輕んぜらるゝ者、卽ち無きが如き者を選び給うたのである。これ神の前に人が誇る事なからん爲である。諸君は神に賴りてキリスト・イエスに在り、彼は神に立てられて諸君の智慧と義と聖と救贖とに爲り給うた。『誇る者は主に賴りて誇るべし』と錄された通りになる爲である。

「兄弟よ、われ曩に諸君に到つたとき、神の證を傳ふるに言と、智慧との優れたのを用ひなかつた。イエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給うた事のほかは、諸君の中にありて何をも知るまじと心を定めた爲である。我諸君と共にゐた時に弱く、かつ懼れ、甚く戰いた。わが談話も宣教も智慧の美しい言によらないで、御靈と能力との證明によつたのである。これ諸君の信仰が人の智恵によらず、神の能力に賴らん爲である。

「兄弟よ、曩にわが傳へた福音を更に復た諸君に示す。諸君は之を受け之に賴りて立つたのである。諸君が徒に信ずることをせず、我が傳へたまゝを堅く守つたならば、この福音に由りて救はれるであらう。わが第一に諸君に傳へたのは、我が受けた所であつて、キリストが聖書に應じて我らの罪の爲に死に、また葬られ、聖書に應じて三日目に甦り、ケパに現れ、後に十二弟子に現れ給うたことである。次に五百人以上の兄弟に同時にあらはれ給うた、その中には既に眠つた者もあるが、多くは今なほ世にある。次にヤコブに現れ、次にすべての使徒に現はれ、最終には月足らぬ者の如き我にも現れ給うたのである、我は神の教會を迫害したから、使徒と稱へられるに足らぬ者であつて使徒のうち最小な者である。然るに我が今の如くなるは、神の恩惠に由るのである。斯てその賜はつた御恵は空しくならないで、凡ての使徒よりも我は多く働いた。これ我にあらず、我と偕にある神の恩惠である。されば我にもせよ、彼等にもせよ、宣傳ふる所は斯の如くであつて、諸君は斯のごとく信じたのであ

る。」

さてパウロは次に何處に行くか。必定、テサロニケからピリピ、アンテオケへと歸つて行きさうなものであつたが、パウロは屢計畫を更へた、今度は遠くエルサレムに上つて逾越節を守り度いと思つた。どうしてさう考へたかは記してないが、パリサイ人で基督信徒となつたものは、矢張之を守つたのかも知れない。

行ける人々は、パウロと其伴侶等を見送つて、城山の麓を下り白い道に沿うて、松林の陰を海岸のケンクリヤまでも連立つたであらう。パウロがアテネから來て寂しく氣拔けのした人の如く此道をのぼつてから、既う二年近くなる。今や彼は、活ける神を拜みイエスにある貴き生涯に向つて努力してゆく教會を建て、暗黑な市の眞中に新しい光明を据えて、この地を辭去するのであつた。

一五二　織職アクラ

ケンクリヤ・五十歳から六十歳

織職アクラと其妻は、パウロと一緒に住んでゐたが、またパウロと共にコリントを去ることになつた。シラスとテモテはどうしたのか書いてない。パウロの側でよく働き共に苦難も受けたシラスのことは、是限りで、たゞペテロの伴侶として記されてあるほか、何も記錄されてない。テモテの事も暫

く記事がない。彼はリストラを出てからもう三年にもなるので、アンテオケでパウロに再會するまで郷里に歸省したらしく思はれる。

ケンクリヤで、パウロと夫婦の者は、船便を得た、その船はエルサレムへ巡禮するユダヤ人を乘せたものであつたらう。先づエペソに寄港すると云ふ事であつたが、兎も角其に乘ることに定めた。船出する前にパウロかアクラか分らぬが、前にかけた誓願によつて髪を剃つた、こんな事の無益なことを知つて居たパウロがしさうにも思はれない。順風を待つ間に、ケンクリヤのクリスチャンとの別の集が開かれてパウロの話があつたであらう。コリントの書に次の如くある。

「讃むべきかな、われらの主イエス・キリストの父なる神、卽ちもろもろの慈悲の父、一切の慰安の神、われらの凡ての患難のうちに慰め、我等をして自ら神に慰めらるゝ慰安をもて、諸般の患難に居る者を慰むることを得しめ給ふ。そはキリストの苦難われらに溢るゝ如く、我らの慰安も亦キリストによりて溢るゝからである。我等或は患難を受くるも諸君の慰安と救とのため、或は慰安を受くるも諸君の慰安の爲であつて、その慰安は諸君の中に働きて、我らが受くる如き苦難を忍ぶことを得しむるのである。斯て諸君が苦難に與るごとく、また慰安にも與ることを知つてをるから、諸君に對する我等の望は堅いのである。

「兄弟よ、我らがアジヤで遭うた患難を諸君が知らざるを好まぬ。卽ち壓せられること甚しく、力耐

へがたくて、生くる望を失ひ、心のうちに死を期するに至つた。これ己を頼まないで、死人を甦へらせ給ふ神を頼まん爲である。神はかゝる死から我らを救ひ給ふたのである。再た救ひ給ふであらう。我らは後もなほ救ひ給はんことを望みて神を頼み、諸君も我らの爲に祈をもつて助けてくれる。

「われら世に在りて殊に諸君に對し、神の清淨と眞實とを以て、また肉の智慧によらず、神の恩惠によりて行うたことは、我らの良心の證する所であつて、我らの誇である。我らの書き贈ることは、諸君が既に讀みまた知ることばかりである。而して我は諸君のうち或者の既に知れる如く、我らの主イエスの日に我らが諸君の誇、諸君が我らの誇たるを終まで知らんことを望むのである。」

涙と共に友と相擁して別を惜み、やがて旅立つ三人が乘船すると、白帆は脹み、船首に白い眼玉を飾つた船は、青い海上を滑るが如く突進し、埠頭の人影はだん〳〵薄くなつて行つた。彼等は二年足らず前にパウロの通つたアテネ灣を航するのであつた。サラミス島を過ぎると諸の市の女王アテネの邊の山々が見えた。アクロポリスの白い諸館、ミネルバの磨かれた甲の輝くのも見えた。其日の夕方、スニアムの岬を通過したであらう。そこにはダイアナの白い宮が燈臺の代になつてゐた。この岬からエペソ灣への航路は夏期各都市間に通商盛なのでよく知られてゐた。入日はギリシャ本土の山々を紫色に、海波を紅に染めつゝあつた。パウロは例の如く、瞬く星をいたゞいて動搖する甲板で眠るのであつた。

航海は約一週間を費して、アケイヤの首府コリントから、それよりは少し大きいアジヤの首府エペソに行くのであつた。船はサイクラデス灣の美しい島々の間に毎夜に假泊したであらう。巡禮者等は先を急ぐでもなし、船頭も夜の航行を怖れたからである。島々の間から黄色い光がさして黎明を告げると、皆は喜んで固い床を出で、大きな帆はかゝげられ、錨は卷上げられた。

パウロは海にはなれてゐたので、かうして休養を得二人の友と共に夏い日盛りに涼風を味ふことを悦んだであらう。アンドロスとテノスの長い兩島を過ぎると、もうエペソまでも、白穂の立つ波の他は何も無い。最後の一夜は船のはしるまゝ、軋る帆音をきゝながらゆりうごく床に寢て、やがてエペソから十哩の大きなサモス島に着く、こゝはもうギリシャを去つてアジヤである。それから砂洲の間を氣をつけ〳〵航行して、流れゆるきケイストラス河口に近づくと、エペソ市は丘陵に圍まれた平野に横り、遠い山頂は雪を戴いて碧空に聳えてをる。

船は河を溯行し運河に入り、陸を掘つて作つた大きな港の入口に立つ塔を過ぎて錨を下した。港内には白や茶色の帆布を卷いた帆柱が林立して波にゆれてゐた。パウロとアクラ夫婦は上陸して、市中のユダヤ人を求めた。安息日が來ると、例の如く、會堂に行つた、會堂は葡萄の蔓がまつはつてゐるので直ぐ其と分る。そしてパウロはユダヤ人に向つてイエスの生涯と死について、また彼が聖書に約束せられたキリストであることを宣べ、福音はユダヤ人ばかりでなく、凡ての人の爲であることを說

いた。次に引くは彼がローマのユダヤ人に送つた手紙の一節である。

「然らばユダヤ人に何の優るゝ所があるか、また割禮に何の益があるか、凡ての事に益が多い、先づ第一に彼等は神の言を委ねられたのである。然し如何か、こゝに信じない者があつても、その不信は神の眞實を廢てるか。決してさうでない、人は皆虛僞者としても神を誠實としなければならぬ。錄して『神は其言にて義とせられ、審かるゝとき勝を得給はん爲なり』とある通りである。けれど若し我らの不義が神の義を顯すとせば何と言はうか、怒を加へ給ふ神は不義か（これは人の言ふごとく言ふのである。）決してさうでない、若し然ならば神は如何して世を審き給ふことが出來やうか。わが虛僞により て神の誠實いよ〳〵顯れ、その榮光となればどうして我なほ罪人として審かれる事があらうか。また『善を來らせん爲に惡をなすは可からずや』と或者はわれらを譏りて之を我らの言であるといふ斯る人が罪に定められるのは正當である。さらばどうか、我らの勝る所があるか、有りはしない。我ら既にユダヤ人もギリシヤ人も、みな罪の下に在りと告げた。錄して『義人なし、一人だになし、聰き者なく、神を求むる者なし。みな迷ひて相共に空しくなれり、善をなす者なし、一人だになし。彼らは平和の道を知らず、その眼前に神をおそるゝ畏なし』とある通りである。」

例の如く會堂の重立つた人々はパウロの不思議な音信に就て質問し、パウロの答辯を待つて更に、好意を以て種々議論した。禮拜が終ると皆パウロに再た來て敎を說いてくれるやう乞ふたが、パウロ

は其が出來ない、今は逾越節に間に合ふやうにエルサレムに上る途中であるから。然しまたいつか來る時もあらうと告げた。然しアクラとプリスキラは此市に留つて働くことになつた。

これからパウロは夫婦の者に接吻して別を告げ、多の巡禮者の中に只一人交つて都に上つた。船は港を拔錨して、運河から迂曲せる河を下つて漕がれ、海に入つて帆を張り、船尾に高く座を占めた舵手は、舵を固く握つて、船首をサモス島と陸地との間の狹い海峽に進めた。かのヨハネの住うた青いパトモス島は、前方三十哩の處に在つた。これが此航海の第二部である、向ふ處はパレスチナのガイザリヤである。

一五三　僞クリスチアンの活動

エペソ・五十歲から六十歲

此巡禮客をのせた船は順風に追はれたと見える。エペソからカイザリヤまでの距離は六百哩を出るから二週間以上かゝるのが普通であつた。航路はアジヤの海岸に沿うて走つたが、島が始終近くにあつた。夕べ眞赤に染つた島が後の紫雲のうちに沒すると、翌朝は小さな青雲の如く新しい島が現れる。かくて初の週は淀泊の地に困らなかつた。一週の終にはローデスを後にした、ローデスはアエギアン海諸島中最大の美しい島であつた。こゝからは廣い地中海に乘出して目を遮るものも無かつた。夜に

日につゝけさまに大波上に乘つて進むのである。たつた一つの帆で、羅針盤もなく、一打の櫓を舵にして、巡禮者を滿載して航海する小舟にとつては沖に乘出すは可成の冒險であつた。

バウロは長い單調な日々を過す間に、ユダヤ人等に傳道をしたであらうか。若しイエスがキリストであることをつけたら、會堂でさへ耳を傾けたユダヤ人は、きつと耳を籍したであらう。若し彼がギリシャ人の水夫達に活ける神のことを話し、港に祀られてゐる青銅のネプチューンの像や、船の船首に安置された小さな偶像を拜むよりも、眞の神に祈つた方が本統だと敎へたならば、ユダヤ人は彼を尊敬したであらう。船は大波の上に、あるひは脹み、あるひはしぼむ帆につれて、前後左右に動搖し青空に照る日頭上に落つるところ、人々は團を作つてパウロの話に耳をたてたであらう。パウロは書簡の一節にイエスの好んで言つた語を引いて言ふ、

「諸君たがひに愛の負債のほか何をも人に負ふな。人を愛する者は、律法を全うするのである。それ『姦淫する勿れ、殺すなかれ、盜むなかれ、貪るなかれ』と云へるこの他なほ誡命があつても『おのれの如く隣を愛すべし』といふ言の中にみな籠つてをる。愛は隣を害はず、この故に愛は律法の完全である。諸君は時を知る故に、いよ〳〵然せよ。今は眠から覺むべき時である。始めて信じた時よりも今は我らの救が近いからである。夜ふけて日近づいた。されば我等暗黑の業をすてゝ光明の甲を着なければならぬ。晝のごとく正しく歩みて宴樂、醉酒に、淫樂、好色に、爭鬪、嫉妬に歩むべきでな

い。たゞ諸君、主イエス・キリストを衣よ。肉の慾の爲に備をするな。」

雪をいただいた山々も、綠の谷も紫の島々も、もう見えなかつた、その代り間もなく、クプロの山々が海の上に浮出て來た、彼處はバルナバの鄕國である、此船の過るときも、バルナバが居たかも知れない。バルナバはルカを連れて、今向ふに見ゆる、白い石垣、低い屋根の家の列ぶ、尖塔輝くパフオスの町に、ローマ總督パウロスを訪ねて行つてゐはしなかつたか。クプロの美しい山々が、その峨峨たる姿を遠霞の中に沒するころには、パレスチナの山々が、前方にいや高くなつて來た。パウロにはおなじみのカイザリヤの大港に、石の塔の間を過ぎて突入すると、島も洲も、進路を妨ぐるものとてはなかつた。

パウロはカイザリヤに足を止めず、直ぐエルサレムへと巡禮達に交り、軍用道路に浴うて上つた。船の中で狹苦しくしてゐた一行は、もうゆつくりしたもので、サマリヤの綠の山腹を攀登りながら逾越節の讃詠を高唱してゐた、それも其筈彼等は世界に唯一つの眞の神殿のうれしい祭に參詣するのであつた。他のは皆、彼等から見れば偶像の宮であつた、彼等の宮こそ神の眞の家である。最後の日には一寸休憩して、袋や包裝を解き、旅に汚れた衣をすてゝ、晴衣に更へ、新しい歌聲高らかに、最後の歩を進めて、夢に見た愛しい都が見えてくると綠葉の枝を打振り〳〵大聲に叫んで行くのであつたバウロも少年時代の如く綠葉の枝を振つたであらうか、振りはしなかつたらう、彼は此金の屋根を見

て後、バルテノンやコリントやエペソの神殿や、其他大小數多の宮を見て來たのである。彼はアテネの學者等に、

「神は天地の主に在せば、手で造つた宮に住み給はぬ。みづから凡ての人に生命と息と萬の物とを與へ給ふのであるから、物に乏しき所あるが如く、人の手にて事ふることを要し給はない。」と敎へたのである。

バウロは三年の間エルサレムに居なかつた。前に來た時は雪がレバノンやカルメルの峯に白く積つてゐて、ケドロン川は勢よく流れてゐた。その時彼はアンテオケに來て彼の働を亂したエルサレムのユダヤ人基督者のことを訴へに來て、其妨害に止め刺すべく、使徒達の手紙を得てアンテオケに歸つたのである。何用あつて此度かくも急いで都上りをしたのか不明であるが、兎に角彼は直ぐに使徒達を訪ね、長老の頭であるヤコブを尋ねた、ヤコブは逾越節の時は終日神殿に居たであらう。さて彼等の間に何事が語られたかも不明である。また彼が集會に出席して自分の成功談を試みたか、逾越節の間滯在したのか、誓願におつきもの、犧牲を捧げたか、何も解らない。彼は使徒達に挨拶をして、直ぐ都を去らなければならぬ何事かを聞いたと思はれる。歡迎はあまり花々しくなかつたらしい、そして彼の聞いたことは、また例のパリサイ・クリスチャンが、彼が外國の各所に建てゝ歩いた敎會を歷訪して、バウロの敎はうそだ、外國人はユダヤ人の章を受けユダヤの宗敎律法を守らなければ信者とは言

へないのだとふれ廻つた事であらう。くすぶつてゐた火が、また燃え出したのである。

この度バウロがエルサレムで見たことは、イエスの自由の福音は、如何なることがあつてもユダヤの宗敎律法で縛らるべきものではない、反對の意見を持つ者共を追跡して潰走させなければならぬと言ふことであつた。彼等パリサイ主義のクリスチャン等は、ヤコブの手紙にあつた約束を破り棄てゝバウロ及び凡ての外國人信徒に對して戰を宣言したのである。かうなつては死ぬか生きるかの爭鬪である、而も彼等は一年先に出掛けたではないか。

バウロは再び急いで、亂るゝ胸を抑へつゝ、青年時代憧憬の都エルサレムを後にした、都は遠い地から望むとは全で變つてゐた。彼は先づ自分の敎で敎會の出來たアンテオケに向つた、僞クリスチャン等は、先づ此市に來て、出來ることなら、バウロ、バルナバ、シラス、ペテロ等の築き上げた敎會を倒さんと試みたのである。

バウロは急いでゐた、海には馴れてゐるので、直ぐカイザリヤに行つたのも確であらう、こゝで彼は防波堤の彼方の波を打眺め便船を待遠しく思つてゐたであらう。舟が泊つて海が靜ならば一週間でセルーシャまで渡れるのである。舟の往來の繁き頃であつたから間もなく北航の船を見つけたであらう。そこでまた波にゆらるゝ船に乘つた、船首には例の如く白い眼玉がある、バレスチナの海岸に沿うて上ると、ツロやシドンの町々の空は烟棚引き、シリヤの岸を過ると遙にヘルモン山が雪を頂いて

ゐる。遂にオロンテス河口にかゝり砂洲を越えて碎くる波を分けて、セルーシャの港に入る。こゝから一日路の騎乘、綠こき森の峽谷を攀ぢ上つて、いつもの如く茶の外套に身を包んだパウロは驢馬を早めて、かの拱門橋を渡り、並樹陰する敷石道、大理石柱の間をアンテオケの街へと歸着いたのである。

一五四　自由か、束縛か

アンテオケ・五十歳から六十歳

パウロは再び基督教徒が最多くゐて、强大で、自由である市に歸つた。三年前彼はシラヌと共にシリヤ及アジヤの教會を訪ぬべく出かけたのだが、旅路は豫定以上に延びて、今や一人で歸つて來たのである。信徒達は集會所に集つて彼の報告を聞いたであらう。今日の我々ですら興味を以て讀む傳道旅行の話を、パウロ自身の熱する唇から始めて聞いた人々の感興は如何ばかりであつたらうか。彼は自分の訪ねた市町、登つた山々、横切つた海、泥棒、ユダヤ人、暴動者、野獸から受けた危險等話は盡きなかつた。難船に合つたり生死の間を通つたことは、今記錄に殘つてゐる位のことではなかつたであらう。然しそんな事は、トロイ、アテネ、エペソを訪ねた話、ピリピ、テサロニケ、ベレヤ、コリント、ケンクリヤで教會を建てた成功談に較べれば何でもなかつた。アクラとプリスキラの織職夫

婦、リストラのテモテ、コリントのクリスポ、アテネのデイオニシヤス、ピリピのルデヤ、ケンクリヤのフイベ、テサロニケのヤソン、醫者ルカ、ローマ人ガリオ其他の人々の話も出た。アンテオケ教會の人々は、自分達が送つた一人の人によつて、かくまで遠く福音の宣傳されたことを大いに喜んだ。

然し教會の方でも良いことをパウロに報らせることが出來た。會員は漸次增加してパウロの例にならつて、諸方に宣傳者を送出した。教會の人々もエルサレムの僞クリスチヤン共が、アンテオケに來て、また去つてしまつたが、パウロの働の後を暴して歩いてゐると云ふことを聞いてゐた。然しパウロが、彼等が僞言を弄してパウロと福音に泥を塗り、パウロの働を脅威しつゝある大なる危險と罪惡について充分知ることを得たのは、ガラテヤから來た人、或はテモテであつたか、に逢うた後のことであつた。彼等僞せユダヤ人クリスチヤン等の目的は、信者等をユダヤ的クリスチヤンにしなければ又た元の偶像禮拜者にしやうと云ふのであつた。イエスがパリサイ人に就て言つたことは、彼等に對しても眞理であつた、

「パリサイ人よ、汝らは一人の改宗者を得んために海陸を經めぐり、既に得れば、之を己に倍したる地獄の子となすなり。」

海山を越えてパウロの跡をつけ廻り、各地に神の光を初めて齎した彼の働を吹飛ばし、其名に泥塗らんとする彼等僞信徒の卑劣な狂氣じみた惡意こそ、初代基督教史の最汚い頁である。パウロが之に

對して峻烈な態度を執り、嘲罵の言を用ひるのを見る時、吾人は彼等のしてゐた事を記憶しなければならぬ。先にパウロとシラスがガラテヤの教會を廻つて、正直にヤコブの妥協の手紙を讀んで聞かせた時、二人は直ぐ後から其、約束を反古にして歩く敵の隨いて來て居らうとは夢にも知らなかつた。嗚呼、イエスの名を籍りて、同じクリスチヤン同志が、一方は割禮、他方は非割禮の旗章の下に相敵對して刃を交ゆるに至つた事の速さよ。而も今日と雖も、傳道戰場に於ける天主教會と新教々會との爭は如何。

尤もエルサレムのユダヤ人クリスチヤンの中にも、こんな間違つた極端な者ばかりは無かつた、同じ割禮を受け、律法に從ふことを主張しても、マルコやユストのやうな善良な人々も有つた。パウロシラス、ペテロ、バルナバは彼等に反對し、ヤコブは兩者の中庸を取つたのである。パウロは自由と光明とに達せんとし、彼等はユダヤ教の垣を、外の世界に對して飽迄固守せんとするのであつた。是と同樣の議論は基督教が世界に擴まるにつれて幾度も反覆された。そして、いづれは倒れてしまふべき垣根である規則、儀式、標準、試驗など云ふものを主張する人が絶えない。

アンテオケで友人達と相談したパウロは、僞信徒の抗擊に對して眞の基督教を防禦する爲には烈しい行動に出でなければならぬと見極めた。彼等がヤコブの生半熟な妥協案を破棄した以上は、パウロの方でも自分やペテロ、バルナバが三年前にエルサレムで主張した立場に返つて、基督信徒となるに

割禮を受けたり、ユダヤの宗教律法を守つたりすることは全然無用だと說かなければならぬ。

彼等誤られたユダヤ人等はガラテヤの信徒達に、パウロのことを何と言つてゐたか。パウロが割禮の不用を云ふのは僞である、彼は自らテモテに割禮を授けたのである。基督教は由來ユダヤの宗教である。故にユダヤの宗教律法を守らない外國人は教會員となることは出來ない。パウロが讀んだ筈のヤコブの手紙にも有つた通り、パウロは絞殺されたものゝ肉、血の交つてをる肉、或は偶像に捧げた肉は食はないと云ふユダヤの律法に隨ふことを約束したのである。イエスと雖も割禮を受け、律法の子であつた。一體パウロは何物であるか、使徒達が基督教を守つてゐた時、パウロはユダヤ教の教法師であつて、到る處で基督信徒を迫害し、信徒をしてイエスの名を呪はしむるに至つたのである。使徒と云へばイエスと偕に生活した人々に限つてをる。イエスに逢ひもせず話もしなかつたパウロは使徒ではない。パウロが基督教に就て知つてをるのは皆エルサレムで使徒達について學んだことに過ぎない。パウロは使徒から遣はされた者でもない。そして使徒達の是認しないことまでも教ゆる能も權利も持つてゐない。パウロは容貌から云つても極く平凡で、演說は下手と來てゐるから傾聽する價値は無い。

かう云ふ半分本統で半分僞の話は、判斷するに面倒臭いものである。蜘蛛のやうなパリサイ・クリスチヤン等が張つて歩いたクモの巢は此樣なものであつた。彼等はパウロに導かれた信徒達の家に食客

となつてユダヤ式基督教を敎へ、エルサレムの免狀を示して、大なる印象を與へたのである。彼等から云へば、パウロ式基督敎から人々を救ひ出して會堂に引戻すのであるから立派な仕事だと考へてゐたのかも知れない。

パウロは彼等の僞の言葉の爲に言ひ難き悲を覺えた。エルサレムやアンテオケで彼等と鬪つたが、また是から後を追ふて鬪はねばならぬのである。基督敎の將來は此一戰に懸つてゐる、もうエルサレムになど訴へに行く必要はない。基督敎を自由にするには、パウロ自ら先づ獨立獨歩でなければならぬ。

一五五　愚なるガラテヤ人

アンテオケ・五十歳から六十歳

彼等パリサイ・クリスチャン等はペテロなどと違つて相對して議論を鬪はす程の價値は無かつた。全く惡いのである、後を追うて、その言ひ置いたことの眞相を摘發し、其行爲を抗擊する丈で澤山である。彼等はイエスを背景に押しやつて、ユダヤの律法を前に立てんとする者である。然るにパウロの考ではイエスは全であつた、人々はパウロの敎ゆるのが基督敎で、その敵の宣ぶるところはユダヤ敎であることを知らなければならぬ。パウロは自分は二十年前に其問題を解決したのである。イエスか、

然らざればユダヤ律法。自由か、束縛か、その間に中間の道は無い。今後パウロは、ユダヤ敎を見ること恰もユダヤの律法も慣例も少しも知らない外國人、ギリシヤ人、ローマ人のやうにするであらう。

二十年前がパウロの生涯の轉期であつた。今や基督敎の轉期が來たのである。基督敎はユダヤ的であるべきか、世界的であるべきか。パウロは明晰な、上より光をうけた頭を以て所信を書下した、今日英米で信じられてゐる基督敎は、パウロが見た、パウロがガラテヤの敎會に送つた貴い手紙に說明してをるキリストを敎ゆるものである。彼はガラテヤに行ける日が不明なので行く迄の準備に敎會で讀ますべく、一つの宣言を書送つたのである。

多くは彼がガラテヤの敎會員と面談する時に讓つて、こゝではたゞ此大書簡の事務上の梗概を記すに止めやう。聖書について手紙そのものを一讀せられたい。先づ彼は議論しないで、强い言葉を用ひてをる、强烈な、皮肉な言を用ひて、それから優しい言に變つてゆく、そして昔の敎法師口調を出して訴へてゐる。敵の抗擊はパウロ丈けにされたのだから、パウロも自己防衛の爲に他人の力は藉りない。敵は、パウロは使徒でない、敎を宣る爲に遣はされたものでないと言ふ、そこで彼は最初の文から之に答へてをる、

「人よりでなく、人に由るのでなく、イエス・キリスト及び之を死人の中から甦らせ給うた父なる神に由りて使徒となれるパウロ、及び我と偕にある凡ての兄弟、書をガラテヤの諸敎會に贈る。」

パウロはガラテヤの信徒達があまり速に他の教に誘惑されたのを見て驚いた。パウロは自分の福音でなく、イエス・キリストの福音を宣べた筈ではなかつたか。此手紙中に、パウロがどうして基督教の教師になるに至つたかと云ふこと、また割禮と律法に關してはペテロや其他の使徒達と議論して、此二つは不必要だと言ふことは彼等も承知したことが書いてある。パウロの教へたイエスの靈的教訓を棄てゝ生氣のない法律的なパリサイ・クリスチャンの教に變るとは、ガラテヤの信者は案外愚である。ユダヤの律法に從ふことではない、イエスを信ずるのが基督教である。イエスに由りて自由を得た者が、今更ユダヤ律法の束縛に繫がれんとするは何事であるか。基督信徒の馳場を馳せつゝあつた彼等が、今に至つて列外に出るとは何故であるか。

此手紙は話のやうに出來てゐる。多分若き友テモテに口授して書かせたものであらう。場所は平たい屋根から後庭の方に突出た葉廣の葡萄棚の下、風いと涼しい處であつたらう。頃は初夏、青葡萄が綠の枝にかゝつてゐた。例の如く再讀訂正して淸書し、葦のペンでパウロの自署を加へた。側の友達が見て居ると、パウロの文字書くのは仲々際がとれた。彼は大きな字でかう書いた。

「視よ、われ手づから如何に大なる文字で諸君に書き贈るかを。凡そ肉において美しき外觀をなさんと欲する者は、諸君に割禮を强ひる。これ唯キリストの十字架の故によりて責められない爲である。そは割禮を受ける者すら自ら律法を守らず、而も諸君に割禮を受けしめんと欲するは、諸君の肉につ

きて誇らんが爲である。されど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。之によりて世俗は我に對して十字架につけられた。我が世俗に對するも亦然り。それ割禮を受くるも受けぬも、共に數ふるに足らず、たゞ貴きは新に造らるゝ事である。此法に循ひて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、平安と憐憫とあれ。今より後、誰も我を煩はすな。我はイエスの印を身に佩びてをる。兄弟よ、願くは我らの主イエス・キリストの恩惠、諸君の靈とともに在らんことを。」

斯樣にして彼は明確と基督教のユダヤ教に對する立場を明にした。此二つは同じ者が發達したのではない。ユダヤ主義基督教はイエスをユダヤの救世主とし、彼を信ずる者は凡て割禮を受けユダヤの宗教法律に隨はなくてはならぬと主張し、イエスもその信者も皆ユダヤ教會の大團體に抱括し、律法規則、傳說を主要なものとして守らうとするのであつた。然るにパウロは之に對して「否、イエスは汝等の規則を否定し給うた、そして汝等は彼を十字架につけたのである。ユダヤ律法に從順なよりも更に良い方法が他にある。卽ちイエスを信じて彼に隨ふの道である」と答へた。これ救主對制度、實例對論說、活ける生命對死せる規則の問題である。神の活ける模範が勝を占むべく、人の規則は道を退かなければならぬ。是を明白にする爲にパウロは流の方向を轉換して、愈ますゝ擴がつて止まぬ河床へと奔流させたのである。

一五六　最初の綱を絶ちて

アンテオケ・五十歳から六十歳

使者は此手紙をもつてガラテヤの教會に急いだ。手紙を讀んだ教會の人々は、パウロ自身もやがて來ると開いて驚いた。然しパウロは先づ自分を歡迎してくれたエペソに向ふことにした、そして此度は僞信者の足跡を追うて各教會を訪問しなければならぬので、陸路をとることにした。時は初夏だから塵埃立つ道路は、旅人、商人、軍人、さては奴隷を數珠つなぎにした團體などで賑かだつた。野外はまだ綠であつた、クリーム色や紅色の花は枯れてゐたが、岩涯に蔭された流の邊には金盞花は金色の花盤をうなづかせ、水仙は白い羽をひろげてゐた。

暫くアンテオケに滯在してゐたパウロは、旅行期節も終近いのを見て、早速出發せねばならぬと思つた。アンテオケの兄弟達は、僅の滯在でパウロの去るのを名殘惜しく思つたであらう、殊に彼の行方は五百哩の彼方アジヤの都まで野越え山越え寂しい危い途を進まなければならぬのである。多分夜送別會を開いて彼と其伴侶の爲に祈つたであらう、そしてテモテが伴をしたと思はれる。此時彼等は、是限りパウロに遭ふことの出來ないことは知らなかつたのである。此茶色外套のユダヤ人は再びこゝに歸らなかつた。最後に彼は、うなだれる會堂の會衆とは違つて、自分の顏を見つめて居る男女の信

徒に向つて、何を談つたであらうか。彼はその書簡に書いた通のことを言つたに相違ない。次に採錄するはパウロの書簡中、イエスのカペナウムに於ける言を引いて、僞ユダヤ・クリスチヤンが何と言はうと食物が人を善人にしたり惡人にしたりするものでないことを教へた一節である。

「諸君、信仰の弱き者を容れよ、その思ふところを詰るな。或人は凡ての物を食ふを可しと信じ、弱き人はたゞ野菜を食ふ。食ふ者は食はぬ者を蔑してはならぬ。食はぬ者は食ふ者を審いてはならぬ。神は彼を容れ給ふのである。君は如何なる者なれば、他人の僕を審くか、彼が立つも倒れるも其主人に由る。彼は必ず立てられるであらう。主は能く之を立たせ給ふであらう。或人は此日を彼日に勝ると思ひ、或人は凡ての日を等しと思ふ、各人おのが心の中に確く定めよ。日を重んずる者は主のために之を重んず。食ふ者は主のために食ふ、これ神に感謝するからである。食はぬ者も主のために食はず、かつ神に感謝するのである。我等のうち己のために生ける者なく、己のために死ぬる者はない。われら生くるも主のために生き、死ぬるも主のために死ぬ。然れば生くるも死ぬるも我らは主の有である。それキリストが死にて復た生き給うたのは、死にたる者と生ける者との主とならん爲である。君は何故に兄弟を審くか、君は何故に兄弟を蔑するか、我等はみな神の審判の座の前に立つのである。『主いひ給ふ、我は生くるなり、凡ての膝は、わが前に屈み、凡ての舌は、神を讃稱へん』と錄してある。我等おの〳〵神のまへに己の事を陳ぶるのである。

「されば今より後、われら互に審いてはならぬ。寧ろ兄弟の前に妨碍または躓物を置かぬやうに心を決めよ。われは如何なる物も自ら潔からぬ事なきを主イエスに在りて知り、かつ確く信ずる。たゞ潔からずと思ふ人にのみ潔くないのである。もし食物によりて兄弟を憂へさせたならば、君は愛により て歩まないのである。キリストが代つて死に給うた人を君の食物によりて亡すな。諸君の善きことの譏られぬやうに爲よ。それ神の國は飲食ではない、義と平和と聖靈によれる歡喜とに在るのである。斯くしてキリストに事ふる者は神に悅ばれ、人々に善しと爲らるゝのである。

「されば我ら平和のことゝ互に德を建つる事とを追求めやう。君よ、食物のために神の御業を毀つな。凡ての物は潔い、然し之を食ふて人を躓かせる者には惡となるであらう。肉を食はず、葡萄酒を飲まず、その他なんぢの兄弟を躓かせる事をせぬは善い。君の有てる信仰を己れみづから神の前に保て。善しとする所につきて自ら咎なき者は幸福である。疑ひながら食ふ者は罪せられる。これ信仰によらぬ故である、凡て信仰によらぬ事は罪である。」

バウロの頭に手において、アンテオケの兄弟等は其旅路を祝福し、其夜はそれで散會して、翌朝未明に途中まで見送つたことであらう。彼等は富祐であつたからバウロ等の爲に充分の旅用を整へ、乘る驢馬は良種を選び、旅衣、皮革鞋も上等な強いのを、袋の中には更衣を、革袋の中には葡萄酒や食油、それから干した五穀、麥粉、果物に至るまで持たせたであらう。本の卷物は毛織の布で包み、バ

ウロの手になつた天幕及用具をも携帶させたであらう。市の北門を出るとき驢馬はかなりの重荷を負はされてゐたわけである。信徒達は彼等を取卷き、中には泣いてゐる者もあり、最後の別れに皆抱き合うたであらう。茶色の外套に包まれた勇敢な姿に信徒達は眼を放たず、道が曲つて見えずなるまで見送つた。是がバウロの見納めであつた。彼の姿が消えると共に、彼の生涯を編み成せる緣の糸目が一本斷切られたのである。

一五七　黑い山を越えて

アンテオケ・五十歲から六十歲

バウロは手綱を手にして驢馬の頭近く歩きながら、眉深に被つた頭巾越しに黃色いアンテオケの平野から背景の青い山々まで遠望した。彼は三度目に、キリキヤの峽谷を通つてデルベに向はんとするのである。こゝにバウロの悲壯なる生涯に立入るのである。思ふに諸方を訪ねて最後の別をして歩くのは何人にとつても悲しい旅である。バウロは久しくシリヤ、ガラテヤ、アジアに働いて、事業を繼ぐべき人々を起した、今一度各敎會を訪問して、立派な麥畑に、敵の播いて歩いた烏麥を引除いて置かうとするのであつた。其上に彼は一歩向ふを見てゐた。世界の首府ローマが彼を引きつゝあつた、ローマの幼覺は彼の眼前にちらついてゐた。

未明にパウロは市の拱門をぬけて駱駝、馬、驢馬の群が重荷を運んで行く間をローマ街道に沿うて旅に立つた。此道はシラスと三年前に通つた處だからよく覺えてゐた。狹いオロンテ橋、青い湖水と次々に過ぎて、シリヤの田舍をだん〳〵上りに國境に進み、アマナス山脈中唯一の途を通つて、タルソ後方のタウラス山脈の側に出た、夕には山々が入日で紅に燃立つた。キリキヤの平野、熟知の町々を過ぎて約一週日の後、少年時代によく遊んだ石橋を驢馬の蹄の音高く渡るともうタルソである。

パウロ等は暫く此市で休息したであらう、まだ少年時代の友も居て、パウロがイエスを愛するの餘り、家を外に益廣く歩き廻つて、滅多に歸らない偶の歸鄕を喜び迎へたことであらう。見なれた樹々、家々、花園、霧にかくるゝ山々の間に溶くる雪に源を發する輝ける河、さては彼が初めて禮拜した會堂、讀書を習うた學校、生れた家も舊のまゝである。パウロは暗い小ちな會堂に行つたであらう。こゝは熱心な少年パウロが老教法師に經牌を腕に結んで貰うた處である、然し今紫の幔の前に立つは變つた教法師である。彼がこゝで說いたのは用語こそ多少違へ、その思想は彼の手紙の一節に現れた如きものであつたらう。

「我らは知る、我らの幕屋なる肉の家壞るれば、神の賜ふ建物すなはち天にある、手にて造らぬ永遠の家あることを。我等はこの幕屋にありて歎き、天より賜ふ住所をこの上に着んことを切に望む、之を着るときは裸であることはないであらう。我等この幕屋にありて重荷を負へる如くに離くゝ之を脫

がんとするのではない。此の上に着んことを欲するからである。これ死ぬべき者が生命に呑まれん爲である。我らを此事に適ふ者となし、その證として御靈を賜うた者は神である。この故に我らは常に心强い。此肉體に居るうちは主より離れて居るのであるか、然し我らは見ゆる所によらず、信仰により て歩むのだから心强い。願ふところは寧ろ肉體を離れて主と偕に居ることである。されば身に居るも身を離るゝも、たゞ御心に適はんことを力めるのである。我等はみな必ずキリストの審判の座の前にあらはれ、善にもあれ、惡にもあれ、各人その身になしたる事に隨ひて報を受けるのである。」

また誇とする市の友達に別れを告げて子供の時に踏んだ河沿ひの道を上つて行くと、こゝにまたパウロの生涯を編む緣の糸が一本切れたのである。彼は再びタルソに來ないのである。愈山道にさしかゝる、こゝは少年パウロが父の驢馬をかつて歩いた途である。今年老いたるパウロは一生の名殘に、迂曲せる河と白壁の市とを振返り眺めた。これより彼の足は遠い道を遠い市街を歩くけれども、タルソは二度と歩かないのである、然しパウロ自身も其を知らぬのだから踵をめぐらして市に背を向けた時も、心は强かつた。

躓き辷り、あえぎながら急流の上の狹い途を上り、恐しいキリキヤの國境の暗い谷を過ぎ、キリキヤとカパドキヤの境を越えた。盛夏の暑熱は燒くが如く、日中數時間は休憩するより他はなかつた。心を取直して埃の隊商道を平野に降り、更にアンテオカスの國境をよぎり、ガラテヤの國に入ると、

數時間にして、友の多いデルベに着くのであつた。バウロとシラスがヤコブの手紙を讀んできかせてから三年、バウロの手紙が來てから僅二三ヶ月、でもうバウロ自身がやつて來たのである。議論も討論も無かつたのを見ると僞信者達は居なかつたと見える。教會の人々は、茶色の外套を着て、信仰の安定を與へるべく遙々來てくれたバウロに逢うて歡んだであらう。

一五八　我は驚かされた

デルベ・五十歳から六十歳

デルベの人々は前から好意を示したのであるから、バウロは、エルサレムから來た僞クリスチヤンの云ふことは僞で、バウロの教へて置いたのが本統のイエスの福音だと云ふことを了解させるのに左程手間はかゝらなかつたであらう。彼は手紙に書いた點を更に敷衍したであらう。こゝに手紙の一部を採錄する。信者のうちユダヤ人は極く少數であつたらうから、皆外國流の派手な衣をきて座についた男女が、頭巾をかぶり、眼を輝かして、莊重、熱烈な口調で、同じユダヤ人である僞信者の抗擊と聞違に對して、自己並に教の爲に辯護するバウロに耳を傾けた光景は想像しても見ゆるやうだ。

「我は諸君が斯くも速にキリストが恩惠をもて召し給うた者より離れて異る福音に移りゆくのに驚かされた。此は福音と云ふべき者ではない。たゞ或人々が諸君を擾してキリストの福音を變へんとする

のである。我等でも天の使でも、我らが曾て宣傳へたる所に背きたる福音を諸君に宣傳へる者あらば詛はれる。重ねて云ふ、諸君の受けたところに背きたる福音を宣傳ふる者は詛はれる。我れいま人に喜ばれんとするか、或は神に喜ばれんとするか、抑もまた人を喜ばせんことを求むるか、もし我なほ人を喜ばせてをるならば、キリストの僕ではない。

「兄弟よ、われは諸君に示したい。わが傳へた福音は、人に由れるものではない、我は人から之を受けずまた教へられず、唯イエス・キリストの默示に由つたのである。我がユダヤ教徒であつた時の擧動は、諸君既に聞いた。卽ち烈しく神の教會を責め、かつ暴したのである。又わが國人のうち、我と同じ年輩なる多くの者にも勝りてユダヤ教に進み、わが先祖たちの言傳に對して甚だ熱心であつた。然し母の胎から出てより我を選び別ち、その恩惠を以て召し給へる者、御子を我が內に顯はして其福音を異邦人に宣傳へしむるを可しとし給うた時われ直ちに血肉と謀らず、我より前に使徒となつた人々に逢はうとてエルサレムに上ることもせず、アラビヤに出で往きて遂にまたダマスコに返つたのである。

「その後三年を歷てケパ（ペテロ）を尋ねんとエルサレムに上り、十五日の間かれと共に留つたが、主の兄弟ヤコブのほか孰の使徒にも逢はなかつた。その後シリヤ、キリキヤの地方に往つた。キリストにあるユダヤの諸教會は我が顏を知らなかつたが、たゞ人々が『われらを前に責めし者、曾て暴したる信仰の道を今は傳ふ』といふのを聞いて、わが事によりて神を崇めた。

「その後十四年を歴てバルナバと共に、テトスをも連れて、復たエルサレムに上つた。我が立つたのは默示によつてゞある。かくて異邦人の中に宣ぶる福音を彼等に告げ、また名ある者どもに私かに告げた、これは我が走ること、又すでに走つたことの空しからざらん爲である。而して我と偕にゐたギリシヤ人テトスすら割禮を强ひられなかつた。これ私かに入つた僞兄弟あるに因つてゞある。彼らの忍入つたのは、我らがキリスト・イエスにありて有てる自由を窺ひ、且つわれらを奴隷とする爲である。然し福音の眞理が諸君の中に留らん爲に、我らは一時も彼らに讓り從はなかつたのである。

「然るに、かの名ある者どもから——彼らは如何なる人にもせよ、我には關係はない、神は人の外面を取り給はない——實にかの名ある者どもは、我に何をも加へず、反つてペテロが割禮ある者に對する福音を委ねられたる如く、我が割禮なき者に對する福音を委ねられたるを認め、また我に賜りたる恩惠をさとりて、柱と思はるゝヤコブ、ケバ、ヨハネは、交誼の印として我とバルナバとに握手したこれは我等が異邦人にゆき、彼らが割禮ある者に往かん爲である。唯その願ふところは我らが貧しき者を顧みんことである、我も固より此事を勵みて行うた。ペテロに能力を與へて割禮ある者の使徒となし給うた神は、我にも異邦人の爲に能力を與へ給うたのである。

「然るにケバがアンテオケに來た時、責むべきことが有つたので、面前これと諍うた。その故は、或る人々がヤコブの處から來るまでは、かれ異邦人と共に食つてゐたのに、かの人々が來てからは割禮

ある者どもを恐れ退きて異邦人と別れたのである。他のユダヤ人も彼と共に僞行をなし、バルナバまでもその僞行に誘はれてしまつた。我はかれらが福音の眞理に循ひて正しく歩まないのを見て、會衆の前でケバに言ふ、『君はユダヤ人であつてユダヤ人の如くせず、異邦人の如く生活せば、何ぞ强ひて異邦人をユダヤ人の如くならしめんとするか。』我らは生來のユダヤ人であつて罪人なる異邦人ではないが、人が義とせられるのは律法の行爲に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信仰に由るを知りてキリストイエスを信じたのである。律法の行爲に由らず、キリストを信ずる信仰によりて義とせられん爲である。」

一五九　イエスの言

デルベ・五十歳から六十歳

デルベの信徒達は、パウロは前に先程逃げて行つたばかりのユダヤ・クリスチャン等と論爭して、外國人クリスチャンの爲に勝を占めたのだと聞いて、初に彼に敎へられたところに固く立つ心を起したであらう。そこでパウロは哀なエルサレムの敎會員の爲に毎安息日義捐金を集めるやうに命じて置いて別を告げ、急いで敵の後を追うた。

デルベを出たパウロ等は鹽分を含んだ沼澤の水無き間を縫ふ道を進み丘陵を越えてテモテの故鄕ル

ステラに行つた。夜は羊飼の天幕や壁を塗つた小屋に宿を求め、牛乳と粗粉製の堅パンに飢を凌ぎつゝ行つたのである。人々は彼を待つてゐた、パウロは信徒達に遭ふや敵の僞を摘發して自分の送つた手紙の一節を説明した、次は其一節である。

「愚なる哉ガラテヤ人よ、十字架につけられ給うたまゝなるイエス・キリストを眼前に顯はされて居りながら、諸君は誰に誑かされたのか。我は諸君に唯此一問を發する、諸君が御靈を受けたのは律法の行爲によるか、聽きて信じたるに由るか。諸君は斯くも愚であるか、御靈によりて始つたものが、今肉によりて全うせられるか。かほどまで多くの苦難を受けたことは徒然であるか、徒然ではあるまい。さらば諸君に御靈を賜ひて諸君の中に能力ある業を行ひ給うたのは、律法の行爲に由るか『アブラハム神を信じ、その信仰を義とせられたり』と錄してある通りだ。……凡て律法の行爲による者は詛の下にある。錄して『律法の書に記されたる凡ての事を常に行はぬ者はみな詛はるべし』とあるではないか。キリストは我等の爲に詛はれたる者となつて律法の詛から我らを贖ひ出し給うたのである。錄して『木に懸けらるゝ者は凡て詛はるべし』と云つてある。これアブラハムの受けた祝福が、イエスキリストによりて異邦人におよび、且つわれらが信仰に由りて約束の御靈を受けん爲である。

「信仰の出で來らぬ前はわれら律法の下に守られて、後に顯れんとする信仰の時まで閉ぢ籠められた。信仰によりて義とせられん爲に、律法は我らをキリストに導く守役となつた。されど信仰が出て來た

後は、我等もはや守役の下に居らない、諸君は信仰によりキリスト・イエスに在りてみな神の子である。凡そバプテスマに由りてキリストに合うた諸君は、キリストを衣たのである。今はユダヤ人もギリシヤ人も無く、奴隷も自主もなく、男も女もない、諸君は皆キリスト・イエスに在りて一體である。諸君もしキリストのものならば、アブラハムの裔であつて約束に循へる世嗣である。

「時滿るに及びて、神その御子を遣し、これを女より生れしめ律法の下に生れしめ給うた。これ律法の下にある者をあがなひ、我等をして子たることを得しめん爲である。かく諸君は神の子たる故に、神は御子の御靈を我らの心に遣して『アバ、父』と呼ばせ給ふ。されば諸君は最早や僕ではない、子である。既に子たらば亦神に由りて世嗣である。諸君は神を知らなかつた時は、その實は神にあらざる神々に事へた。今は神を知り寧ろ神に知られたのに、何ぞ復たかの弱くして賤しき小學に還りて、再びその僕たらんとするか。諸君は日と月と季節と年とを守る。我は諸君の爲に働いた事が、或は無益になるかと恐れてをる。」

パウロ等は各市に行つては、教會の信仰を再び確立させたと信ずる迄は滯在つたであらう。尤もルステラではテモテの家があるので稍長く留つたかも知れない。そしてこゝでパウロはテモテの母と祖母に逢うた。此二人はパウロがテモテに、こんな良い人達に育てられた者は幸福であると讃辭を送つたほど聖書に精しい人達であつた。

ルステラを朝早く、太陽に當つて霞となるべき露しげく地に敷ける頃立出でてパウロ等は、山を越え野を過つてイコニアムに向つた。イコニアムは花園や果樹園に圍まれて美しかつた。林檎、橄欖、櫻果、オレンヂなど青葉の間に鈴と鳴つてゐた。市の低い門をくゞつても今度は亂暴をされる怖も無かつた。街や會堂で話すのではない、たゞ基督信徒にのみ話すつもりであつたからである。教會を強めに來たパウロ等は會員の熱心な歡迎をうけた、一同はパウロの驚くべき而も不思議な手紙の說明を聞かうと待構へてゐた。この邊までも來て惡いことをして行つたパリサイ主義クリスチャン等を非難しながら、如何なる話をしたか記されてない。然し次に錄するガラテヤ書の一部は、蓋しパウロが、戸を閉ざしてうす暗いランプの光の下に集つた人々に說明したと思はれる處である。

「視よ。我パウロ諸君に言ふ、もし割禮を受けば、キリストは諸君に益が無い。又さらに凡て割禮を受ける人に證す、其人は律法の全體を行ふべき義務がある、律法によりて義とせられんと思ふ諸君はキリストから離れたのである、恩惠から墮ちたのである。我らは御靈により、信仰によりて希望をいだき、義とせらるゝことを待つのである。キリスト・イエスに在りては割禮を受くるも割禮を受けぬも益なく、たゞ愛に由りて働く信仰のみ益がある。諸君前には善く走つたのに誰が諸君の眞理に從ふを阻んだか、そのやうな勸は諸君を召し給ふ者から出るのではない、少しのパン種は粉の團塊をみな膨れさす、われは諸君が、聊かも異念を懷かぬことを主によりて信ずる。されど諸君を擾す者は、

誰であらうと審判を受けるであらう。兄弟よ、我もし今も割禮を宣傳へば、何ぞなほ迫害せられやうか。もしさうしたら十字架の顚躓も止んだであらう。願くは諸君を亂す者どもが自己を不具にせんことを。」

此節に於てパウロはイエスが、ペテロの舟でガリラヤ海を渡つたとき、パリサイ人のパン種卽ち惡い教を聽くと忽ち全體が惡くなることを弟子達に警告した言を引いてゐる。

一六〇　危き途

イコニアム・五十歳から六十歳

パウロがイコニアムの教會にイエスの生命と死して甦りの榮ある福音を說明した時に、抗論すべく、パリサイ主義のユダヤ人等は留つてゐなかつた。でパウロは幾日も經たないうちに敵の働を打破して信徒達はユダヤ律法と規則の奴隷たることを止め、信仰の自由を選んだのである。

パウロは再び市の低い拱門をくゞつて驢馬を進めた。果樹園美しく、葡萄畑の葉は綠く凉しく、青い葡萄の房が下つてゐた。驢馬に乘つたり、野營したり、食事を用意したり、また不斷泥棒や野獸を警戒しながら、二三日行くと、石の敷かれたローマ街道に出る、と馬が驅けぬける、駱駝が長い列を作つて、のそ〳〵柔な蹠で歩いてゆく、かくて約一週間もすると、サルタン山脈の麓にあるピシデヤ

のアンテオケに來る。

彼が山上の此軍隊町を訪ねたのは是が四度目であつた。最初は五年前、病み衰へたパウロをバルナバが連れて來たのであつた。而して是が最後であつた、ガラテヤに於けるパウロの働きは立派に成就されたのである。パウロは此處で何を話したか、彼は書簡中にこゝの人々がパウロの病人で初めて來た時に親切であつたことを感謝してをるから、此時も其に就て言はずには居なかつたであらう、そして丈夫さうな信者達が、窓からさし入る白い日光を受けて廣い部屋に座つてゐる處で、矢張先に送つた手紙の趣旨を說いたであらう。

「兄弟よ、我諸君に請ふ、われ諸君の如く成つたのであるから、諸君も我がごとく成れ、諸君は何事にも我を害うたことはない。わが初め諸君に福音を傳へたのは、肉體の弱かつたためであることは諸君の知る通りだ。わが肉體に諸君の試錬となるものが有つたが、諸君之を卑しめず、又きらはず、反つて我を神の使の如く、キリスト・イエスの如く迎へた。諸君のその時の幸福はいま何處にあるか。我は諸君について證する、もし爲し得べくば己が目を抉りて我に與へんとまで思つたことを。然るに我諸君に眞を言ふによりて仇となつたのか。かの人々が諸君に熱心なのは善き心からではない、諸君を我らから離して己らに熱心ならしめやうとするのである。善き心から熱心に慕はれることは、啻に我が諸君と偕にをる時に限らず、何時でも宜しき事である。わが幼兒よ、諸君の裏にキリストの形成るまでは、我ふたゝび產の苦痛をする。今諸君に到りて、我が口調を易へんことを願ふ、諸君について惑ふからである。

「律法の下にあらんと願ふ者よ、諸君は律法を知つてをるか。……兄弟よ、われらは婢女の子ではない、自主の女の子である。キリストは自由を得させん爲に我らを釋き放ち給うた。されば堅く立ちて再び奴隸の軛に繫がれるな。」

パウロはガラテヤの町市を訪ね、他の處にも序に立寄つた。時は既に暑い盛夏であつた。そして海岸の熱病流行地から、健康地の山間目がけて逃出して來る人々が多かつた。パウロもペルガやアタリヤには降りて行かなかつた。此山地を旅するのは是が三度目で冬の雪の中、夏のめくらむ太陽の下を歩いたのであるが、今辭去すれば、もう歸ることも無く、復た緣の絲を一本切斷るのであつた。遠くのエペソの兄弟達が生命の水に渴いて待つてをる、パウロは前途を急がなければならなかつた。

ボタンの木には黃葉、樫や栗の木には小豆色の葉が風にサラ〳〵、傍を流るゝ河は暑い石の床、黃金色の蜥蜴は背を干し、青蛇は輪を卷いてゐた。白らほけた草葉がボツリ〳〵と山の頂に、黃色い小籤黑や白の岩間を塞いでゐた。馬の行く道は足を燒くやうだつた、此邊の山間では、冬は刺裂く寒さが長くつゞき、夏は白い石が燒けて、ごけつき目眩ますやうな暑氣であつた。

パウロは例の如く早朝友達に別れて、狹い街から廣々とした田舍に出た。初は二年前トロイに行つ

たとき通つたローマ街道をとつた、それから高地から下つて來る大隊商道を横切つた、其はうね〳〵したリボンの如く、湖水や町を通つて海岸線のエペソへ降るのであつた。がパウロ等は此道を行かなかつた。彼等は其代りに、アジヤの國の山地を貫く高く靜な近道をとつた。どうして賑な途を避けたのかは不明である。或はパウロがアジヤを通つて行く間、公然福音を宣べる自由を感じなかつたからかも知れない。

ピシデヤのアンテオケからエペソまでは、馬を驅つて十四日路であつた。一等高い山地は過ぎたので、裸山や森の谷間を上つたり下つたりして往くうち、漸次地が低くなつて海岸に降るのであつた。若し隊商とか駄賃持と道づれであつたら、日中は長く休んで、仲々途がはかどらなかつたであらう。

秋になつては夜露いとゞ重く、天幕の布を通してしたゝる程であつた。月明には、岩石が山腹に突出して鮮に黑い影を投げた。然しパウロ等は夜旅したり、天幕に寢たりしなかつた、此邊には洞穴や深い谷間に山賊共が住んでゐて、不用意な旅人を襲ふて、それで生活してゐたのである。パウロ等は毎夜村落に設けられた旅人宿にとまつた、空つぽではあるが、旅人の爲には心持よい所だつた。河まで行かなくとも水が得られて、壁で圍まれてゐたから狼や豹を追ふ爲の火を燃し通す必要は無かつた。金さへあれば卵、パン、ミルク、チースなども買ふことが出來た。盜賊や野獸の危險が、旅行者の大なる脅威であつた。毎日長い道を歩いて疲れきつた夕べ、旅人宿についたパウロ等は、よし粗末で埃

だらけであつても、どんなに其所が有難かつたかしれない。

一六一　世界の驚異

エペソ・五十歳から六十歳

途中には河も澤山あつて、お天氣の候ではあつたが、隨分渡るのが面倒であつたらう。橋と云ふものは滅多にかゝつてをらぬので旅人は驢馬で河渡りをしなければならぬ。時に危險も伴ふのである。此等の小流はメアンダー河の支流であつた、メアンダー河は深く水の早い濁つた大河で、山から町村森林、城砦を通つて二百哩も流れ、古い隊商道は幾哩か此河に沿うてゐた。メアンダー谷から、パウロと伴侶等は少し高い山路に上つた、そこは七十哩流れてエペソの側を、青海へと注込むケイスター河の水源地である。此ケイスターの大きな谷の盡きる處に、四十哩離れれエペソ、スミルナの兩市が在る、其頃最賑かだつた兩市間の道路は、今は鐵道になつてをる。

廣い谷を下つてゆくと樹間に赤い安石榴が見える。橄欖が實つてをる、赤土色のした切株の一ぱいにある畑の中に石造土造の小屋が散在してをる、此地方は飼羊者よりも百姓の方が多いと見える。岡の段々畑には赤や黃の着物をきた婦人達が葡萄畑の中に紫や青の房を忙し相に摘んでゐた、恰度食油や葡萄酒を造り、干葡萄、無花果、棗などを乾す時候であつた。

バウロ等は足下の靄の中に迂曲する銀河を遠望することが出來た、大都エペソに近づいた記である。重荷を負うた駱駝、驢馬、馬は列をなして暑い道をゾロ〳〵、港の船に積込むべき果實、油、五穀、酒などを運んでいつた。彼等を追ふ者は日に燒けた田舍人で、婦人達は、赤い頰べたをした子供を背にくゝりつけて、裸足にゆるい靴を穿き、黑髮の間に眞鍮の貨幣の繫いだのを飾つて、嘻々として其傍に隨いていつた。

山の端に立つとエペソ灣が日に輝ぐのが見えた。六ヶ月前バウロが其近くを航行したサモス島も見えた。數時間進んでも、まだ大都は遠く向ふに横はり、白い家々、船滿つる港が見えてゐる。殊に目立つはダイアナの世界の驚異たる神殿である、純白大理石の石垣に圓柱、輝く屋根！　バウロが馬を早めて、大きな市を望みながら下つて行くと、市の周圍の沃野十哩、河其間を迂り、靑海、靑山之を抱いてゐた。中央にはコレサス山があつた、此山は大理石の塊で、白い建物の石材を供給した。近景には內、外港の帆柱の林、遠景には四哩の間銀と流れて海に注ぐケイスター河が有つた。

市の石垣は周圍四哩、そこに石造の座席の列ある競走場が有つた。其殘骸は今も殘つてをる。市を横切つてプリオン山麓に人民の集會所があつた、其は巨大な劇場で五萬人の座席があつた、最高い席についた者に見えたり聞えたりしたらうかと疑はれる位である。エペソは最富祐な市であつたから、周圍の丘陵の森の中には大小の神社、貴族富豪の御殿、樓閣、其を取卷く公園、遊步場、流泉、池沼

花園美事であつた。

山と海の間に傲然たる都が横つてゐた。バウロは茶色の外套をきて、小村ナザレのイエスの名に於て此市を征服すべく乘込んだのである。これほどの數多き神殿を建立し、偶像を刻んだ人間の力も偉大であるが、神の力は更に偉大である。バウロは、どつしりしたスミルナ門をくゞつて、各國人の群がる敷石道の街を港近いユダヤ人町を求めて行つた、そこには戶口に葡萄蔓の下つてをる會堂が建つてゐた。バウロが杖を片手に、疲れた驢馬を引いて行つた時、市の人は、白髮の色の黑い、黑眼の、茶色の外套に、踵の切れた革鞋を穿いた、いくらか前屈になつたユダヤ人だとばかり見たであらう。そして、ずつと年代を歷ると、エペソの深い港は沈泥に埋められ、市街は平野に散亂し、巨大な神殿さへ消えて見えなくなるに反し、バウロが弱い紙に書いて、其市の或蔑視れたクリスチャン達に送つた手紙が、世界の寶となつて、市の大理石の彫刻よりは壽命永からうとは夢にも思はなかつた。

一六二　エジプトのユダヤ人アポロ

エペソ・五十歲から六十歲

織職アクラと其妻プリスキラはまだエペソに居た。そして夫婦でバウロに、アポロと云ふユダヤ人が來て、イエスのことに就て會堂で大雄辯を揮ひ、良い働をして往つたと云ふことを話した。ところ

で此人は、エルサレムから來たのでも、アンテオケから來たのでもなかつた。彼は、かの滿々たる大河ナイルの河口にあるアレキサンドリヤ市に生れた、立派な色淺黑い人であつた。アレキサンドリヤは大商業市で、ユダヤ人の住居する者數千、而も大部分は富祐な商人で、自分等の立派な神殿を建立した上に、毎年金貨をつめた重い袋を送つてエルサレムの神殿税を納めた。彼等は學問が有つて、子女教育の爲に大學小學を設立し、廣い見解を持つてゐてエルサレムにさへ自分達の會堂を持つてゐた。彼等はエルサレムのユダヤ人等に憎まれる一つの事を爲たが、其は神及聖書の知識を世界に擴める爲に、エルサレムの教法師等が行つた全てよりも猶偉大な功績を擧げた。ほかでもない今迄ヘブル語であつた聖書をギリシヤ語に譯したのである。此譯はイエスの生れる前三百年に成され、「七十人譯」と呼ばれてゐる。七十人の學者の共譯だからである。イエスは此ギリシヤ語聖書を讀んだ、バウロも讀んだ、また諸國の學者等はヘブル語は知らなくても、ギリシヤ語譯の此聖書を讀むことが出來たのである。

バウロに似て、アポロも教育のある、聖書に精通した雄辯家で、能力ある討論家であつた。彼はかのヨルダン河邊で、巡禮者等を呼び止め、メシヤ來を高唱し、人々の悔改めをすゝめてバプテスマを施したヨハネの事を聞知つてゐた。或は駱駝の毛衣を着、革の帶をした彼イエスの從兄に親み、其教を信じて弟子となつた者であるかも知れない。アポロにとつてイエスは、ヨハネ及聖書の豫言したメ

シヤであり救主であつた、而して其事を宣傳へずには居られなかつた。かくて此エジプトのユダヤ人は、外套を肩に掛け、太い杖をついて、其偉大なる胸に一ぱいのイエス・キリストの福音を宣傳すべく旅に出たのである、

アポロはイエスに會うたことも、使徒達と話したことも、バウロの演說を聞いたことも無かつたのだが、信者達から色々聞いて知つたのである。而して心忽ち火と燃えて、諸國の町市にあるユダヤ人に眞理を傳へんと欲したのである。バウロと同樣、アポロも船については精しかつた。彼の生れたアレキサンドリヤの船と云へば其大きさ、その船速力の速さ、世界に名高いもので、エジプトの優良な五穀を積んで諸國の河口に入り都邑に食物を供給したのである。アポロは傳道旅行の途中エジプトから海を距つる五百哩のエペソまでも來たのであつた。彼は會堂に入つてユダヤ人等に大膽にイエスのメシヤたることを證言し、ユダヤ人等は悔改めてヨハネの宣べた通り、バプテスマを受けねばならぬと說いた。ヨハネは或祭司の息子であつたので、イエスを好まない者でもヨハネは嫌はなかつた、そこでユダヤ人等はアポロの教を信じて、アポロは此會堂中の指導者となつた。

エペソで基督の教を傳へ且つ毛織物を拵らへてゐたアクラとプリスキラは、恰度コリントでバウロを見出したやうにアポロを見出し、而も此天才ある熱心な人物もまだイエスのことを充分に知らないと見た。夫婦はアポロに語をかけた、アポロは喜んで彼等の客となり、イエスと新しい道について更に

學ぶことを得た。夫婦の者はアポロに、ヨハネ流のバプテスマはイエスが來たのでもう時代後であるバプテスマはイエスの名を以てしなければならぬと教へた。かくて毎日々々學者にして雄辯家なるアポロは織職アクラ夫妻の仕事場でイエスの道を教へられた。そして再び會堂に立つて話した時には餘程パウロの教に近いものになつてゐて、多くの友も出來た。

アポロはコリントにパウロの建てた教會のあることを聞いてアクラの紹介狀を貰ひ、商船に便乘してコリントに渡り、信徒達の歡迎をうけた。彼は教會を大に助け强めた、そして會堂のユダヤ人に向つては公然、得意の大雄辯を揮つて抗擊の矢を放ち、聖書によつてイエスがキリストであることを證明して、彼等の反駁をたゝき伏せた。

こんな風で、パリサイ主義ユダヤ人等がエルサレムから出て各國の町市を歩き廻つてパウロの働を打破しにかゝつてゐた他方には、アフリカから一人の立派なユダヤ人が出て、まだ遭うたことは無いが然し其偉い働について聞いた人の爲に、雄辯に辯護して歩いてゐた。パウロがエペソに着いた時、其能力ある人物が、良い働をして市民を彼の爲に準備させてくれた事を知つたのである。アクラとプリスキラは信徒を相當集めてゐた。そしてユダヤ人等は相變らずパウロから、イエスの教を聽かうと會堂に待構へてゐた。

アポロはバプテスマのヨハネの言に從つて人々にバプテズマを授けてゐたが、パウロは其を不滿足

に思つた。十二人許の者が主イエスの名を以てバプテスマされんことを求めたので、パウロは彼等を再びバプテスマしたのである。アポロの授けたのをやり直させたのは少し酷しいとも思はれるが、然しパウロが彼等の上に手を按いた時に、「聖靈が彼等の上に臨んだので、彼らは異言を語り、かつ預言した」とある。彼等はイエスの靈を受けて活きんことを欲し、イエスの教を宣べ、通常人の感知し得ないことまで感じたのである。

一六三　自活傳道

エペソ・五十歳から六十歳

パウロとアポロの行途は初めてエペソで交叉したのであるが、兩者はずつと後になるまで遭はなかつた。そしてアポロは自己獨得の傳道をつゞけたのである。彼はパウロの旅の伴侶ともならず、弟子にもならず、反つてパウロの願ふことも爲ないと云ふ風であつたが、パウロは彼に對して非常に敬意を拂うてゐた。

パウロは會堂を根城にして公然イエスを說き、神の國はユダヤ人ばかりのものではないと論じた。パウロの說教は記錄されてないが、それから間も無くコリント教會に送つた手紙の一節に言ふ。

「主の畏るべきを知るによりて人々に說き勸む。われらは既に神に知られたのである。亦諸君の良心

にも知られたと思ふ。我らは再び己を諸君に薦めるのではない。たゞ我等を以て誇とする機を諸君に與へ、心によらず外貌によりて誇る人々に答ふることを得させやうと爲るのである。我等もし心狂へるならば神の爲である、心慥ならば諸君の爲である。キリストの愛われらに迫るのである。我ら思ふに、一人すべての人に代つて死んだのであるから、凡ての人すでに死んだのである。その凡の人に代りて死に給うたのは、生ける人が最早や己の爲に生きず、己に代りて死にて甦り給うた者のために生きん爲である。されば今より後、われは肉によりて人を知るまい、曾て肉によりてキリストを知つたが、今より後は斯の如くに知ることをしない。これらの事はみな神から出た。神はキリストによりて我らを己と和がせ、かつ和がせる職を我らに授け給うた。即ち神はキリストに在りて世を己と和がせその罪を之に負はせず、かつ和がせる言を我らに委ね給うたのである。」

彼は再びアクラの家に住んだ、そこは港に近いユダヤ町で、エペソではユダヤ人に特別な待遇が與へられてあつたから、市民としての權利も享有することが出來た。彼等は毎日、ある時は終夜、天幕、袋、水夫のズボンなどに用ふる耐水毛織を拵へて、内、外港に淀泊してをる船にいつて賣捌いては獨立生活の料を得た。

港の沿岸には倉庫もあり、五穀、食油、葡萄酒、麥粉等の商店が軒を列べてゐて袋の需用が多かつた。そこから廣い石道が中央の市場に通じてゐた。此市場は其廣さ其立派さ、有名なもので、周圍に

廻廊をめぐらし、アテネの其のやうに、偉い人々の彫像が一ぱい建つてゐた。其高い拱門を通つて、五穀はエジプトから、ガラスと眞鍮はシドンから、絹布、呉服はツロから、葡萄酒に果實はクプロから、食油、皮革、馬、奴隷、寶玉類は綠の山々の彼方或は海外から入つて來た。場内には市の豪商達の店が出てゐて、アジアの各地から來た牛馬商や雜貨商達と取引した、通貨は表にローマ皇帝の頭、裏にダイアナの宮のついたエペソの銅貨であつた。また奴隷の賣場には男女青年子女子供まで幾百となく、賣物の記をチョークで足に書付けられて立つてゐた。こゝは世界中でも最大きな奴隷市場であつたのである。片方には銀細工屋や彫刻屋の店が出てゐて、ダイアナの宮の模型を銀、眞鍮、大理石溶岩、磁器、粘土、木材などで作つて、外國人に澤山賣付けてゐた。

此市の人は派手好きで各種の色の薄物を纏ひ、街上の手品師や輕業師のすることを見物し、ペテン師、香具師、の話に耳傾け、奴隷の歌に聞き惚れてゐた、舞踊や音樂を好んだが、それでもコリント人ほどには墮落してゐなかつた。

市の大きなことは市民の誇であつた。丘の一方を切開いて作つた世界一の劇場も誇であつた。そこの青天井の下に大きな帽子や日傘をきて幾千の人々が芝居を見た。競技場や、並木と彫像に飾られた堂々たる大道や、内港や運河や、山から引いた水道の設備や、神殿、御殿や、市民の誇は澤山あつたが、然し最誇としたのはダイアナの大神殿で、其はコレサス山上優勝の地を占め、市壁の外、市の東

にあたり、圓柱の參宮道が其間を連絡してゐた。

一六四　黑いダイアナ

エペソ・五十歳から六十歳

エペソ市民は偶像禮拜者で、「宮守」と云ふ市の別名の付いてゐるのを喜んでゐた、ダイアナの神殿が一千年以上も同じ處に建つてゐたからである。パウロの來る前四百年、アレキサンダー大王の生れた時、神殿が一夜のうちに灰燼になつた。けれどもアジヤの婦人達は寶石を、男子達は指環をと云ふ調子で金銀を寄進し、最美しい新しい神殿が、マケドニヤ人デノクラエスの設計の下に建立せられたのである。パウロの見たのが其であつた。

樫、絲杉、白楊、プレーン樹、桃金孃、老利兒等の大森林が之を取卷いて、石垣を其外に廻らし、昔のウエストミンスター等のやうに、避難所と呼ばれてゐた、宮が竣工した時に最高塔からペルシヤ王が矢を放つて、ダイアナの宮の周圍此矢のとゞく境まで逃込んだ者を追跡してはならぬと宣言したからである。但し助の最必要な奴隷達は、こゝに避難することを許されなかつたのだから、ペルシヤ王の美しい響のする言も餘り難有はない。

此密林の中央に、內垣に圍まれて立つ大白亞神殿は、眩きばかりの圓柱二重に列び、其に支へられ

た低い廣い屋根は中央が高く棟になつてゐた。パウロが此偶像の宮に參つたとは思はれぬが、市に來た人は先づ四方にある十四の廣い大理石の階段を上つて、根元に等身大の男女の群像を刻んだ大圓柱の處に行つた。エルサレムの神殿と同樣、參詣者は先づ足を洗つて裸足のまゝ圓柱の間を通り、彫刻の施された絲杉板の大扉を過ぎて、外室に入るのであつた。そこに立つて見ると、金、銀、眞鍮、さては白、眞紅、綠、紺あらゆる色の大理石の、世界一流の彫刻家の手になつた彫像が立列んでゐた。就中主なるものは、此大神殿の爲にローマに請願に行つたアルテミドラスの金の像であつた。壁には肖像畫もかゝつてゐたが、「アレキサンダー大王雷神を摑むの圖」は、十字街上に立つてゐる彫像ほどの出來榮では無かつた。

神殿の內には、尊貴い像の禁室が有つた。其天井は西洋杉板で張つて金を塗り、碧玉の圓柱が之を支へてゐた。(今はコンスタンチノープルに在る。)四壁には王候から寄せた寶物を飾り、プラキシテルスの業になつた美しい祭壇が据えられ、其後に、エルサレムのと同じく、紫地に刺繡をした緞帳が屋根から色石の床まで垂れてゐた。神官や神女は禮拜者が、緞帳の後に安置されてある婦人の粗彫の木像を見ないやうに番をしてゐた。其神像には子供の持つ人形のやうに赤や白のリボンが一ぱい飾つてあつた。リボンを飾るよりも先づ一度洗つたらよささうに見えたほど眞黑になつてゐて、黑葡萄か、黑シダーか、それとも黑檀か、切つて見る亂暴者も無いので分らなかつた。奇妙なのは、此黑い偶像

に着物をきせる役は神女であつた。此像は星の世界から落ちて來たもので、此上なく貴いものである
と云はれてゐたが、何處からそんな傳說が起つたのかは分らない。是から取られた複寫像は、非常に
美しい婦人で、波打つ髪の上には城形の冠をかむり、動物や妙な文字のついた輕羅を四肢に纏ひ、足
のところに蜜蜂が付けてある、蜜蜂は、エジプトの猫や狐のやうに、ダイアナの使であつた。尙ほ此
偶像室の後が一層大切な處で、卽ち宮の寶物庫であつた。アジヤ地方の人民は此暗い部屋を最安全な
銀行だと考へてをり、諸國の王達は奪略するに是程結構な處はないと思つてゐた。
葡萄樹の梯子を上ると宮の廣い屋根まで達することが出來て、避難所の矢の放たれた破風があつた、
そこから見ると、下の道も立像も見えないほど密接して植えられてゐる神苑の樹々の梢が綠の波を打
たせてゐた。遙に眼を放てば、市の屋根から、市外の花園、果樹園、田畑、平野、更に遠くは森に包
まれた山々の輪廓、空馳する雨雲、地を走るその影まで眺望するを得た。

一六五　ツラノの學舍

エペソ・五十歳から六十歳

パウロがエペソに來たのは秋、紅葉散り敷き、赤い果實は枝から取られ、黑い葡萄は酒に變り、皮
革袋に入れて冷藏室に貯藏したり、遲い船で海外に輸出する頃であつた。彼が町に出て見ると人々は

雜踏して諸の宮に詣で、或は踊り、或は飲み食ひ、途上では神主どもに、收穫祭に來るやうにすゝめ
られてゐた。やがて冬が來て、高い山々は白いもので被はれ、谷には大雨肺然として臻り、平野は湖
水、河川氾濫して大洪水となり、雹の暴風雨、電雷の雨は、港の內に春まで船舶を一ぱいに閉籠めた。
冬の三ヶ月、會堂で每安息日、パウロが何を說いたか、記されてないが、彼がローマに在るユダヤ
人に書いた手紙の一節に云ふ、
「されば何をか言はう、恩惠の增さんために罪のうちに止るべきか、決して然うでない。罪に就て死
んだ我らは爭で尙その中に生きやうか。諸君知らぬか、凡そキリスト・イエスに合ふバプテスマを受
けた我等はその死に合ふバプテスマを受けたことを。我らはバプテスマによりて彼と共に葬られ、そ
の死に合されたのである。これキリスト、父の榮光によりて死人の中より甦へらされ給うた如く、我ら
も新しき生命に步まん爲である。我らキリストに接がれて、その死の狀にひとしければ、その復活に
も等しいであらう。我らは知る、われらの舊き人、キリストと共に十字架につけられたのは、罪の體
ほろびて、此ののち罪に事へない爲であることを。そは死にし者は罪より脫れるのである。我等もし
キリストと共に死んだならば、また彼と共に活きんことを信ずる。キリストは死人の中から甦つて復
死に給はぬ、死もまた彼に主とならぬことを我等は知つてをる。その死に給へるは罪につきて一たび
死に給うたので、その活き給へるは神につきて活き給うたのである。斯のごとく諸君も己を罪につき

ては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスに在りて活きたる者と思へ。」

彼の說敎に感じて信者になつたユダヤ人も有つた。然しこんな好況はいつまでも續かなかつた。

パウロは未だ曾て會堂全體の人を信者にした事は無かつたが、こゝでもさうは行かなかつた。會堂の主立つ人々は、もう神に事へる新しい道については十二分に聞いたと思つた、そしてパウロの言を傾聽してばかりは居ず、彼の敎に反對し、議論を鬪はすやうになつて、遂に破裂が來た。別に暴動や喧嘩が起つたわけではないが、コリントであつたやうに、クリスチャン等は會堂から分離して、哲學の敎授であつたツラノの講義堂に行つた、敎授は彼等の爲に講義堂を開けてくれたのである。午前はツラノが異邦の哲學を講じ、午後はパウロが活ける神とイエスの新しき道を聽かんと欲する凡の人に向つて基督敎を說いた。彼が後に送つた手紙に左の如くある、

「諸君は前には咎と罪とによりて死にたる者であつて、この世の習慣に從ひ、不從順の子等のうちに今なほ働く靈の宰に從うて歩んだ。我等もみな前には彼らの中にをり、肉の慾に從ひて日をおくり肉と心との慾するまゝをなし、他の者のごとく生れながら怒の子であつた。されど神は憐憫に富み給ふが故に、我等を愛する大なる愛を以て、咎によりて死にたる我等をすらキリスト・イエスによりてキリストと共に活かし（諸君の救はれたのは恩惠による）共に甦へらせ、共に天の處に坐せしめ給ふのである。これキリスト・イエスによりて我らに施し給ふ仁慈を以て、其の恩惠の極めて大なる富を、來

らとすんる後の世々に顯さん爲である。諸君は恩惠により、信仰によりて救はれたのである。是れ己によるのではない、神の賜物である。行爲に由るのではない、これ誇る者の無いやうにせられたのである。我らは神に造られた者で、神が預め備へ給うた善き業に歩むべく、キリスト・イエスの中に造られたのである。」

會堂のユダヤ人等は、クリスチャンが去つたのに滿足して別に追求も迫害もしなかつたやうである。かくてあまり酷しくも無いエペソの邊の冬寒もいつしか過ぎて、遠くの山の雪は溶け、流の傍の歡木林は青い葉を吹き花をつけ、巴旦杏やミヲソテスの强い芳香野に滿つる春が來た。すると諸方の神苑、山の腹、絶壁、到る處、澤なる青葉、ハコヤナギの黃色がかつた綠から遠くの松林の紺碧に至るまで、美しく風に搖ぐのであつた。黃色い湖と川、藍色の鮮な山々、アネモネや金盞花の燃ゆるが如き紅戎氈は、ケイストル沿岸の平野に輝いた。森に夜鶯や野鳩の鳴聲、天空高く鶴の叫聞ゆる頃になるとエペソの市中は、パウロが傳道旅行中他に見た事のない大きな放肆な氣狂じみた歡樂場と化するのであつた。

一六六　偶像の誕生日

エペソ・五十歳から六十歳

太古、神宮達は五月の廿五日を雪白の神殿に鎭座する黒人形ダイアナの誕生日と定め、クリーム色の花、水々しい草花咲き亂れ、天最も澄みて風いと溫和な香しい春の候、エペソ市は大祭を守り歡樂、亂舞の宴を開くと云ふ、彼等自ら其先導となつてやるのが例であつた。自由市であつたから、市役所の役人も、市會も、町奉行も法官、法庭に至るまで皆市民によつて定められてゐた。そこで諸神の五月祭は古くから行はれてゐて、殊に其爲に十人の委員を代表的富豪中から選任し、三日に亘る祭禮萬般の事務統卒の責任を負はせた。此三日間は凡て休業し、市民は神社に參詣し、競技を見物し、御馳走に腹つゞみを打つほか何もしなかつたのである。毎朝薔薇色の曙光と共に、廣大な競走場、それよりも廣い戸外劇場は、市民ばかりではない、アジヤの各地から海陸の道を急いで五月の大祭見物に集つて來た無數の人々を以て滿たされた。競走は競馬、徒競走、軍車競走があり、人間と野獸との鬪には、拔刀を提げて待構へてをる鬪士を目がけて黃色い砂の敷かれた廣い鬪場の檻の一方から放たれた猛獸が突進して來るのを擊殺すのであつた。

毎日ダイアナと彼女の牡鹿の金、銀の三十の像が、ローマの豪商サルタリスによつて神殿に獻納されたが之を運んだ大行列神殿の石段を降り、神苑を過ぎ圓柱立列ぶ參宮道をマグネシアン門から群衆堵をなす市中に入り、宏大な劇場へ、それから引返して市中を練り、コレシア門から市外へ、再び神殿に歸るのであつた。星が暗い市の空に輝き始めると、パウロは白い衣を着た神官の大夜行列があつ

て、黑い髮を垂れた神女達之に隨ひ、更に神殿付の奴隷、男女少年少女が尾を曳くのを見たであらう。鐃鈸の響、太鼓の音、喇叭の聲に合せて、此等の人々が街上を環を畫きながら、ダイアナの萬歲を叫びながら踊り狂うて行く、其傍には奴隷が手に松の木の炬火を翳して、踊手の顏を照してゐた。パウロは、こんなにして誰も彼も白い大神殿に詣でゝあらん限りの宴樂を神苑で享樂する間には邪淫な黑偶像を祭る序に各自がどんなに墮落して行くであらうと考へた。

パウロの胸は怒と憐憫に燃えた、途行く人を呼止めて死ねる者を棄てゝ活ける神を拜めと勸める彼の聲は鋭かつた。天氣はよし、風は暖、市民は既に彼を知つてゐたので、市場でも自由に宣教が出來た。何を教へたか、云ふまでも無く彼はアテネ人に教へたところを反覆した、人の手にて製られた美しい像は神ではない、大理石眞鍮、或は木の塊に過ぎない。勿論神社で生活してをる人々は彼の教を喜ばなかつた。

神官達は人々が犧牲として神殿に捧げた家畜の肉を肉市で賣捌いた、無料で貰つたものだから安くで賣つた、で貧乏人達は喜んで其を買うたものである。然しキリスト教會に入つた人々は此樣な肉を食うてもよいのか惑うてゐた。パウロは次のやうな教を彼等に與へたであらう、是は彼がエルサレムでヤコブ等と取結んだ妥協を放棄してコリントの教會に書送つたものである。

「偶像の供物に就きては我等みな知識あることを知る。知識は人を誇らせ、愛は德を建てる。もし人

自ら知れりと思はば、知るべき程の事をも知らぬのである。然し人もし神を愛せば、その人は神に知られてをるのである。偶像の供物を食ふことに就きては、我ら偶像の世に無き者であることを知り、また唯一の神の外には神なきことを知る。神と稱ふるもの、或は天に或は地にありて、多くの神、おほくの主あるが如くであるが、我等には父なる唯一の神あるのみ。萬物これより出で、我等も亦これに歸する。また唯一の主イエス・キリストあるのみ。萬物これに由り、我等も亦これに由るのである。されどみなの人が此知識があるのではない。或人は今もなほ偶像に慣れ、偶像の獻物として食する故に、その良心弱くして汚されるのである。我等を神の前に立たせる者は食物ではない。されば食するも益なく、食せざるも損はない。されど心して諸君の有てる此自由を、弱き者の躓物とするな。人もし知識ある諸君が偶像の宮で食事するを見たならば、その人弱ければ、良心そゝのかされて偶像の獻物を食ふことになる。

「さらばキリストが、代りて死に給うた弱き兄弟は諸君の知識によりて亡びるであらう。かくの如く諸君が兄弟に對して罪を犯し、その弱き良心を傷めさせるのは、キリストに對して罪を犯すのである。この故に、もし食物が、わが兄弟を躓かせると云ふことであれば、兄弟を躓かせぬ爲に、我は何時までも肉を食ふまい。」

一六七　市から町へ

エペソ・五十歳から六十歳

軟風心持よい春もやがて暮れて、暑い夏が訪れて來ると、市の人々は、樹陰を求め、街路を日除で覆うた。エペソの夏は暑氣酷しく、殊に山から來た者には堪え難かつた。而も奴隷達は日も除けずに畑に水をやり、樹や花園に水を撒き、船から或は船へと重荷を運んでゐた、奴隷使は日陰に立ち、手に長い鞭を持つて彼等を監督してゐた。昔から、鞭と笞は重荷を負ふ獸と勞役する奴隷には附物であつた。

パウロは市内丈けで滿足せず、自分で、また人を使はして、四方に通ずる道路に沿うた村々に傳道を試み、偶像を棄てゝ活ける神を拜むことを勸めた。その結果基督教會が、百姓、果實業者、飼羊者の住む廣さ數百哩に亘る豐饒のメアンダー、ヘルマス兩河流域の各村、及び、スミルナ、ラオデキヤ、コロス、ヒエラポリス、サルデス、ヒラデルヒヤ、ペルガモ、テアテラ等、一週間以内で達し得る各町に組織せらるゝに至つた。パウロの敎はアジヤの地二百哩に擴まり、其邊のユダヤ人もギリシヤ人も、福音を聞かない者はないとパウロが自稱することの出來たほどである。

暑い夏の間、パウロは家の内よりもむしろ戸外の樹陰涼しい處で說敎したであらう。村などでは集

會の爲に廣い部屋は得られなかつたのである。種々な色に染めた衣をきて樹陰に、或はあふれて炎天ほしに合ひながら、村の人々は、旅のユダヤ人の日に焦けた顏輝く眼を見つめ、生命あるその熱辯に傾聽したことであらう。

「諸君心せよ、恐くはキリストに從はず人の言傳と世の小學とに從ひ、人を惑はす虛しき哲學を以て諸君を奪ひ去る者があるであらう。そもそも神の滿足れる德はことごとく形體をなしてキリストに宿つてをる。諸君はキリストに在りて滿足つてをる。キリストは凡の政治と權威との首である。諸君はまた彼に在りて手を以て爲ない割禮を受けた、卽ち肉の體を脫ぎ去るキリストの割禮である。諸君はバプテスマを受けた時キリストと共に葬られ、又かれを死人の中から甦へらせ給うた神の活動を信ずるによりて、彼と共に甦らされた。諸君は前には諸般の咎と肉の割禮なきとによりて死んだ者であつたが、神は諸君を彼と共に生かし、我等の凡ての咎を赦し、かつ我等を責むる規の證書すなはち我等に逆ふ證書を塗抹し、これを中間より取り去りて十字架につけ、政治と權威とを褫きて之を公然に示し、十字架によりて凱旋し給うた。

「されば諸君、食物あるひは飲物につき、祭あるひは月朔あるひは安息日の事につきて、誰にも審かれるな。此等はみな來らんとするものゝ影であつて、其の本體はキリストである。殊更に謙遜をよそほひ御使を拜する者に諸君の褒美を奪はれな。かゝる者は見た所のものに基いて肉の念に隨ひて徒ら

に誇り、首に屬くことを爲ないのである。全體はこの首によりて節々維々に助けられ相聯り、神の育てにて生長するのである。諸君もしキリストと共に死にて此世の小學を離れたならば、何ぞなほ俗世に生ける者のごとく人の誡命と敎とに循ひて『捫るな、味ふな、觸るな』と云ふ規の下に在るか。これらの誡命は定められた禮拜と謙遜と身を惜まぬ事とによりて智慧あるごとく見へるけれども、實は肉慾の放縱を防ぐ力が無い。」

これは彼がコロサイの人々に送つた手紙の一節であるが、此樣な手紙は諸所の敎會に送られたらしい。恰度此頃コリントの友人等に一書を認めたらしいが、其も失はれて殘つてゐない。エペソとコリントとの間には商船の交通が頻繁であつたからパウロはコリントの消息、殊にアポロの下に敎會が導かれてをる事を聞いたが、不滿足な點もあつた。コリントの敎會員達は、まだ從來の偶像敎の舊慣から脫し得ないでゐた。パウロは特に結婚問題について意見を書送つたが、彼等は、パウロが結婚してはならないと敎へたやうに誤解して、質問を寄越したりした。

パウロの氣を配らなければならぬ敎會は數を增し、答ふべき問題は殖えた。信徒が過に陷り、殊に異敎の祭禮や宴樂に加はつたりすると彼の心は痛んだ。かくて身自ら說敎し、時には歡迎せられない處までも出掛けて行つて敎を宣べる仕事の上に、手紙を書いたり、傳言したり、質疑に應答したりする事が彼の重荷となつた。

處の不明な一の手紙はテトスに宛てたものである。テトスは十二年前アンテオケにゐた人物である。爾來彼は諸方を巡つて基督教を宣傳してゐた。其間パウロと出會つた事は記してないが、時々は逢うたのであらう。パウロは其手紙の中に、テトスをクレテ島に遺しておいたと記してをるが、其は航海の途中クレテでテトスに會うた意味にも、テトスをクレテに行くやう命じた意味にもとれる。テトスは同島のクリスチャンを指導する任に在つたかの如く、パウロは彼に忠告指導を與へ、テモテに對するやうな態度で教へてをる。その梗概を左に記して、諸君が同書簡を一讀せらるゝ事をすゝめる。

パウロは若いギリシヤ人テトスを基督教徒として眞の子であると言つてをる。彼はテトスをクレテに遺して、缺點無く、能力ある役員達と共に教會を正し、「恥づべき利を得んために……ユダヤ人の昔話と眞理を棄てたる人の誡命とを教ふる者共」に注意を怠らぬやう命じた。パウロの生れる六百年前書物を書いたクレテ人エピメニデスは、クレテ人のことを「クレテ人は常に虛僞をいふ者、あしき獸また懶惰の腹なり」と言つたが、パウロが彼を「預言者」と稱したのも面白い。夫婦、兄弟、親子、主從の義務を教へ、司と權威ある者とに服させること、テトスが他から輕んぜられてはならないことも書いてある。パウロはテトスのもとにアルテマスかテキコかを送るつもりである、そして自身は其冬をニコポリで過すから會ひに來いと記してをる。教法師ゼナスとアポロの旅をねぎらふやうにすゝめてをる。そして凡の信徒に對する挨拶を書いてどこに居やうとも此老使徒を師表と仰ぐ若い友への

個人的教訓の筆を措いてをる。

一六八　短い船路

コリント・五十歳から六十歳

コリント教會の樣子が、パウロには心配になつて來た。三通も手紙を送られた教會はコリント丈けであつた。此頃パウロは、僅の滯在ではあつたが、コリントを訪ねたと信ぜられる。時は冬の暴風が過ぎて、船脚しげく兩都の間をかける春の候であつたらう。後に送つた手紙から察すると何か嚴しく言ふべき事が有つたのであらう。パウロはゆらるゝ船に立つて、再た、船がスニアムの岬を廻るころダイアナの白い宮を視たであらう。再た、アテネの上のミネルバの兜が、日光に燃え立つてゐたであらう。再たパウロは敷石道を上つて、かのユダヤ會堂の隣なるユストの家に入り友達の間に立つたであらう。次に錄するは其後で此教會に送られた手紙の一部である。教會の人々は此時も、熱烈火の如きパウロの口から是れに似た說教を聽かされたに相違ない。

「現に聞く所によれば、諸君のうちに淫行があると云ふ。而してその淫行は異邦人の中にも無いほどであると云ふことである。……我が前の書面で淫行の者と交るなと書き贈つたのは、此世の淫行の者または貪欲の者、奪ふ者、また偶像を拜む者と更に交るなと言ふのではないが、特に兄弟と稱ふる者

の中にあるかゝる人々と交ることなく、共に食する事だにすなとの意である。……惡き者を諸君の中から退けよ。

「諸君のうち互に事あるとき、之を聖徒の前に訴へないで正しくない者の前に訴ふることを敢てする者があらうか。……諸君に審くべき此の世の事のあるとき、教會で輕しむる所の者を審判の座に坐らせるか。わが斯く言ふは諸君を辱しめん爲である。諸君のうちに兄弟の間のことを審き得る智きもの一人もなく、兄弟は兄弟を、而も不信者の前に訴ふるか。互に相訴ふるは既に當しく諸君の失態である。何ゆゑむしろ不義を受けぬか。何故むしろ欺かれぬか。然るに諸君は不義をなし、詐欺をなし、兄弟にも之を爲す。諸君知らぬか、正しからぬ者の神の國を嗣ぐことなきを。自ら欺くな、淫行のもの、偶像を拜むもの、姦淫をなすもの、男娼となるもの、男色を行ふ者、盜するもの、貪欲のもの、酒に醉ふもの、罵るもの、奪ふ者などは、みな神の國を嗣ぐことはないのである。諸君のうち、さきに斯のごとき者があつたが、主イエス・キリストの名により、我等の神の御靈によりて、己を洗ひ、かつ潔められ、かつ義とせられることを得たのである。

「一切のもの可くないと云ふものも無いかはり、一切のものが德を建てるのではない。各人自分の益を求めることなく、人の益を求めよ。すべて市場で賣る物は良心のために何をも問はないで食せよ。そは地と之に滿つる物とは主の物であるからである。もし不信者に招かれて往かば、凡て諸君の前に

置く物を良心のために何をも問はないで食せよ。人もし此は犧牲にした肉であると言はゞ、告げた者のため、また良心のために食すな。良心とは君の良心ではない、かの人の良心を言ふのだ。何ぞわが自由を他の人の良心によりて審かれる事をしやうか。もし感謝して食することをせば、何ぞわが感謝する所のものに就きて譏られる事をしやう。さらば食ふにも飲むにも何事をするにも凡て神の榮光を顯すやうに爲よ。ユダヤ人にもギリシヤ人にも、また神の教會にも躓物となるな。我も凡ての事を、すべての人の心に適ふやうにカめ、人々の救はれんために、己の益を求めないで、多くの人の益を求めるのである。我がキリストに効ふ者なる如く、諸君も我に効ふ者となれ。

「愛を追ひ求めよ、また靈の賜物、ことに預言する能力を慕へ。……智惠に於ては子供となるな。惡に於ては幼兒となり、智惠に於ては成人となれ。異言を用ふるは不信者のためであり、預言は信者の爲である。もし全教會一處に集れる時、みな異言で語らば、凡人または不信者いり來るとすれば、諸君を狂へる者と言ふであらう。然し若しみな預言せば、不信者または凡人の入りきたるとき、會衆のために自ら責められ、會衆のために是非せられ、その心の秘密あらはるゝ故に伏して神を拜し『神は實に諸君の中に在す』と言ふであらう。

「諸君の集る時はおの〳〵聖歌あり、教あり、默示あり、異言あり、釋く能力あり、みな德を建てん爲にすべきである。もし異言を語る者あらば、二人、多くとも三人、順次に語りて一人これを釋け。

もし釋く者なき時は教會にては默し、而して己に語り、また神に語れ。預言者は二人もしくは三人かたり、その他の者はこれを辨へよ。もし坐しをる他のもの默示を蒙らば、先のもの默せよ。

「諸君は皆すべての人に學ばせ勸を受けさせるために一人一人預言することが出來る。預言者の靈は預言者自制せよ。それ神は亂の神ではない。平和の神である。人もし自己を預言者とし、或は御靈に感じたる者と思ふならば、わが諸君に書き送る言を、主の命なりと知れ、知らないと言ふなら知らないに任せよ。されば我が兄弟よ、預言することを慕ひ、また異言を語ることを禁ずるな。凡ての事よろしきに適ひ、かつ秩序を守つて行へ。」

パウロはアポロに逢うたかも知れぬが、勿論彼を非難する爲ではなかつた。パウロは廣大な土臺を据え、アポロは其上に建築しつゝあつた。コリント教會の狀態は安心が出來なかつたが、永逗留も出來ないので、間もなくエペソに歸つた。

一六九　呪文師の書物を火中して

エペソ・五十歳から六十歳

エペソの人々はコリントの人達よりもパウロを崇拜した。エペソは魔法師、賣卜者、呪文師、占星學者、八卦者、易斷者、豫言者、百合師、香具師など一ぱい居て市民を欺瞞し、宗教に名を藉つたり

ほんの娯み半分、惡戯として金錢を儲けてゐた。不思議を行ふ者だと自稱するのが多くあつた。恰も今日の印度のやうに、中には隨分賢いのが居て、凡人から見れば不可能と思はれるやうな手品を使つて奇蹟だと稱してゐた。そして不思議が行へるのだと言つて護符や呪文を賣つた、目的は云ふまでもなく金を儲けること、權力を得ることであつた、さうすると神官達は宮に人が集るから、また骨董品や寶石を賣る者、各種商人達も店頭に客が群るので、彼等の馬鹿商賣を歡迎した。寶石屋等は珊瑚の頸飾、小珠の腕環金銀の踝環、指環、それから珍石を彫刻して、ダイアナの小像を作つた。其に魔法師が呪文や形などを彫らせて、魔除けの護符につくらせたのである。子供は皆その頸飾をつけて、惡者の眼を避けるまじなひとした。此邊の母親は、今でも英國人などに子供が睨れたら、護符をかけてゐなければ危いと信じてをる。

パウロ時代には一般に羊皮紙に無意味の呪文を記したものを持つてゐて、腕に卷くか、飲む水に漬ければ、其で萬病を癒すと信じてゐた。星を占ふ者は、僅の謝禮で、人の將來を卜し配偶者を豫言して、愚な人々から金錢をむさぼり取つた、此等の呪文を書いた護符はエペソ文字として普く世に知られてゐた。市民は少しでも不思議なこと、解らないことがあれば、何でも奇蹟と信じてゐた。

エペソでは、神がパウロを通して不思議を行ひ給うたとあるが、其事項は分らず、パウロも書簡中に何等記するところが無い。然し迷信深いエペソの人達がパウロの如く偉大な人物、活ける見えざる